郷さゝやきて、吾都近き所にて小き國一つ賜はらば、終に天下に旗を揚げなんに、邊鄙に棄てられたれば、何事か仕出すべき、志の空しく成りぬるに依りて、覺えず涙の流るゝよとぞ語られけると。【葛西】……【大崎】……陸奥に在り。【木村秀俊】……氏郷の副なり、依つて其指揮を受く。【米澤】……【長井】……今の羽前に在り。【方略】……方度策略。手段、手立。【岡崎】……三河に在り。【屏其徒御】……供人を召し連れぬ。【園】……音ギヨ。馬を掌る者、馬の別當。【閭首】……音リヨシユ。閭は里門なり。村の入口。【周馳】……かけまはる。【街巷】……村のちまた。直なるを街と云ひ、横なるを巷と云ふ。【滋息】……增加する、ふえる。【語舊故】……むかしの事を物語る。

【講義】八月に、秀吉は、白河に到著し、淺野彈正少弼、大谷吉隆、石田三成に申し付けて、陸奥、出羽の土地を取り調べしめ、そして、諸の謀臣たちに問うて曰ふには、吾は、一人の大將を擇んで東北地方を鎭撫させやうと思ふが、貴公等は、皆、それには誰が適任であると思ふか、貴公等の見込を申し述べよと曰つた。多くの者の返答は、各々相異なつて居つた。すると、秀吉が曰ふには、皆、間違つて居る。蒲生氏郷で無ければ、其他に適當なる人は無いと曰ひ、そこで、氏郷に、會津の四郡と仙道の七郡とを賜ひ、葛西と大崎とを、木村秀俊に賜ひ、政宗には、舊の領地に因つて、米澤と長井とを賜はつた。そして、秀吉は、氏郷に向つて曰ふには、我が爲めに、東方の門を守つて居つてくれよと曰ひ、因つて、その手段を教へ授け、又、德川、前田、上杉氏に注意して、何か事變のあつたときには、氏郷の應援をさせることにした。かくて、秀吉は、終に、諸軍を整頓して、凱旋して、岡崎に到著した。吉川廣家が、命令を受けて此處を守つて居つたが、そこで、秀吉を迎へて饗應し、翌日、鞍を置きたる馬三百餘匹を秀吉に送つた。秀吉は、其中から一匹の黑い馬を擇び出して、之に乘り、その供廻りを遠ざけて、たゞ吉川氏の步卒栗棲武格と云ふ者が、その別當となり、行いて尾張に入り、秀吉は、路傍の村里を指ざして、武格に向つて曰ふには、これは中村といふ村で、吾が生長した處である。吾は、一たび往つて樣子を見やうと思ふが、汝は、我について行くことが出來るかと曰つた。すると、武格は、謹んで承知いたしましたと曰つた。こゝに於て、秀吉は、馬に乘つて、中村に入り、武格を村の入口に留めて置いて、そして、自身は中に入り、ちまたの間をあまねく駈けまはつて、出で來り、それから、遂に中村の老人どもを召し寄せて、笑つて曰ふには、吾は藤吉であると曰つた。すると、老人どもは、いづれも皆、恐れ入りて、ひれ伏した。秀吉が曰ふには、吾が少年であつた時に比べると、村の樣子が大層整頓して、戶數人口も亦增加したやうに見えると曰ひ、因つて、老人どもに、酒及び物品を賜はり、ともに、昔の事を物語つて、そして立ち去つた。九月に、秀吉は、京都に還つて、事の次第を朝廷に申し上げた。

於是。東國盡定。而伊達政宗心懷觖望。陰誘土兵作亂。少弼豫度陸奥必亂。造十餘砦。留兵守之而西。大谷吉隆猶留。檢田甚急。十月。土兵四起。葛西。大崎亦苦。秀俊之政。叛攻其城。秀俊走保佐沼。告急於氏郷。氏郷卽發。會雪。橇行至井繩。察政宗有異心。遣人促使會師。政宗不得已。出次吉岡。氏郷身往其陣。面議事。政宗大驚。氏郷破賊二壘。乘勝而進。政宗稱疾不從。氏郷行布陣以備之。進破名生壘。政宗追躡。視其陣堅。不敢擊。氏郷乃迎秀俊。置之名生。政宗數謝無他。氏郷使立功自効。乃攻下宮崎城。賊黨悉潰。少弼時至駿河。聞亂卽還。十二月。氏郷欲歸。而慮政宗有變。少弼乃令政宗納質。十九年正月。氏郷取其質。還會津。秀吉得警報。遣秀次赴討。使石田三成促德川公會師。聞氏郷已定亂。則皆途還。閏月。氏郷來京師上狀。秀吉奪木村氏封。予之氏郷。氏郷又獻政宗通賊手書。秀吉怒。馳使召政宗。政宗卽發。二月。至曰。吾自分誅戮也。作貼金磔柱。使人揭前行。及詰問陳謝甚辨。乃示其手書。政宗佯愕曰。其書甚肖。特華押有微異者。驗之果然。秀吉卽釋之。

【字解】【觖望】……音ケツバウ。不滿足。【少弼】……淺野長政。【檢田甚急】……吉隆、檢地を爲すこと嚴密にして、民、其餘地を失ふを以て亂を作す。【佐沼】……陸奥に在り。【橇行】……音ケウカウ。そりに乘つて行く。【井繩】……陸奥に在り。【吉岡】……陸奥に在り。【名生】……陸奥に在り。【分誅戮】……誅殺せられるのは當前であると覺悟する。【貼金磔柱】……貼は音テフ。金箔を塗りたるはりつけ柱。【揭】……かゝげる、高く擧げる。【華押】……音クワアフ。書き判。

【講義】こゝに於て、關東の諸國は、殘らず平定した。しかるに、伊達政宗は、心の中に不滿足に思うて居つたので、ひそかに、土地の百姓一揆を誘うて亂をなさしめた。淺野彈正少弼は、前以て、陸奥が必ず騷動するであらうと思うたので、十餘箇所にとりでを築いて、兵を留めて之を守らせて置いて、西に向つて上つた。大谷吉隆は、まだ其地に留まつて居つて、田地を檢査することが、大層手きびしかつたので、十月に、土地の百姓一揆が四方に起つた。葛西、大崎も亦、秀俊の政治の仕方に對して不平であつて、叛いて、秀俊の居城を攻めた。すると、秀俊は、逃げ走つて佐沼に立て籠り、危急なることを氏郷に告げた。すると、氏郷は、卽座に出發したが、折しも雪が降つたので、橇に乘つて井繩に至り、政宗に謀叛の心のあることを察し、人を遣はして、政宗を催促して軍隊に會合せしめやうとした。政宗は、致しかたなくして、出でゝ吉岡に止舍した。氏郷は自身に政宗の陣に出かけて行き、面會して事を評議したので、政宗は大に驚いた。かくて、氏郷は、賊兵の二つのとり

でを破り、勝つた勢に乘じて進んだ。けれども、政宗は、病氣であると稱して、從はなかつた。氏郷は、大に政宗を疑つて、行〳〵、陣立を布き整へて、以て政宗に備へて置き、そして進んで名生のとりでを破つた。政宗は、氏郷のあとをつけて行つたが、氏郷の陣立の堅固なるを見て、敢て氏郷を擊たうとしなかつた。氏郷は、そこで、秀俊を迎へて、之を名生に置いた。政宗は、野心あることを氏郷に看破されたが、たびたび、他意はありませぬといつて、詫をした。すると、氏郷は、手柄を立てゝ自ら力を致さしたることにしたので、そこで、政宗は、宮崎城を攻め落し、賊の徒黨は、殘らず、崩れた。彈正少弼は、その時に、駿河に到著して、この騷動を聞きつけて、卽座に引き返した。十二月に、氏郷は、歸らうと思うたけれども、政宗が變亂を起しはせぬかと氣遣つた。少弼は、そこで、政宗をして人質を差し出さしめた。天正十九年の正月に、氏郷は、其人質を取つて會津に還つた。秀吉は、事變の報告を得ると、秀次を派遣して赴き討たしめることにし、石田三成をして、德川公を催促して軍隊に會合せしめることにしたが、氏郷が已に騷動を平定したといふ事を聞いたので、皆、途中から引き還した。閏月に、氏郷は、京都に來つて、事の次第を申し上げた。すると、秀吉は、木村氏の領地を取り上げて、之を氏郷に與へた。氏郷は、又、政宗が賊に內通したふには、吾は、自ら、誅戮せられる覺悟で居ると曰ひ、金箔を塗りたるはりつけ柱を作つて、人をして之をかつぎ上げて先に立つて行かしめた。やがて、詰問せられるに及んで、政宗は、大層辯じ立てゝ言ひ譯して詫をした。そこで、秀吉は、政宗が賊に內通したる自筆の手紙を示した。すると、政宗は、佯つておどろいて曰ふには、この文字は私が書いた文字と、大層善く似て居ります。けれども、たゞ、この書き判が、少しく相違して居るところが御座りますと曰つたので、之を調べて見ると、實際左樣であつたので、秀吉は、卽座に之をゆるした。（此手紙が政宗の自筆であつて、且つ政宗が賊に內通したることが事實であることは、秀吉は、十分に承知して居るのであるが、こゝに於て、政宗をゆるした秀吉の遣り方は、實にえらいものである。又、氏郷が政宗に對する處置も、亦、えらいもので、讀者若し蒲生氏郷記などの古書を參看せられるならば、大に益を得られるであらう。）

先是。南部氏族九戸政實叛。氏郷與少弼。攻而下之。是歲五月。復叛據福岡城。葛西。莊內應之。秀吉命秀次赴討。曰。必勦之。使莫復萌。命德川公助之。曰。命卿掌東北三道軍務。其便宜從事。乃奏以政宗爲四位侍從。與氏郷俱爲先鋒。令少弼及堀尾吉晴監其軍。因密諭氏郷曰。吾知政宗反計矣。顧彼膽略可愛。故釋不問。以安反側。事平。則奪其地。予之汝耳。八月。秀次入陸奧。陣三迫。氏郷。政宗攻下五城。上杉氏奉命會師。擊平莊內。諸將遂圍福岡。誘降政實以下魁首三十人。効之三迫。秀次斬以徇。焚殺其餘黨。以秀吉命。徙政宗于葛西。大崎。以其地加賜氏郷。幷食百萬石。遂巡視國內。按據士民。課東邊諸侯。築城大崎。以置政宗。然後歸。

【字解】【福岡】……今の陸奧に在り。【莊內】……今の羽後に在り。【勦】……音セウ。絕つ也。【東北三道】……東海、東山、北陸の三道。【反側】……叛黨を云ふ。うらがへりもの。【三迫】……今の陸前に在り。【按據】……按撫して其地に安堵させること。

【補註】これより先に、南部氏の一族なる九戸政實が叛いたので、氏郷は、淺野彈正少弼とともに、攻めて之を下したが、この年の五月に、ふたゝび、叛いて福岡の城に立て籠り、葛西と莊內とが、之に味方した。そこで、秀吉は、秀次に命じて、出かけて往つて征伐させることにし、そして曰ふには、是非とも之を滅ぼし絕やして仕舞つて、ふたゝび、芽を出すことの無いやうにせよと曰ひ、又、德川公に命令して、秀次を助けさせることにし、そして曰ふには、吾は、貴公に命じて、東北の三道の軍務をつかさどらせるから、便宜にしたがつて事を行へよと曰ひ、そこで、奏上して、政宗を以て四位の侍從とし、氏郷とともに其先鋒となしめることにし、淺野彈正少弼及び堀尾吉晴をして、其軍の目附たらしめ、因つて、內々にて、氏郷に諭して曰ふには、吾は政宗が謀叛の計畫を知つて居る。けれども、おもへば、彼れ政宗の大膽なることは、愛すべきであるので、それ故に、ゆるして其儘にして置き、以て謀叛の連中を安心させるやうにしたのである。事件が平定したならば、政宗の土地を取り上げて、汝に與へるであらうと曰つた。八月に、秀次は、陸奧に打ち入り、三迫に陣取つた。氏郷と政宗とは、五箇所の城を攻め下した。上杉氏は、秀吉の命令に從つて、軍隊に會合し、擊つて莊內を平定した。それから、諸大將は、遂に福岡を圍み、政實以下の首領三十人を誘ひ降參させて、之を三迫の本營に送り屆けた。すると、秀次は是等の者共を斬つて、ふたまはし、その殘黨を燒き殺し、秀吉の命令を以て、政宗を葛西、大崎に徙し、政宗のもとの領地をば、氏郷に加增し、併せて百萬石を領せしめ、それから、遂に陸奧の國內を巡回視察し、士民を撫で安んじて落ちつかせるやうにし、又、東方の邊境の諸侯に割り當てゝ、城を大崎に築き、其處に政宗を居らせることにして、然る後に歸つた。

是歲四月。大納言秀長卒。以秀次弟秀俊爲嗣。襲其封。十一月。秀吉大獵于參河。初秀吉定關西。召松下之綱。賜邑于丹後。及定關東。更賜遠江。伊勢之一萬石。曰。償攘金也。

【字解】【其封】……大和。【償攘金也】……攘は音ジャウ、ぬすむ也。秀吉、はじめ、與助といひし頃、胴丸の鎧を買ふ爲めに預けられし黃金六兩をぬすみ、以て織田氏に仕へしこと、前に詳なり。

【講義】この歳の四月に、大納言秀長は死んだ。秀吉は、秀次の弟なる秀俊を以て跡嗣となし、その領地を相續させた。十一月に、秀吉は、大に三河に於て山獵をした。はじめ、秀吉は、關西地方を平定したときに、松下之綱を召し出して、領地を丹波に賜はつたが、後に關東を平定するに及んで、更に、遠江、伊勢に於て一萬石の領地を賜はつた。そして曰ふには、これは、先年盜んだ黄金のつぐのひをするのであると曰つた。

日本外史講義卷之十五 終

日本外史講義卷之十六

賴襄子成原著

興文社編輯所講義

德川氏前記

豐臣氏中

秀吉之在關東也。遊於鎌倉。觀源頼朝塑像。進撫其背曰。若我友也。徒手取天下。唯有吾與若而已。然若承藉名族。不如吾起人奴也。吾欲遂略地至明。若以爲何如。

【字解】【在關東也】……北條氏を征伐せし時を指す。【塑像】……音ソザウ。塑は、埴と同じ。土をこねて作りし像。【若】……なんぢ。【徒手】……かち手。【承藉】……音ショウシャ。身の依る所を藉と曰ふ。相續して其威望にたよる。

【講義】秀吉が北條氏征伐の爲めに關東に居つたときに、鎌倉に遊んで、頼朝の像を觀たが、その時に、秀吉は、進んで、さも親しげに其像の背を撫でゝ曰ふには、御前は吾が友である。から手を以て天下を取つた者は、昔から、唯だ吾と御前とだけである。けれども、御前は、源氏と云ふ名高い家を相續して其家の威望にたよつたのであつて、吾が人の下部から起つたのには及ばぬのである。吾は、これから遂に明國までも土地を切り取ちうと思ふのであるが、御前は、どう思ふか。吾は、えらいでは無いかと曰つた。

初秀吉爲織田氏徇山陽。請攻韓及明。後常思成其志。明主嘗與足利氏修好。而韓兩屬其間。常奉朝貢於我。及足利氏衰。我西南海盜。數侵明境。

明韓皆與我絕。而海賈互市不絕。我對馬島距韓甚邇。島主宗氏。世置吏于韓釜山浦。至豐臣氏時。明民或有來投者。秀吉聞明主朱翊鈞失政。武備不具。益思窺之。其定幾內。以橘康廣嘗語韓事。擢爲使者。徵朝貢于韓。不得要領而返。秀吉疑其與韓有私。族誅之。及定西海。宗義智送款焉。秀吉命掌使事。將伐關東。遂遣義智與僧玄蘇往韓。會琉球入貢。秀吉屬其國。求通於明。曰。明不聽我言。我當發兵伐之。琉球王尙寧告之明。明不聽。義智至韓。韓王李昭。乃使其大臣黃允吉。金誠一。隨而入貢。

【補注】【徇山陽】……毛利氏を征せしを云ふ。【明主嘗與足利氏修好】……應永八年、足利義滿、私に使を明に遣はす。明主、義滿を日本國王に封ず。永享二年、義教、又、使を遣はす。明使聘報す。義政も亦使を遣はす。【兩屬其間】……我が日本と明とに、ふたまたに附いて居る。【邇】……近し。【世置吏于韓】：嘉吉三年、宗貞盛・始めて修約を定むと云ふ。【明民或有來投者】……歇人汪直、五島に來る。秀吉、其黨を召して明の事を問ふと云ふ。【不得要領】……要は衣腰なり、領は衣領なり。要と領とを持ちて衣を擧ぐるが如く、肝要の報告を得るを、得要領と云ふ。然らずして、しめくゝりの付かぬを、不得要領と云ふ。【族誅之】……懲悲錄に云はく、蓋し康廣、其兄康年と、源氏の時より我が國（卽ち韓）に來朝し、職名を受く。其言頗る我が國地の爲めにす。故に秀吉に害せらると云ふ。【將伐關東】……北條氏を征伐せんとする也。

【考證】はじめ、秀吉は、織田氏の爲めに、山陽道を平定せんとて出掛けたときに、後日に朝鮮及び明を攻めたいと信長に請うたことがあるが、其後、平生、其志望を成就しやうと思うて居った。明主は、以前に足利氏と好を修めて交通したことがあり、そして、朝鮮は、我が日本と明と兩方に附き從って居って、常に、我が國に入朝して貢物を獻じて居ったのである。其後、足利氏が衰へるに及びて、我が國の西南地方の海賊が、たびく、明の國境を侵したので、明も朝鮮も、いづれも皆、我が國と交通を絕つことになった。けれども、船乘り商人の貿易は斷絕しなかった。我が對馬の島は、朝鮮を去ること、大層近かったので、對馬の島主宗氏は、代々、役人を韓の釜山浦に置いた。豐臣氏の時に至りて、明の人民で、或は我が國に來って歸化した者も有って、秀吉は、明主朱翊鈞（卽ち神宗）が政治上に失策が多くして、軍事上の守備も整うて居らぬといふ事を聞いたので、秀吉は、ますく、之を窺はうと思うて居った。秀吉が畿內を平定したときに、橘康廣が、嘗て朝鮮の事情を諳んじ知って居ると云ふので、康廣を拔き上げて、使者となし、入朝して貢物を差し出すことを朝鮮に催促したけれども、事のきまりが附かずして、引き返して來た。秀吉は、康廣が朝鮮と秘密の關係があるのだらうと疑って、康廣の一族を殘らず誅戮した。秀吉が西海道を平定するに及びて、對馬の島主宗義智が降服したので、秀吉は、義智に申し附けて、朝鮮への使者の事をつかさどらせた。秀吉が、まさに關東を征伐しやうとするときに、遂に義智と僧の玄蘇とを派遣して、朝鮮に往かしめることにした。折しも、琉球が、入朝して貢物を獻上したので、秀吉は、琉球國に賴んで、明に交通することを求めて、そして曰ふには、明が若し我が言ふ事を承知しなかったならば、我は、兵を繰り出して明を征伐すべきであると曰った。かくて、琉球王尙寧は、之を明に告げたけれども、明は承知しなかった。やがて、義智が朝鮮に至ると、朝鮮王李昭（宣祖）は、そこで、其大臣なる黃允吉と金誠一とをして、義智に隨って、我が國に入朝し貢物を獻上せしめた。

秀吉既至。自伐關東。見韓使者。乃命史作書以答之。曰。日本豐臣秀吉。謹答朝鮮國王足下。吾邦諸道。久屬分離。廢亂綱紀。阻格帝命。秀吉爲之憤激。被堅執銳。西討東伐。以數年之間。而定六十餘國。秀吉鄙人也。然當其在胎。母夢日入懷。占者曰。日光所臨。莫不透徹。壯歲必耀武八表。是故戰必勝。攻必取。今海內既治。民富財足。帝京之盛。前古無比。夫人之居世。自古不滿百歲。安能鬱鬱久在此乎。吾欲假道貴國。超越山海。直入于明。使其四百州盡化我俗。以施王政於億萬斯年。是秀吉宿志也。凡海外諸蕃後至者。皆在所不釋。貴國先修使幣。帝甚嘉之。秀吉入明之日。其率士卒會軍營。以爲我前導。因遣平調信。玄蘇與偕。韓王得書疑懼。誠一以爲虛喝。王使之私饗一人。探其情實。調信曰。我主欲通明。明不答禮。故欲伐之耳。貴國盍居間和解之。誠一依違。玄蘇厲聲言曰。今日之議。

不得首鼠兩端。不欲講和。乃欲戰耳。因辭訣返。韓始懼。稍修邊備。明亦聞之。申嚴海防。天正十九年。夏。秀吉復遣義智責昭。在釜山旬餘。不得報。怒而返。秀吉志益決。

【字解】【史】……文書係の役人。【阻格】……音ソカク。阻は隔つる也、格は拒ぐ也。へだてふせぐ。【被堅執銳】……堅き甲冑を被り銳利なる刄物を執る。【懷】……ふところ。【透徹】……音トウテツ。とほして差し込む、つらぬく。【壯歲】……年三十を壯と曰ふ。【八表】……表は外なり。八方と云ふが如し。【耀】……かゞやかす。【鬱鬱】……音ウツウツ。氣のふさぐこと。思、胸中に滿ちて氣のむすぼれること。【億萬斯年】……斯は語助。詩に此例多し。【諸蕃】……諸種の蕃夷。【在所不釋】……うちすておかぬ。必ず討伐するを云ふ。【平調信】……宗氏の老臣柳川豐前守。【虛喝】……音キヨカツ。喝は詞なり。恐喝の辭を作し以て相脅す也。からおどし。【情實】……本當の事情。【依違】……あたらずさはらず。【首鼠兩端】……鼠の性疑ひ多くして、行くときに一行一却す。故に兩端を持するを首鼠兩端と云ふ。進むべきか退くべきかに逃うて心の決定せざること。【申嚴】……重ねて嚴重にすること。【天正】……正親町帝の時の年號。

【講義】かくて、秀吉は、關東の北條氏征伐から歸つて來て、朝鮮の使者に對面した。そこで、文書係の役人に申し付けて、書面を作らせ、以て朝鮮の書面に返答した。其文面に曰ふには、日本の豐臣秀吉が、謹んで朝鮮國王足下に答へる。吾が日本國の諸道は、久しく、群雄割據して、分れ〳〵になつて居つて、朝廷の綱紀を廢し亂し、天子樣の御命令を隔て拒いで居つたのであつた。秀吉は、之が爲めに憤り激して、堅き甲冑を著、銳き刄物を手に執つて、西を討ち東を伐ち、わづかに數年の間を以てして、我が日本全國六十餘國を平定した。元來、秀吉は、鄙賤に生れた者である。けれども、秀吉が母の胎内に居るときに、母は、日輪が其ふところに入つたと云ふ夢を見た。すると、占ひをする者が曰ふには、日輪の光の臨み照すところは、如何なる處といへども、透して差し込まぬところは無い。それと同じく、此生れる子は、年三十歲にも及べば、必ず武威を天下八方にかゞやかすであらうと曰つた。この故に、秀吉が、戰ふときは必ず勝利を得、攻めるときは必ず取つて、今や、我が日本國は、すでに治まつて、人民は富みてゆたかに、財政は十分に足りて居り、天子樣の都の盛大なることは、昔から今までに、比類の無いほどである。夫れ、人間が、此世の中に生きて居ることは、古より、百年に足らないほどで、まことに、はかない者である。されば、どうして、鬱々と、心むすぼれて、ぐづ〳〵して、久しく此處にじつとして居ることが出來やうぞ。そこで、吾は、道を貴國に借りて、山や海を越えて、直ちに明國に打ち入り、明國の四百餘州をして、殘らず我が國の風俗に化せしめ、以て王政を億萬年の長い間施し行はうと思ふのである。是れは秀吉が元來の志望である。凡そ海外の諸蕃夷の後れて入朝する者をば、いづれも皆、そのまゝに打ち捨ておかないのである、必ず征伐するのである。しかるに、貴國は、第一に使者を遣はして幣物を差し出したので、我が天子樣は、大層之を嘉賞せられた。ついては、秀吉が明國に打ち入るときには、貴國の士卒を引き連れて、わが陣營に會合し、以て我が爲めに道案内を致せよと曰つてあつて、因つて、平調信と僧の玄蘇とを派遣して、朝鮮の使者と一所に往かしめた。かくて、朝鮮王は、秀吉の手紙を得て、疑ひ懼れたが、誠一は、これは、からおどしであつて、心配するほどの事では無いと曰つた。そこで、王は、誠一をして、私に調信、玄蘇の二人を饗應して、その眞實の事情を探らしめた。すると、調信が曰ふには、我が主君(卽ち秀吉を指す)は、明に交通しやうと思うたけれども、明は返事を致さなかつたので、それ故に、明を征伐しやうと思はれるのである。されば、貴國は、その中間に居つて之をなだめては、どうだと曰つた。誠一は、あたらずさはらずの善い加減な挨拶をした。すると、玄蘇は聲をはげまして曰ふには、今日の評議は、あやふやにすることは出來ない。和睦しやうとせぬならば、戰ふばかりであると曰つた。因つて、二人は、暇乞して別れて、引き返した。韓は、そこで、始めて懼れて、ぼつ〳〵と邊海の防備を整頓した。明も亦此事を聞き及んで、海岸の防禦を重ねて嚴重にした。天正十九年の夏に、秀吉は、ふたゝび、義智を派遣して、昭を責めしめたが、義智は釜山に留まつて居ること、十日餘であつたけれども、返事が無かつたので、怒つて引き返した。そこで、秀吉が朝鮮を征伐しやうとの志は益々決定した。

秀吉初無子。先是。姬人淺井氏。生男鶴松。秀吉絕愛之。是歲。鶴松夭。乃悲哀累月。心忽忽不樂。因屢出遊以自遣。一日。登清水寺閣。西望。謂從者曰。大丈夫當用武萬里之外。何自悒鬱爲。乃返。大會諸將帥。謂之曰。吾藉諸君之力。平定海內。亦可以休矣。特諸醜夷有阻王化者。深羞之。吾欲以邦治委內府。而自將入朝鮮。以其兵爲先鋒。以入於明。彼拒我命。則擊滅之。遂自遼東直襲北京。奄有其國。多割土壤。以予諸君。使諸功臣皆厭其望。不亦快乎。我籌之已熟。事非甚難。諸君其能爲我出力耶。諸將帥愕眙相視。莫敢對者。浮田秀家進曰。殿下擧此無前之事。誰不努力者。衆莫敢異議。內府。謂秀次也。秀次時爲內大臣。叙正二位。於是。秀吉奏請。遣諸將之國。各具兵食。命九鬼嘉隆。造大艦數千艘。大廳聞秀吉赴海外。憂恐至廢寢食。乃議使秀家代往。而自出陣肥前。以爲策應。乃大城

于那古邪。建爲行營。

【字解】【姬人】……妾。【淺井氏】……卽ち淀君なり。【絕愛】……はなはだ愛す。ひどく可愛がる。【忽忽】……事を省みざる也。【自遣】……心中の憂を晴らす。【悒鬱】……音イウウツ。悒は不安なり、憂ふる也。のびくとせずして面白くなきこと。【乃返】……返は一に還に作る。【奄有】……音ヨンイウ。奄は掩と通ず。掩ひ有する也、殘らず有する の義。【厭】……飽く。【籌】……はかる、算なり。【愕眙】……音ガクチ。驚き視る貌。【無前之事】……前に比すべきもの無き事。空前の事。【大廳】……大政所。卽ち秀吉の母。【策應】……計策の打ち合はせをする。【城】……一に築に作る。【那古邪】……肥前に在り。【行營】……行は行在の行の如し。大將出張先の本營。

【講義】秀吉は、はじめ、子が無かつたが、これより先に、妾の淺井氏が、男子の鶴松を生んだので、秀吉は、大層之を可愛がつて居つたが、この年に、鶴松は若死したので、そこで、秀吉は悲み歎くこと數月に及び、心がそはくとして、物事が手につかずして、不愉快に日を暮らし、そこで、度々外へ出でゝ遊んで、自ら心中の憂を忘れやうとした。ある日、清水寺の高殿に登つて、西の方を望み見て、隨從したる人々に向つて曰ふには、男子たる者は、武を海外萬里の外に用ふべきである。どうして自ら面白からずいじけ込んで居るべきぞと曰ひ、そこで、屋敷に還り、大いに諸の大將共を寄せ集めて、之に向つて曰ふには、吾は、諸君の力によつて、天下を平定したのであるから、これで以つて休息して宜しいのである。けれども、たゞ、諸々の惡しき夷どもの中に、天子樣の敎化を邪魔する者があるので、吾は深く之を恥づかしく思ふのである。そこで、吾は、國內の政治をば內大臣秀次に任せて、そして自身に大將となつて朝鮮に入り、その兵を先鋒となし、以て明國に打ち入らうと思ふのである。若し彼れ朝鮮が我が命令をこばんで承知せぬときは、先づ朝鮮を擊ち滅ぼし、それから、遂に遼東より、直に明の首府なる北京を不意擊し、其國を殘らず切り取り、多く土地を割いて、それを諸君に與へて、諸の功勞ある臣下どもをして、皆、その希望を充分に滿足させるやうに致さう。これも亦愉快なる事ではないか。我は、此事を計畫すること、已に充分に熟して居るが、此事は、大層六かしい事では無い。諸君は、我が爲めに一骨折つてくれるであらうかと曰つた。すると、諸の大將たちは、あまりの思ひ掛けない事に驚いて、眼を見張つて、互に顏を見合はせて、敢て返答する者は無かつた。浮田秀家が進み出でゝ曰ふには、殿下が、この今日までに比類の無い事を擧行せられるからには、誰か骨を折らぬ者がありましやうぞと曰つた。多くの人々は、敢へて異議を申し立てるものも無かつた。內大臣と云ふのは、秀次のことである。秀次は、その時に、內大臣となつて、正二位に叙せられて居つた。こゝに於て、秀吉は朝廷に奏上して請うて、諸大將を遣はして、その領國に歸らしめ、各々兵粮を準備させることにし、九鬼嘉隆に申し附けて、大船數千艘を造らせた。秀吉の母大政所は、秀吉が海外に出掛けて行かうとして居るといふ事を聞いて、ひどく心配して、眠られず食物も食べられぬほどであつた。秀吉は、そこで、評議して、秀家をして代つて往かしめ、そして自身は出でゝ肥前に陣取つて、以て計略の打ち合はせをすることにし、そこで、大に那古邪に城を築いて、それを出張先の本陣と定めた。

十二月。分朝鮮地圖于諸將。部署其所嚮。分西南四道兵爲八軍。以嚮韓之八道。主計頭加藤淸正。將第一軍。攝津守小西行長。將第二軍。鍋島直茂。相良賴定。屬淸正。宗義智。松浦鎭信。有馬義純。屬行長。兩軍迭爲先鋒。大友義統。黑田長政。將第三軍。島津義弘。毛利高政。伊東祐丘。將第四軍。福島正則。長曾我部元親。將第五軍。蜂須賀家政。生駒親正。將第六軍。小早川隆景。毛利秀包。立花宗茂。將第七軍。毛利輝元。將第八軍。別置水軍。以九鬼嘉隆。脇坂安治。加藤嘉明。來島康親將之。秀俊將藤堂高虎。率大和軍屬焉。水陸九軍。總十五萬人。織田秀信。中川秀政。石田三成。增田長盛。大谷吉隆。糟谷武則。片桐且元。與淺野左京大夫將游軍六萬。以備應援。而秀吉自以秀俊。及德川公。前田利家。蒲生氏鄕。上杉景勝　結城秀康。最上義光。佐竹義宣。伊達政宗。南部信直等。畿內東北三道將士十萬自衞。以明年。三月。盡會行營。秀吉乃上書乞骸骨。讓關白職于秀次。自稱太閤。於是。宗義智戒釜山吏卒。稍稍引還。韓人來窺其府。闃然無人。乃驚怪。修守備益急。

【講義】【西南四道】……山陰、山陽、南海、西海の四道。【韓之八道】……元の末に、高麗の大臣李成桂、勢に乘じて國を奪ひ、新羅、百濟を併呑し、國郡を分ちて八道となす。卽ち、全羅、忠淸、慶尙、京畿、黃海、平安、咸鏡、江原の八道是れ也。【迭】……たがひに、かはるがはる。【總十五萬人】……陸軍十三萬七千二百人、水軍九千二百人。【游軍】……常に外に在りて不時の用に供する軍勢。【東北三道】……東海、東山、北陸の三道。【乞骸骨】……退隱辭職。人臣の君に事ふるや、其身は、我が有に非ず、故に辭職退隱を乞ふを、骸骨を乞ふと云ふ。【太閤】……關白を辭して

其子關白となりし時の稱。太閤下の略なりと云ふ。【闃然】……音ゲキゼン。寂靜の貌。ひつそりとする。易經に、闃として其れ人無しとの語あり。

【講義】十二月に、秀吉は、朝鮮の地圖を諸大將に分ち與へ、各々の嚮ふべき所を手分けした。それは次の如くであつた。西南の四道の軍勢を分つて八軍となし、朝鮮の八道に向はしめ、卽ち、主計頭加藤清正は第一軍に大將となり、攝津守小西行長は、第二軍に大將となり、鍋島直茂、相良頼定は、清正に附屬し、宗義智、松浦鎭信、有馬義純は、行長に附屬し、この第一、第二の兩軍が、かはるゞ、先鋒となることにし、大友義純と黑田長政とが、第三軍に大將となり、島津義弘、毛利高政、伊東祐丘が、第四軍に大將となり、福島正則、長曾我部元親が、第五軍に大將となり、蜂須賀家政、生駒親正が、第六軍に大將となり、小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂が、第七軍に大將となり、毛利輝元が、第八軍に大將となし、秀俊の部下の大將藤堂高虎が、大和の軍勢を引き連れて、之に附屬することにした。水軍、陸軍合はせて九軍あつて、總て十五萬人の軍勢があつた。織田秀信、中川秀政、石田三成、增田長盛、大谷吉隆、糟谷武則、片桐且元は、淺野左京大夫（幸長）とともに、游軍六萬人に大將となつて、以て、おさかの時の應援に備へ、そして、秀吉は、自身に、秀俊及び德川公、前田利家、蒲生氏鄕、上杉景勝、結城秀康、最上義光、佐竹義宣、伊達政宗、南部信直など、畿內と東北の三道との將士十萬人を以て、自身の護衛とすることにし、明年の三月を以て、殘らず、行營に會合させることにした。秀吉は、そこで、上書して、辭職退隱を乞ひ、關白の官職を秀次に讓り、自ら大閤と稱した。こゝに於て、宗義智は、釜山に駐在して居る役人士卒に注意して、ぼつ〳〵とだんだんに引き上げて本國に還らせた。やがて、朝鮮人は、來つて釜山なる宗氏の役所をのぞいて見るに、ひつそりとして、誰も人が居なかつたので、そこで、驚いて不審に思うて、まず〳〵手きびしく、防守の準備を整へた。

文祿元年。正月。秀吉召加藤清正賜之記幟曰。吾伐毛利氏時。先右府所賜也。召小西行長賜之名馬曰。以驅突髯虜。清正素鄙行長。不相善。於是。謂之曰。予用賜幟爲號。子號何用。行長對曰。我起藥商。當用藥囊耳。自是益相隙也。二月。二十八日。秀吉發京師。或曰。盍以善漢文者從。秀吉笑曰。吾此行。將使彼用我文耳。四月。至安藝。謁嚴島祠。投百錢。祝曰。吾而勝明。面者居多。乃投。皆面矣。衆大喜。蓋豫糊合兩錢也。遂至那古邪。諸軍會者。凡十五萬人。糧食稱之。

【文祿】……後陽成帝の時の年號。【記幟】……南無妙法蓮華經の七字を書せし旗なりと云ふ。【髯虜】……音ゼンリョ。髯の生えたえびす。朝鮮人をさす【自是益相隙也】……鍋島家記に云はく、天正十六年、秀吉、隈本、宇土兩城を清正、行長に分ち賜ふ。而るに其民、境を爭ひ、相訴ふ。後ち行長が封內志岐某叛す。清正、行長を援け、其亂を平らゞ。而るに、行長謝せず。是に因つて二人交々惡し。秀吉之を知り、二人をして先鋒となり、其功を競はしむと。征韓偉略の注文に見ゆ。【面】……錢の表面。【豫】……あらかじめ。【糊合】……音コガフ。のりにて附け合はす。【稱之】……之にかなふ。それに相應する。

【講義】文祿元年の正月に、秀吉は、加藤清正を召し出して、之に指物（サシモノ）を賜はつて曰ふには、吾が、むかし、毛利氏を征伐するときに、故右大臣殿（卽ち織田信長を指す）が賜はつた者であると曰ひ、又、小西行長を召し寄せて、之に善き馬を賜はつて曰ふには、汝は、此馬に乘つて、髯の生えた夷共を追ひまくり突き進めよと曰つた。清正は、平素より、行長をいやしんで、互に仲が善くなかつたが、こゝに於て、清正は、行長に向つて曰ふには、拙者は、殿下から賜はつたる指物を以て、しるしとするが、貴殿の旗じるしは、何を用ひらるゝかと曰つた。すると、行長が答へて曰ふには、拙者は、元來、堺の藥屋から立身したものゝで御座るから、藥袋に丸をつけたる旗をでも用ひるで御座らうと曰つた。これより、清正と行長とは、まず〳〵仲が惡くなつた。二月の二十八日に、秀吉は、京都を出發した。その時に、ある人が曰ふには、漢文を上手に書く人を連れて行くことになされては、どうで御座りますかと曰つた。すると、秀吉が笑つて曰ふには、それには及ばぬ。吾が此度の征伐は、彼等毛唐人をして我が國の平假名文を用ひしめやうとするのであると曰つた。四月に、秀吉は、安藝の嚴島神社に參詣して、錢百文を投げやうとして、祈つて曰ふには、吾にして明國に打ち勝つことが出來るならば、今投げる錢の中で、表面の出た者が多くなるやうにありたいと曰ひ、そこで、錢を投げると、百文の錢が、皆、表面ばかり出でたので、多くの人々は大に喜んだ。これは、大體、秀吉が、前以て錢二枚を糊（ノリ）で貼（ハ）り附けて置いたのである。かくて、秀吉は、遂に那古邪に到著した。諸軍の此處に會合するもの、すべて十五萬人で、兵糧も之に相應するだけ澤山にあつた。

於是。先遣水陸九軍。發大礮。鬨而揚帆。蔽海而渡。至于風本。阻風十日。風稍定。行長與義智素諳海路。潛拔其軍。不告衆先發。至豐崎。平明。諸將乃覺之。清正怒而發。風益甚。不得進。行長促舵師發豐崎。冒濤而進。十三日。達于釜山。釜山守將鄭撥出獵。聞警馳返。行長隨攻其城。立拔之。其捕虜以要害城寨。曰。東北有東萊。距此三十里。行長謂其衆曰。諸君戰

疲。當レ休。然使二東萊爲一レ備。吾力不レ能レ下。而諸將隨至。則奪二功於人一矣。宜急擊取レ之。衆奮從レ之。乃進攻二東萊一。半日拔レ之。斬首千餘級。守將宋象賢不レ屈死。行長收葬レ之。進陷二梁山一。至二鵲院一。韓兵據レ險拒レ之。我兵攀レ山。廻出二其背一。韓兵顧而潰。韓巡察使金睟聞二東萊急一。自二晉州一來援。不レ及。乃諭二諸郡縣一避二我兵一。

【字解】【大礮】……音タイハウ。大砲。【鬨】……音コウ。ときの聲をあげる。【風本】……壹岐に在り。【豐崎】……對馬に在り。【舵師】……音ダシ。舵は船の方向を正しうする木。かぢ取。【出獵】……絕影島に獵せし也。島は釜山の南に在り。【馳返】……返は一に還に作る。【東萊】……慶尙道に在り。【三十里】……朝鮮は、我が六町を以て一里と爲すとも云ひ、又、四町六分六厘に當るとも云ふ、未だ孰れか是なるを知らず。【梁山】……慶尙道に在り。【鵲院】……慶尙道に在り。

【講義】秀吉は、こゝに於て、先づ水軍陸軍合はせて九軍を派遣することにし、大砲を打ち出し、とき聲を揚げて、帆を卷き上げて、出發し、其兵船は、海一ぱいになつて、渡りて、風本に到著したが、風に妨げられること十日間にして、風が少し靜まつた。行長と義智とは、はじめより、海上の航路を諳んじ知つて居つたので、ひそかに、自分の軍勢だけを拔き出して、多くの人々に告げずして出發し豐崎に至つた。夜の明ける頃に、諸將は此事を感づき、清正は怒つて出發したけれども、風がますく甚しく吹いたので、進むことが出來なかつた。行長は、舵取を催促して、豐崎を出發し、波濤を冒して進み、十三日に、釜山に到著した。釜山の守將なる鄭撥は、此時出でゝ、獵をして居つたが、警報を聞いて、馳せて引き返した。行長は、隨つて其城を攻め、立ちどころに之を攻め落し、鄭撥を生け捕り、それから、遂に、兵を分けて慶尙道をふれ下し、西生、多大の二つの浦を攻め落し、多大浦の守將なる尹興信を斬つた。そこで、その生け捕つた朝鮮人に、要害の城や寨を問うた。生け捕つた朝鮮人が曰ふには、これより東北に當つて、東萊といふ所がありますが、それは、此處から三十里離れて居りますと曰つた。すると、行長は、その部下の人々に向つて曰ふには、諸君は戰爭して疲れて居る事故に、こゝで休息すべき筈である。けれども、若し其内に東萊が防守の用意を致したならば、吾が力にて攻め落すことが出來ぬであらう。そして、其内に諸大將があとから到著することになると、我が手柄を人に奪はれて仕舞ふであらう。されば、急に手きびしく擊つて之を攻め取るが宜しいと曰つた。部下の人々は、奮つて之に從つたので、そこで、進んで東萊を攻め、半日にして之を攻め落し、首を斬ること千餘級であつた。東萊の守將なる宋象賢は、屈服せずして死んだので、行長は、その死骸を取り收めて之を葬つた。それから、行長は、進んで、梁山を攻め落し、鵲院に至つたが、朝鮮の兵は、險阻なる所に立て籠つて、之を拒いで居つたので、我が兵は、山を攀ぢ登つて、ぐるりと廻つて、敵の後に出でた。そこで、朝鮮の兵は、うしろを振り返つて見て、亂れ崩れた。朝鮮の巡察使なる金睟は、東萊の危急なることを聞いて、晉州から來つて援けたけれども、間に合はなかつたので、そこで、諸の郡縣に諭して、我が日本の兵を避けさせることにした。

清正後、行長三日。至二釜山一。聞二行長已前進一。切齒曰。悔爲二豎子所一レ先。吾豈踐二其迹一乎。乃轉取二別路一。縱二火慶州一。走二其守將一。斬首千五百級。轉鬬而進。所レ向皆靡。秀家聞二行長深入一。謂二其將佐一曰。彼自我家起身。吾爭レ功而不レ援。使彼死於敵。不二獨負一レ太閤寄任之意一也。乃踰レ次發レ舟。八軍相繼上陸。韓諸道競報二警於國都一。韓王命二李鎰一。申砬一。爲二大將一。使二金誠一拒二慶尙右道一。金玒拒二慶尙左道一。行長方圍二金海一。黑田長政援至。刈レ禾塡レ塹以陷レ之。引レ兵出二左右道之間一。絕二其應援一。進陷二尙州一。鎰已至二州城北一。覩二城中火起一。遣レ騎來候。行長望二視之一曰。我且奪二其膽一。潛使二銃卒伏一レ橋下一。銃之墮レ馬。鎰軍動。行長以大衆一出。張二一奇兵一。劫レ之。鎰駭走。歸二申砬於忠州一。砬收二忠清道兵八千一。欲守二鳥嶺一。聞二尙州陷一。不二敢進一。行長進至二鳥嶺一。視二其險阨一。使二輕卒一。先行。周踐山谷。無レ敵。笑曰。朝鮮兵不レ要二我于此一。吾知二其莫一能爲レ也。乃踰レ嶺至二丹月驛一。分レ兵爲二一一。擊二申砬于彈琴臺下一。斬レ之。遂取二忠州一。而與二清正一會。

【字解】【慶州】……慶尙道に在り。【彼自我家起身】……行長が浮田氏の爲めに使せしこと前に見ゆ。起身とは立身すること。【不獨負太閤寄任之意也】……獨は、たゞと訓ず。大抵、不獨とあるときは、此例によるべし。寄任は總大將の大任を寄せられしこと。たゞ太閤が總大將の重任を寄托せられし意にそむくのみならず、相對の上にても相濟まぬ、されば、吾は功を爭はぬと也。【踰次】……順序を越えて先だつて進む。【金海】……慶尙道に在り。【刈禾】……麥を刈り取る。【塡】……うづむ。【尙州】……慶尙道に在り。【忠州】……忠清道に在り。【險阨】……音ケン

アイ。阨は隘と同じ。險阻にして狹きなり。【周踐山谷】……あまねく、山や谷の間を踐んで見させる。【丹月驛】……【彈琴臺】……並に忠清道に在り。

【講義】清正は、行長に後れること三日にして、釜山に到著したが、行長が已に前進したといふ事を聞いて、齒をくひ〻ばつて、悔やしがつて曰ふには、あの藥屋の小野郎に先んぜられたのは、殘念である。されば、吾は、どうして、彼れが跡をつけて行くべきぞと曰ひ、そこで、轉じて別の路を取つて進み、慶州に火を放つて、其守將を逃げ走らせ、首を斬ること千五百級、處々に於て戰鬪して進んだが、清正の向ふところ、皆靡いた。秀家は、行長が深く進み入つたといふ事を聞いて、部下の大將共に向つて曰ふには、彼れ行長は、我が家から立身したものである。吾若し彼と功を爭うて、彼れを援けずして、彼をして敵の手に討死せしめることでもあつたならば、それは、たゞ、太閤殿下が吾に總大將の重任を寄託せられたる思召にそむくばかりでない、私の關係に於ても、まことに相濟まぬことであると曰ひ、そこで、順序を超えて先に船を出發した。やがて、八軍は、相つゞいて、上陸した。すると、朝鮮の諸道は、相競うて、非常なる事變を朝鮮の首府に報告した。朝鮮の國王は、丁度其時に、金海を圍んで居つたが、黑田長政が、加勢の爲めに到著し、參を刈り取つて城のほりを埋めて、そして金海を攻め落し、それから、兵を引き連れて、左道と右道との間より出でゝ、左道右道の敵の應援の路を絕ち切り、進んで尙州を攻め落した。李鎰は、此時に、已に尙州の城の北に到著したが、城中に火が燃え上つて居るのを見て、騎兵を遣はして來り伺はしめた。行長は、之を望み見て曰ふには、我は彼れの膽玉を取りひしいでくれやうと曰ひ、ひそかに、鐵砲方の步卒をして、橋の下にかくれて、鐵砲を打たしめて、其騎兵を馬から落したので、李鎰の軍勢は、たぢ〻となつた。そこで、行長は、大軍を引き連れて打つて出で、奇兵を二箇處に張り設けて、之をおびやかした。李鎰は、驚いて逃げ走つて、忠州に往き、申砬の處へ逃げ込んだ。申砬は、忠清道の兵八千人を取りまとめて、鳥嶺を守らうとしたが、尙州が落城したといふ事を聞いたので、敢て進まうとしなかつた。やがて、行長は、進んで、鳥嶺に到著し、その險阻にして道はゞの狹い處であるのを見て、身輕に出で立ちたる步卒をして、先だつて行つて、山や谷を殘るところ無くさがして見させたけれども、敵兵は居なかつたので、行長は笑つて曰ふには、朝鮮の兵は、この要害の切所に於て我を待ち受けて擊たうとしないので見れば、朝鮮の兵が何程の事をも仕出かすことの出來ぬ事は、善く分るのであると曰ひ、そこで、鳥嶺を踰えて、丹月驛に到著し、兵を二手に分けて、申砬を彈琴臺の下に擊つて、之を斬り、それから、遂に忠州を取り、そして、清正と出合つた。

諸將皆至。乃相見于城外。議進取其京畿。清正曰。攝津守多功矣。至攻國都。先鋒當見屬僕也。行長曰。吾與子並受約束。子何擅更之。對曰。子之不告而發。亦出約束乎。二人忿。欲鬪。諸將解之曰。大敵在前。何私鬪爲。鍋島直茂曰。太閤令二公迭爲先鋒。今盍分道往。聞道有二。自南者遠。自東者近。近者有漢江之險。唯二公所擇。清正曰。吾寧取險而近者矣。議乃定。行長間使人先馳之漢江。奪其南岸舟。清正遂發。遇韓使李應舜于途。捕之。初行長獲蔚山守將李彥誠。送書韓王。招降之。使彥誠齎去。彥誠不敢白。及取尙州。乃獲應舜。予之太閤券書。使還責彥誠之報。且召李德馨。德馨。嘗接我使人者也。韓王乃遣德馨乞降。途聞忠州陷。使應舜先往詗之。乃爲清正所捕。遂誅之也。德馨走去。韓已聞李鎰敗。大怖。而猶屬望申砬。晦日。有騎馳入都門。民迎問。對曰。申總兵死矣。關白軍將來矣。都城大擾。王與世子夜駕。奔平壤。告急於明。遣王子徵兵諸道。留都元帥金命元。副元帥申恪。以舟師扼漢江。命元聞清正至。措疑兵遁。清正抵江。無舟可渡。立望北岸久之。笑曰。敵舟有鳧。是無兵也。令善泅者往取其舟。以渡。五月。四日。至都城南大門。有兵守門。視其旗幟。皆小西氏號也。蓋行長渡驪川。走敵將元豪。先一日。自東大門入。王已遁矣。清正益怒。

【字解】【漢江】……京畿道に在り。【間】……ひそかに。【蔚山】……慶尙道に在り。【券書】……朱印の押してある書面。【詗】……うかゞふ、樣子を

うかゞひ探る。【平壤】……平安道に在り。【措疑兵】……措は置く也。備があるやうに見せかける爲めに置く。【抵】……至る。【鳧】……音フ。水鳥、かも。

【講義】やがて、諸大將が皆到著したので、そこで、城外に於て、相見て、進んで朝鮮の京畿道を取ることを評議した。すると、清正が曰ふには、攝津守(卽ち行長を指す。)は、すでに手柄が多いことであるから、國都を攻めるに就いては、その先鋒たることは、拙者に附託せらるべきであると曰つた。行長が曰ふには、拙者は、貴殿と、並に殿下の軍令を受けたので御座る。貴殿は、どうして、勝手にそれを變へやうとなされるぞと曰つた。すると、清正が答へて曰ふには、貴殿が人々に告げずして、ひとり拔け懸けして出發されたのも、亦、軍令によつたもので御座るかと曰つた。そこで、二人は、怒つて、打ち合はうとした。諸大將は、之をなだめて曰ふには、今や大敵が我々の前に居るのに、どうして、私の喧嘩を致されるぞと曰つた。鍋島直茂が曰ふには、太閤殿下は、御二人をして、かはる〴〵先鋒とならしめられたことなれば、今は、別々の道を取つて進んで行くことにしてはどうで御座るか。聞くところによれば、國都に往くべき道が二つあると云ふことで、南方から行く道は遠く、東方から行く道は近い、しかし、近い方には、漢江の險があるぞ。どちらなりとも、御二人の擇びなさるまゝであると曰つた。すると、清正が曰ふには、拙者は、むしろ、險があつても近い方の道を取ることに致さうと曰つた。評議は、そこで、決定した。すると、行長は、ひそかに、人をして、先づ馳せて漢江に往きてその南岸の舟を奪ひ取らしめた。清正は、それから、遂に出發したが、途中に於て、朝鮮の使者李應舜に出遇ひ、之を捕縛した。はじめ、行長は、蔚山の守將なる李彦誠を生捕り、手紙を朝鮮の國王に送り、之を招き降さうとし、彦誠をして、此手紙を持參して立ち去らしめたが、彦誠は、敢て此事を國王に申し上げなかつた。其後、行長が尙州を取るに及んで、そこで、應舜を生捕つたので、應舜に、太閤の朱印の押してある手紙を渡して、引き返して彦誠の返事を催促させ、其上に、李德馨を召し寄せさせることにした。德馨は、嘗て我が日本の使者に應對したことがあつた者で、多少我が國の樣子を知つて居る者である。朝鮮の國王は、そこで、德馨を派遣して、降參することを乞はせることにした。德馨は、途中にて、忠州が落城したと云ふ事を聞き、應舜をして先だつて往つて其樣子をうかゞひ探らしめたので、そこで、應舜は、清正に捕縛されたのである。清正は、とう〳〵、應舜を誅殺したので、德馨は、應舜が殺されたのを見て、走つて立ち去つて仕舞つた。朝鮮國王が降參を乞ふの意は、かくて、終に、わが軍に達せられなかつたのである。朝鮮は、すでに、李鎰が敗北したことを聞いて、大に怖れて居つたけれども、それでも猶ほ、申砬が若しや勝つかも知れぬと、申砬に望をかけて居つた。さうする中に、晦日(月の末日)に、騎兵があつて、馳せて國都の門に入つたので、人民は、迎へて、戰爭の樣子は如何であるかと問うた。その騎兵が答へて曰ふには、申總兵は討死して仕舞ひ、日本の關白の軍が來やうとして居ると曰つた。そこで、國都の城中は、大に騷ぎ立てた。國王は、跡取りの王子とともに、夜、車に乘つて、平壤に逃げ奔り、危急なる事を明に告げ、王子を派遣して、兵を諸道より召し集めることにし、都元帥の金命元と副元帥の申恪とを留め、舟軍を以て、漢江を食ひ止めさせた。命元は、清正が到著したといふ事を聞くと、疑兵を置いて、自分は遁げ去つた。やがて、清正は、漢江に至つたが、こちらの岸には川を渡るべき舟が無かつたので、立つて、北岸(卽ち向うの岸)を望み見ること、やゝしばらくであつたが、笑つて曰ふには、あの向うに見える敵軍の舟には鬼が居るから、これは、舟の中には兵士が居らないのであると曰ひ、泗(オヨ)ぐことの上手な者をして往きて其舟を取つて來させて、そして川を渡つた。かくて、五月の四日に、清正は國都の城の南大門に到著した。すると、兵士が其門を守つて居つたので、其旗さし物を見ると、皆、小西氏の紋所であつた。これは、大體、行長は、驪川を渡つて、敵將の元豪を敗走させ、清正よりも一日前に、東大門より入つて見ると、國王はすでに遁げ去つたあとであつたので、行長は此處に留まつて居つたのであゝ。清正は、ふたゝび行長に先を越されたので、ますます怒つた。

居十餘日。諸將皆至。秀家自居國都。使諸將各圖進取。金命元退守臨津。呼申恪。恪不從。獨屯楊州。命元怒恪違節度。請王誅之。會咸鏡南道兵使李惲來援恪。與浮田氏兵戰。大破之。而命元遂斬恪。王聞捷。遽赦之。不及。乃遣申砧及韓應寅。助命元守津北。我兩先鋒與長政合兵。軍津南。相持十餘日。伏精兵而佯卻。砧欲追之。其裨將劉克良止之。不聽而渡。應寅亦濟。遇伏驚走。三將返擊。大破之。擒砧及克良。其兵死傷若溺者萬餘人。命元。應寅。走歸平壤。我軍乃濟。至安城驛。乃探鬬定軍所向。行長得平安道。清正得咸鏡道。而長政得黃海道。皆引兵北入。而韓將李洸。尹國馨。金睟。以全羅。忠淸。慶尙。三道兵五萬騎。入援王城。至龍仁。見我兵壘山上。挑戰。我兵不出。已而瞰其懈。出擊。大破之。

【臨津】……京畿道に在り。【違節度】……命令に從はぬこと。【三將】……清正、行長、長政。【返擊】……返は一に還に作る。【探鬬】……鬬は音キウ。〳〵じを取る。【龍仁】……王城の南に在り。【瞰】……うかゞふ、見おろす意なり。

【講義】その後十餘日たつと、諸大將は、皆到著した。秀家は、自身に國都に居り、諸大將をして、各々、進んで攻め取ることを企てしめた。金命元は、退却して、臨津を守つて居つて、申恪を呼び寄せたけれども、申恪はその命令に從はずして、ひとり、楊州に屯營して居つた。そこで、命元は、恪が自分の命令を奉じないのを怒つて、國王に、恪を誅戮したいと請うた。折しも、咸鏡南道の兵使李惲が來つて恪を援けたので、浮田氏の兵と戰つて、大に浮田氏の兵を破つた。しかし、命元は、とう〳〵恪を斬つて仕舞つた。國王は、恪が浮田氏と戰つて勝利を得たことを聞いたので、あはてゝ、恪を赦してやつたけれども、間に合はなかつた。そこで、國王は、申砧及び韓應寅を派遣して、命元を助けて、臨津の北を守らせた。我が軍の二人の先鋒(卽ち清正、行長)は、長政とともに、兵を合はせて、臨津の南に陣取り、睨み合つて居ること十餘日で

あつたが、すぐり拔きの兵を伏せ置きて、いつはつて退却した。すると、碕は之を追つかけやうとすると、其副將劉克良が之を止めたけれども、碕は聞き入れずして、江を渡り、應寅も亦渡つたが、我が伏兵に出合つたので、驚いて逃げ走つた。すると、我が軍の三人の大將（卽ち清正、行長、長政）は、引き返して擊つて、大に之を破り、碕及び克良を擒にし、其兵は、死んだり負傷したり又は水に溺れた者が、一萬餘人であつた。命元と應寅とは、逃げ走つて、平壤に歸つた。我が軍は、そこで、臨津江をわたり、安城驛に至り、そこで、鬪を引いて、軍の向ふ所を定めたが、行長は平安道を得、清正は咸鏡道を得、そして長政は黃海道を得、皆、兵を引き連れて、北に向つて攻め入つた。そして、朝鮮の大將李洸、尹國馨、金睟は、全羅、忠淸、慶尙の三道の兵士五萬騎を引き連れて、入つて王城を援けやうとして、龍仁に至り、我が兵が山の上に壘を築いて陣取つて居るのを見て戰を仕掛けたけれども、我が兵は出でなかつた。とかくする中に、我が兵は、朝鮮の兵が油斷をして居るのを見て、出でゝ擊つて、大に之を破つた。

當此時。自國都至釜山。數十城。烽火相應。皆爲我兵所守。以與行營通聲息。秀吉乃遣石田三成。增田長盛。大谷吉隆。引游軍六萬赴援。伊達政宗亦請而往。三奉行入韓。宣令褒功。

字解【通聲息】……聲音消息を通ずる、たよりする。

講義　この時に當りて、國都より釜山に至るまでの間、數十箇所の城は、のろしを擧げて相應じ合ひ、いづれも、皆我が兵に守られて居つて、以て肥前の那古邪の行營と、雙方から、たよりをし合つて居つた。秀吉は、そこで、石田三成、增田長盛、大谷吉隆の三人を派遣して、游軍六萬人を引き連れて、出掛けて行つて援けさせた。伊達政宗も亦、請うて出掛けて行つた。やがて、三人の奉行（卽ち三成、長盛、吉隆）は、朝鮮に入り、秀吉の命令を宣べ傳へ、諸大將の功勞を賞した。

行長既徇平安。至大同江。遺書於平壤。復召李德馨。使平調信。玄蘇相見江中。招降之。議不諧。一人曰。若主第導我伐明。不則併夷滅之。乃還。六月。韓王留左相尹斗壽。元帥金命元。守平壤。而自走寧邊。欲入咸鏡。聞清正在焉。乃走義州。令右相柳成龍發兵益於命元。固守以俟明援兵。命元與行長等。夾江相持。伺我兵稍怠。夜遣精兵濟襲之。行長叱衆起。令義智絕其後。擊破韓兵。韓兵亂。淺而走。行長曰。是可亂也。擧軍從之。斗壽。命元。棄守走。行長入城。得韓積粟十餘萬石。使使還趣國都諸將。欲與俱西。曰。太閤志主伐明。今已取平壤。平壤以西莫復支者。自鴨綠江至明北京。不過百餘里。吾之全軍卷甲趨之。使彼不及備。可以得志矣。秀家與三奉行答曰。全羅。江原二道未定。我未可深入。我水軍將循全羅而北會于黃海。然後水陸竝進。是萬全之策也。乃分諸將守國都。平壤間諸城。大友義統守鳳山。黑田長政守白川。小早川隆景守開城。以備應援。

字解【大同江】……黃海道に在り。【平壤】……黃海道に在り。【不諧】……かなはず、雙方折り合はぬこと。【若】……汝。【第】……たゞ。【寧邊】……平安道に在り。【義州】……平安道に在り。【亂】……河を絕つて濟るを亂と云ふ。わたる。【十餘萬石】……朝鮮の一斗は、我が三升五合に當る。十五斗（五斗二升五合）を一石とす。【趨】……うながす、催促する。【不過百餘里】……我が日本の里數。【鳳山】……【白川】……【開城】……並に黃海道に在り。

講義　行長は、すでに、平安道をふれ下し、大同江に到著し、手紙を平壤に送つて、ふたゝび、李德馨を召し寄せ、平調信と僧の玄蘇とをして、大同江の中に於て、會見して、朝鮮國王を招き降さしめやうとしたが、談判が調はなかつた。調信、玄蘇の二人が曰ふには、汝の主（卽ち朝鮮國王）は、たゞ、我が日本軍を案內して、明を征伐するやうにしてくれさへせば、善いのである。さうでないならば、汝が國をも一所に滅して仕舞ふであらうと曰ひ、そこで、還つて來た。六月に、朝鮮國王は、左相の尹斗壽と金命元とをして平壤を守らしめて置いて、そして、自身は、寧邊に逃げ走り、咸鏡道に入らうとしたが、淸正が其處に居るといふ事を聞いたので、そこで、義州に逃げ走り、右相の柳成龍をして、兵を繰り出して、命元の軍に益し、固く拒ぎ守つて、明からの加勢の兵の來るのを俟たしめることにした。かくて、命元は、行長等と、江を其間に挾んで、對陣して居つたが、我が日本の兵の稍怠つて居るのを伺ひ知つて、夜、すぐり拔きの兵を遣はして我が兵を不意擊ちした。すると、行長は、衆を叱り付けて起ちあがり、義智をして、朝鮮兵の後を絕ち切らしめ、擊つて朝鮮兵を破つた。すると、朝鮮の兵は、江の淺い處を橫切りわたつて、逃げ走つた。すると、行長が曰ふには、此江は、流を亂して渡ることが出來るのであると曰ひ、軍勢を殘らず引き連れて、之に從つて追つかけつた。すると、斗壽、命元は、守備して居る所を棄てゝ逃げ走つた。そこで、行長は、城に入り、朝鮮の積み貯へたる米穀十餘萬石を得た。かくて、行長は、使者をして引き返して、國都に在留せる諸大將を催促せしめて、諸大將をともに西に向つて進まうと思うて曰ふ

には、太閤殿下の御志望は、明を征伐すること、が主意で御座る。今や我が軍は、平壤を攻め取ったのであるから、平壤より西には、もはや支へとゞめやうとする者は無いであらう。鴨綠江より明の首府北京までの距離は、百餘里に過ぎない。されば、吾が全軍が、鎧を卷き收めて、身輕にして北京に馳せ行き、彼れ明が備をなすべき時日の無いやうに致すならば、思ふ存分の事が出來るで御座らうと曰つた。すると、秀家は、三奉行とともに返答して曰ふには、全羅、江原の二道が未だ平定いたさぬから、我が軍は、未だあまりに深入りすることは出來ない。我が水軍は、まさに、全羅道の沿海について、北に向ひ、黃海に於て會合しやうとして居るのであるから、其後に、水軍と陸軍と相並んで進むことに致さう。これが、萬々安全にして失敗の無い計策であると曰ひ、そこで、諸將を手分けして、國都と平壤との間の諸所の城を守らしめ、大友義統は鳳山を守り、黑田長政は白川を守り、小早川隆景は開城を守り、以て應援に備へさせた。

行長日望水軍至。水軍諸將既發釜山。與慶尙右水使元鈞戰。破之。遂出全羅。藤堂高虎聞韓候船在唐島。以飛船赴之。奪其百餘艘。上島焚虜營。全羅水軍節度使李舜臣。以艨艟鬪艦數千艘在巨濟洋。諸將集飲于毛利勝信營。議進戰。脇坂安治曰。先以大船巨砲挑戰。然後奪其船。加藤嘉明曰。是劫而去之。非挑而奪之。挑而奪之者。宜以小船示弱。及敵近決戰。不則太閤謂水軍將士不欲戰也。安治曰。此事至重。一敗則陸軍亦不能振。子胡猖狂乃爾。嘉明怒。高虎居間和解。勝信曰。諸公受命於千里海外。忠告不隱。務利公事。太閤多良臣如此。何憂於戰。因侑酒。酒數行。九鬼嘉隆曰。今夜三鼓解纜。旦日進戰。船之大小隨宜耳。嘉明潛起如廁。招其軍吏。先期而進。比曉。以走舸三艘直衝敵列艦。奪其二十艘。諸將繼進。

舜臣卻。我軍追之。入洋中。舜臣乃縱左右翼。以巨煩擊碎我船。來島康親死之。安治苦戰。亡其衆而退。舜臣因屯閑山。以拒我水軍。我水軍。是以不能合陸軍。陸軍亦未遂能進也。

字解【候船】……斥候船、物見の舟。【飛船】……はやふね。【艨艟】……音モウドウ。其製狹くして敵船を突き破るに用ふる戰船。【鬪艦】……軍艦と云ふが如し。【巨濟洋】……慶尙道の南に在り。【胡】……なんぞ。【猖狂】……音シヤウキヤウ。妄行して進み取る。【忠告不隱】……相吉くるに誠を以てし、知つて隱すことなきを云ふ。【侑酒】……酒を勸む。【三鼓】……子の刻、十二時頃。【纜】……ともづな。船を繫ぎ止める綱。【如】……行く。【廁】……かはや、便所、圊。【走舸】……音サウカ。早舟。【巨煩】……音キヨコウ。大砲。

講義 かくて、行長は、日々に、水軍の到著するのを待ち望んで居つた。水軍の諸將は、すでに釜山を出發し、慶尙右水使なる元鈞と戰つて、之を破り、それから、遂に全羅道に出でた。藤堂高虎は、朝鮮の物見の船が唐島に居ると云ふことを聞いて、早舟に乘つて、出掛けて行きて、その百餘艘を奪ひ取り、島に上陸して、敵の陣營を燒き拂つた。全羅水軍節度使なる李舜臣は、戰鬪艦數千艘を引き連れて、巨濟洋に居つた。そこで、我が諸大將は、毛利勝信の陣營に集會して酒を飲み、進んで戰ふことを評議した。脇坂安治が曰ふには、先づ大なる船と大砲とを以て、敵に戰を仕かけて、然る後に、敵の船を奪ひ取ることに致さうと曰つた。加藤嘉明が曰ふには、左樣に致すのは、敵船をおびやかして追ひ拂ふのであつて、敵船に戰を仕掛けて奪ひ取るのでは御座らぬ。敵船に戰を仕掛けて之を奪ひ取るには、小さな船に乘つて、弱さうに見せかけて、敵が近づいてから、決戰するが宜しい。左樣でなくば、太閤殿下は、水軍の將士は戰爭することを好まぬのであると、思召されるで御座らうと曰つた。安治が曰ふには、此事は至極重大なる事であつて、水軍が一たび敗れることがあるときは、陸軍も亦振ふことが出來ないで御座らう。貴殿は、どうして、左樣に無鐵砲な事を致さうとせられるぞと曰つた。そこで、嘉明は怒つた。高虎が、間に這入つて仲裁したする。すると、勝信が曰ふには、諸君は、遠き千里の海外に出征の命を受けて居られて、親切に自分々々の意見を告げ合ひて、隱し立てをせずして、公事に利益のあるやうにと務められる。太閤殿下には、此の如く澤山に、忠良の臣下があることなれば、戰に就いては心配することは御座らぬと曰ひ、因つて酒を勸めた。かくて、酒が數獻に及ぶと、九鬼嘉隆が曰ふには、今夜、子の刻に、ともづなを解いて出帆し、明日進んで戰ふことに致さう。そして、船の大小は、すべて便宜に任せることに致さうと曰つた。やがて、嘉明は、ひそかに起ち上つて、便所に往き、その軍吏を呼び寄せて、期限の時刻に先だつて進み、夜明け頃に、早船三艘を以て、直に進んで、敵の並列して居る船を衝き、その二十艘を奪ひ取つた。そこで、我が諸大將は、繼いで進んだ。すると、舜臣は退却した。そこで、我が軍は、之を追つかけて、巨濟洋の中に入つた。舜臣は、そこで、左翼と右翼とを縱ち進ませ、大砲を以て、我が船を擊ち碎いた。來島康親は、そこで討死し、安治は苦戰し、その部下の人々を無くして退却した。舜臣は、そこで、閑山に屯營し、以て我が水軍を拒いだ。我が水軍は、それ故に、進んで陸軍と一處になることが出來ず、陸軍も亦未だ遂に進んで行くことが出來なかつたのである。

明主翊鈞聞秀吉兵入韓則恐。會其國西北邊有亂。大將李如松率諸軍。屯

寧夏國都兵寡。明主召其大臣問韓當援否。大臣曰。和窺明久矣。而明之屏在韓。韓先被和兵。而明不援。韓且折而入和。和韓爲一。分利於明。合兵戮力。以出遼東。則勢如建瓴水于屋矣。顧韓民畏和兵。而心不服焉。我遣一將助韓王。以招聚之。因其力以捍禦東北。是名以明援韓。而其實以韓援明也。明何患於和哉。明主從之。遣其將祖承訓。史儒算。將援韓。而下書於琉球。暹羅。爲侵和之勢。以縻秀吉。使其勿航西北嚮。而大廳有疾。謂秀吉已航海也。憂疑疾篤。秀吉聞之。馳歸覲之。至則已薨。當此時。承訓儒算既入韓。二將皆遼東勇將。數與胡戰。有功。甚輕和人。和人前掠明疆者皆海盜。甲仗敝惡。明人狃見之。以爲豐臣氏兵亦如此也。於是。至嘉山。問韓人曰。平壤和兵無乃走乎。曰。否。承訓舉酒祝曰。天使我成大功也。進舍順安。營未定。行長偵知。夜遣輕卒劫其營。營亂。乃笑曰。此虜亦易與耳。明日自往。與明軍戰于安定。旗幟偉麗。人馬皆被鬼頭獅面。明馬駭。行長麾兵蹂之。儒算下馬鬬。中丸斃。時霖雨。我兵迫明人於淖。擊鏖之。承訓挺身而走。行長因投書韓王曰。王盍導我伐明。明當我兵。猶羊群放一虎。王所知也。今遼東既無明隻騎。而我舟師十餘萬。又來自西海。未知大駕將復何逃也。當是時。韓猛將精兵。多在咸鏡道。而爲清正所阻。不能來援韓王。

字解【和】……日本を云ふ。【屏】……藩屏。【折而入和】……折は屈なり。その勢くじけて、日本に入りて服屬する也。【如建瓴水于屋】……瓴は音レイ、甕に似て耳あり、水を汲む者なり。建は猶ほ翻のごとし。高屋に居りて瓶に入れたる水を下に向つて翻すが如く、其勢の易きを云ふ也。【捍禦】……音カンギョ。ふせぐ。【縻秀吉】……縻は音ビ、繫ぐ也、ひきとめる、つなぎとめる。秀吉の勢を引き止める。【西北嚮】……朝鮮は日本の西北にあたる。朝鮮に向ふを云ふ。【覲】……音キン。下の者が上の者に見ゆること。【前掠明疆者】……胡蝶軍の類。【狃見】……ならひ見る、見なれて侮るを云ふ。【順安】……平安道に在り。【偵知】……うかゞひ知る、間者を以て敵の樣子を知る。偵は探知なり。【安定】……平安道に在り。【偉麗】……偉は大なり、麗は美なり。大きくして美くしきを云ふ。【鬼頭】……鬼がしらの冑の立てもの。【獅面】……獅子形の面。【蹂】……ふむ、ふみにじる。【霖雨】……音リンウ。久雨なり、三日以上雨ふるを霖雨と云ふ。【淖】……音タウ。泥の中。【隻騎】……隻は奇なり。一騎を云ふ。【未知大駕將復何逃也】……大駕は國王の車駕を云ふ。朝鮮王の逃ぐべき地なきを言ふ也。

講義　明主朱翊鈞は、秀吉の兵が朝鮮に打ち入つたと云ふ事を聞いて、心に恐れて居つたが、折しも、其國の西北の邊境に騷動があつたので、大將李如松は、諸軍を引き連れて、寧夏に駐屯し、國都(卽ち北京)には兵が少くて、直に援兵を繰り出すことは出來なかつた。明主は、その大臣どもを召し出して、朝鮮をば援くべきであるか否かと問うた。大臣共が曰ふには、日本が我が明を窺つて居ることは久しい間で御座ります。そして、明の藩屏は、朝鮮に在ります。今、朝鮮が先づ日本の兵に攻められて居るのに、我が明が朝鮮を援けないときは、朝鮮は、勢くじけて日本に附屬することになりましやう。そこで、日本と朝鮮とが一つになつて、利益を明國より分ち取らうとして、兵を合はせ力を合はせて、遼東から討つて出でるときには、その勢は、瓶に入れたる水を屋根の上からこぼすやうな者で御座りましやう。おまけに、朝鮮の人民は、日本の兵を畏れては居るけれども、心は服して居りませぬ。さればば、此時に於て、我が明國より一人の大將を派遣して、朝鮮王を助けて、その人民を招き聚め、其力によつて、我が明國の東北の方面を防ぎますならば、これ、その名義は、明國が朝鮮を援けるのであります。けれども、其實際は、朝鮮が明國を助けるのであります。我が明國の爲めに大に都合の好いことであります。さすれば、我が明國は、どうして、日本を心配するに及びましやうぞ。是非とも朝鮮を援けるが宜しう御座りますと曰つた。そこで、明主は、この言に從つて、其大將祖承訓と史儒算とを遣はして、ますます朝鮮を援けやうとし、そして、琉球と暹羅とに書面を下して、日本を侵さうとするやうな風をなして、秀吉を引きとめて、秀吉をして自身に海を渡つて西北なる朝鮮に嚮ふことの無いやうに致さしめることにした。そして、折しも、大政所(卽ち秀吉の母)は、病氣であつたが、秀吉が已に海を渡つて朝鮮に行つたと思うて、ひどく心配して、病氣危篤となつたので、秀吉は、之を聞いて、大急ぎで馳せ歸り、御目に懸ろうとしたが、秀吉が到著すると、大政所は已に死んで居られた。此時に當りて、明の二人の大將承訓と儒算とは、すでに朝鮮に入つたが、この二人の大將は、いづれも皆、遼東の武勇なる大將であつて、たび〳〵胡(韃靼族)と戰つて、手柄があつたので、大層、日本人を輕蔑して居つた。以前に明國の邊境を掠奪した日本人(卽ち謂はゆる倭寇)は、いづれも皆、海賊であつて、甲冑兵器

は、破損して見苦しいものであつたので、明國の人々は、之を見慣れて居つて、豐臣氏の兵も亦こんな者であらうと思うて居つたのである。こゝに於て、嘉山に到著して、朝鮮の人に問うて曰ふには、平壤に居る日本兵は、逃げ走つて仕舞つたではあるまいかと曰つた。朝鮮人が曰ふには、いや、左樣ではありませんと曰つた。すると、承訓は、杯を擧げて祝して曰ふには、天は、我をして大なる手柄を立てしめられるのである。ありがたい事だと曰ひ、進んで順安に止宿して、陣營が未だ定まらなかつた。行長は、しのびの者を入れて此樣子を知つて居つたので、夜、身輕に出で立ちたる步卒を派遣して、其陣營をおびやかすと、その陣營の中は、騷ぎ亂れた。行長は、そこで、笑つて曰ふには、此敵も亦、相手にするのに雜作は無いと曰つた。かゝて、明日、行長は、自身に出掛けて往つて、明の軍と、安定に於て戰つた。すると、行長の軍勢は、旗さし物が、すぐれて大きゝ且つ立派であつて、人は皆、鬼がしらの冑をかぶり、馬は皆、獅子の面を被つて居つたので、明の馬が駭いた。そこで、行長は、兵を指揮して、衝き進んで之を踐みにじつたので、儒算は馬から下りて鬪つたが、鐵砲の玉に中つて斃れた。その時は、長雨が降つた時であつたので、我が日本の兵は、明國の兵を泥深き處に攻めつけて、擊つて之を皆殺しにした。承訓は、自分の身だけを拔き出して逃げ走つた。行長は、そこで、書面を朝鮮國王に與へて曰ふには、あなたは、どうして、我を案內して明を征伐しないので御座るか。明の兵が、我が兵に當るのは、ちやうど、羊の群の中に一匹の虎を放つやうなもので、とても〳〵相手にも何にも成らぬことは、あなたの御承知の通りで御座る。今、遼東には、明の兵は唯の一騎も居りませぬ。しかるに、我が水軍十餘萬人が、又、西海から來る筈で御座る。さうなるときは、王は、〻はや何處にも逃げるところは無いで御座らうと曰つた。この時に當りて、朝鮮の勇猛なる大將とすぐり拔きの兵士とは、多くは、咸鏡道に居つて、そして、清正に妨げられて居つたので、來つて朝鮮王を援けることは出來なかつた。

清正之入咸鏡道也。虜安城民三人使先導。二人辭。清正立斬之。其一人懼。從之。至永興。聞二王子遁咸鏡北道。則大喜。留直茂。賴定。守永興。而自以其輕兵日行數百里。至鐵嶺。踰而北。北道兵使韓克誠。以六鎭彍騎逆清正于海汀倉。北兵善射。憑平地馳突。我軍多步兵。不利卻。會日暮。收入倉內。韓兵沓至圍之。矢下如雨。清正排倉粟爲城。發銃拒之。應手斃千餘人。韓兵退。上鐵嶺而陣。欲待且戰。清正夜分兵數千。環敵而伏。且大霧。克誠將下嶺。而我兵四面齊起。大破之。追北至鏡城。又大破之。遂擒克誠。縱火焚城。聞二王子在會寧府。驅而赴之。府。韓極北也。行五十日至焉。府使鞠景仁懼。拘二王子。使人來乞降。且曰。府內食盡。王子不食三日。願賜之食。清正許之。欲自入城。將校皆諫曰。吾窺府內。虜人塡咽。我以寡兵入。恐有變也。清正曰。虜何能爲。吾已失王。不可又失王子。卽有變。吾與王子決死。毋憾也。乃與十餘騎入城。令饋者數十人。人執一器隨而入。韓人危疑。張弓環清正。清正叱之。辯其無他。韓人不能解。清正自開襟當箭。取印於懷。印紙示之。韓人捨弓拜。於是。清正拘王子及其大臣黃赫。金貴榮等。使人護送之鏡城。乃問景仁曰。朝鮮北境盡於此乎。對曰。然。曰。北鄰何國。曰。兀良哈。清正乃以八千人進。入其境。攻一城。拔之。既夜。下令曰。勿釋甲。夜半。胡騎大至。我兵力戰。走之。清正曰。虜不意我至。我一捷足以報太閤矣。乃收其貨寶。引兵南還。胡騎躡之。清正自殿而退。終至海濱。西南望得高山。韓捕虜曰。富士岳也。清正下馬。免冑而拜。謂其騎曰。自吾辭太閤。謂日西北行矣。今望岳於西南。覺吾行遼遠也。乃歸。二十日至鏡城。

【字解】【安城】……咸鏡道に在り。【永興】……咸鏡道に在り。【二王子】……珒、琿【鐵嶺】……咸鏡道に在り。【六鎮彍騎】……六鎮彍の騎射隊ならん。八道に皆節度使あり、今その六道を云ふなるべし。標註に云ふ、六鎮は疑ふらくは屯衛の名ならんと。彍騎は音クワクキ、騎射隊。【逆】むかふ、迎へ擊つ也。【海汀倉】……もみ倉なりと云ふ。【沓至】……音タフシ。かさなり合つて至る。沓は重疊なり。【排倉粟爲城】……排はならべる也。倉の中のもみ俵をならべて城にかたどる。【應手】……鐵砲を打ち出すにしたがつて。【鏡城】……咸鏡道に在り。【會寧府】……咸鏡道に在り。會寧府の北に、豆滿江あり、此江、朝鮮と兀良哈との界なり。【堙咽】……音テンエツ。堙は滿なり、咽は塞なり。一ぱいにふさがるを云ふ。【卽】……もし。【毋憾也】……毋は一に莫に作る。【饋者】……音キシヤ。食物を送る者。【開襟當箭】……胸を開いて矢先に立つ。【印紙示之】……言語通ぜず、故に印文を示して大將清正なることを明すなり。【兀良哈】……大明一統志に云ふ、兀良哈は、東は海、西は開平の界に連なり、北は北海に抵る。春秋の時の山戎の地、秦には遼西となす。其風俗、韃靼と同じと。【胡騎】……えびすの騎兵。【西南望得高山】……西南望は當に東望に作るべしと云ふ。其說、三國通覽、林子平の著）に見ゆ。しかし、此山は決して富士山にあらず、矢張、朝鮮の中の山なるべし。【遼遠】……音レウエン。はるかに遠きこと。

【講義】清正が咸鏡道に入つたときに、安城の人民三人を生け捕つて、道案内をさせやうとしたが、其中の二人は斷わつたので、清正は、立ちどころに之を斬つたので、其一人は懼れて、清正の言葉に從つた。かくて、清正は、永興に到著して、朝鮮の王子二人が咸鏡北道に遁げて居ると云ふことを聞いたので、そこで、大に喜んで、直茂と賴定とを留めて、永興を守らせて置き、そして、自分は、部下の身輕に出で立ちたる兵士を引き連れて、日々、數百里（朝鮮の里程）づゝを行き、鐵嶺に到著して、之を超えて北に向つて進んだ。すると、咸鏡北道の兵使なる韓克誠が、六鎭の騎射隊を引き連れて、清正を海汀倉に於て迎へ擊つた。北兵（卽ち朝鮮兵）は、弓を射ることが上手で、平地をたのんで、馳せまはつて突き進んで來た。我が軍には、步兵が多かつたので、勝利を得ずして退却した。折しも、日が暮れたので、清正は、兵を引きまとめて倉の內に入つた。すると、朝鮮兵は、かさなり合ふほどに、澤山に、押し寄せ、之を圍んで、射おろす矢は、雨の降るが如くであつた。清正は、そこで、倉に在つた米俵を積みならべて、城をつくり、鐵砲を發射して之を拒ぎ、打ち出すに隨つて、千餘人を斃した。そこで、朝鮮兵は、退却して鐵嶺に上つて陣取り、夜の明けるを待つて戰はうゝ思うた。清正は、夜の間に、數千人の兵を分けて、敵を取り卷いて伏兵を置いた。明くる朝は、大に霧が降つたが、克誠は、まさに鐵嶺から下らうとすると、我が兵は、四方から一齊に起つて、大に之を破り、逃げ走るのを追つかけて、鏡城に至り、又、大に之を擊ち破り、とう〳〵克誠を擒にして、火を放つて城を燒き拂つた。清正は、朝鮮の二人の王子が會寧府に居るといふ事を聞いたので、そこで、馳せて其地に出かけて行つた。會寧府は、朝鮮の一番北のはづれである。清正は、行くこと五十日にして、其處に到著した。すると、府使鞠景仁は、大に恐れて、二人の王子を囚へて置いて、人をして來て降參を乞はしめ、其上に曰ふには、府城の內に於ては、糧食が無くなつて仕舞つて、王子は三日の間食事を致されぬから、何卒、王子に食物を賜はることを願ひますと曰つた。清正は、之を許して、自身に城中に入らうとした。すると、將校どもが、皆、清正を諫めて曰ふには、吾、府城の內を窺つて見るに、えびすどもは、一ぱいになつて、充滿して居ります。されば、味方が少しばかりの兵を引き連れて城中に入つたならば、變事があるかも知れぬから、御やめになるが宜しう御座りますと曰つた。清正が曰ふには、えびすどもが、何程の事を致すことが出來やうぞ。吾は、已に國王を取り逃がしたとなれば、又王子を取り逃がすことは出來ぬ。もし變事があつたならば、吾は、王子と、死を決するであらう。左樣な事があつても、すこしも殘念には思はぬのであると曰ひ、そこで、十餘人の騎士とともに城中に入り、食物を送る者數十人をして、人ごとに一つの器物を執つて、隨つて、城中に入らしめた。すると、朝鮮人は、危險に思ひ疑つて、弓を張つて清正を取り卷いた。清正は、之を叱り付けて、他意なきことを述べ立てたけれども、朝鮮人は、日本語を知らずして、解することが出來なかつた。清正は、そこで、自ら襟を開いて矢おもてに立つて、懷中から印を取り出して、紙に押して見せたので、朝鮮人は、大將清正であることを知つて、弓を投げ棄てゝ、禮拜した。こゝに於て、清正は、二人の王子及び其大臣黃赫、金貴榮等を執らへて、人をして之を鏡城に護衛して送らしめることにし、そこで、景仁に問うて曰ふには、朝鮮の北の國境は、此處迄であるかと曰つた。景仁が曰ふには、左樣で御座りますと曰つた。清正が曰ふには、北の鄰の國は何と云ふ國であるかと曰つた。景仁が曰ふには、兀良哈で御座りますと曰つた。清正は、そこで、八千人を引き連れて、進んで、其境に入り、一つの城を攻めて之を攻め落した。すでに夜になると、清正は命令を下して曰ふには、鎧をぬいではならぬぞと曰つた。夜なか頃に、えびすどもは、われが來やうとは思はなかつたであらう。我が一つの勝が、我が兵は、力を盡して戰つて、之を敗走させた。清正が曰ふには、えびすどもは、われが來やうとは思はなかつたであらう。我が一つの勝利は、太閤殿下に報告するに十分であると曰ひ、そこで、其貨財寶器を取り收めて、兵を引き連れて、南方に向つて引き返した。すると、えびすの騎兵が、其あとから追つかけたが、清正は、自身にしんがりとなつて退却した。かくて、清正は、終に海濱に到著して、西南の方を望み見て、高い山を見つけた。朝鮮の捕虜が曰ふには、富士山で御座りますと曰つた。すると、清正は、馬から下りて、冑をぬいで、禮拜し、部下の騎士に向つて曰ふには、吾は太閤殿下に御暇乞してから、日々に西北の方に進み行くのであると思うて居つた。然るに、今、富士山を西南の方に望むのであるから、吾は餘ほど遠方に來たのであることを悟つたと曰ひ、そこで、引き還し、二十日間にして、鏡城に到著した。

八月。韓王自義州遣李賓。李元翼。來攻平壤者再。行長輒擊卻之。王亦聞清正已略定咸鏡。恐、其與行長幷力來襲也。益告急於明。明旣得承訓敗聞。擧朝震驚。大司馬石星說明主曰。秀吉兵乘勝而遠鬬。未可與爭鋒。且寧夏未平。復有事於遼東。不若且議和以紓禍也。因薦沈惟敬。惟敬。越人。慧黠有辯口。遊燕。與燕倡家僕鄭四善。鄭四嘗在對馬。惟敬以故略知和事。徼幸富貴。其友袁茂嘗納女於星。星因知惟敬。召而與語。大悅。遂薦之。於是。明主以惟敬爲遊擊將軍。多資金帛。往說我軍。投書平壤。卑辭乞和。行長與宗義智。見惟敬於城北。曰。明卽欲和。宜使使濟海。因徵數條。惟敬盡順其意。曰。歸取報。五十日復來。乃請界平壤西北十里。和韓

俱不相踰。行長許而遣歸。告狀於秀家。

【字解】【義州】……平安道に在り。【大司馬】……官名。武事を總督す。【寧夏】……明の西北の地。【紆】……緩なり、ゆるむる。【薦】……進める、推擧する。【慧黠】……音ケイカツ。小才ありて惡がしこきこと。【倡家】……倡は又娼に作る。遊女屋。【徼幸】……音ケウカウ。もとめ願ふ。

【講義】八月に、朝鮮の國王は、義州より、李蘒と李元翼とを派遣して、來つて平壤を攻めること二度であつたが、行長は、いつでも直に、擊つて之を寄せ附けなかつた。朝鮮國王も亦、清正が已に咸鏡道を切り取り平定したといふ事を聞き、清正が行長と力をあはせて來つて不意擊することを恐れたので、ます〳〵、危急なることを明に告げた。明は、すでに、承訓が敗北したと云ふ報知を得たので、朝廷の者殘らず、震ひ驚いた。そこで、大司馬なる石星が、明主に說き勸めて曰ふには、秀吉の兵は、勝つた勢に乘じて遠く進んで鬪ふので御座りますから、與に鋒先を爭うて其相手となることは、迚も出來ませぬ。其上に、寧夏は、未だ平定いたしませぬのに、また、遼東に事が有るのはまことに困り入つたことで御座ります。されば、しばらく和睦の相談をして禍をゆるくして、其間に何等かの準備を致すが、一番宜しう御座りますと曰ひ、そこで、沈惟敬を推薦した。惟敬は、越の人であつて、小智慧があつて惡がしこく、辯舌が善かつたが、嘗て、燕に遊んで、燕の女郎屋の下部鄭四と仲が善かつた。この鄭四は、かつて、對馬に居つたことが有つたので、惟敬は、鄭四の語るところによつて、ざつと、日本の樣子を知つて居つて、何とかして富貴を得たいと求め願つて居つた。惟敬の友人の袁茂と云ふ者が、嘗て、娘を石星の妾にしたことがあるので、石星は、その緣故によつて、惟敬を知り、召し寄せて、與に談話をし、大に氣に入つて、とう〳〵、惟敬を推薦したのである。こゝに於て、明主は、惟敬を以て、遊擊將軍となし、多く貨幣を持たせて、往きて我が日本の軍に說かしめることにした。すると、惟敬は手紙を平壤に送つて、言葉を丁寧にして、和睦を乞うた。行長は、宗義智とともに、城の北に於て惟敬に面會して、曰ふには、明が若し和睦を致したいと思ふならば、使者を遣はして海を渡つて我が日本に行かしめて和睦を請ふが宜しいと曰ひ、因つて講和條件數條を提出して要求した。すると、惟敬は、盡く行長の意に叶ふやうにして、曰ふには、とにかく、歸つて返事を貰ひまして、五十日立つと、ふたゝび參りましやうと曰ひ、そこで、平壤の西北十里を境界として、日本軍も朝鮮軍も、いづれも、此境界を越えないやうに致したいと請うた。すると、行長は、之を許して、惟敬を歸らせ、此事情を秀家に報告した。

於是。我兵在平壤者。不復西下。而韓兵竊發諸道。沈岱者。募兵朔寧。計復都城。秀家攻而斬之。鄭湛。邊應井。亦聚兵全州。筑紫廣門自慶尙入全羅。與湛。應井戰熊嶺。斬之。而全州未下。九月。應井弟應星敗石田三成于馬灘。元豪敗蜂須賀家政于龜尾浦。遂攻毛利高政于春川。高政伏兵擒豪。遂定江原。鍋島直茂。相良賴定在永興。取德原。咸興等七城。移守咸興。清正自鏡城以諸俘虜還。至蓮下。會韓兵二萬阨梁養山。清正擊破之。走其將梅天。直茂。賴定迎之。相見于橘中。賀其無恙。時已十月矣。清正返軍安邊。乃修全山。橘州諸城。相與協心。按據韓人。

【字解】【朔寧】……京畿道に在り。【全州】……全羅道に在り。【鍋島直茂】……征韓偉略に云はく、直茂の咸興に在るや、朝鮮の二王子を憐み、釋是琢をして詩を賦し之に贈らしむ。曰く、可憐天上鳳凰兒、飛入群雞失德儀、咸鏡蒙塵何所似、蝕非日恥是此時と。二子吟誦し感泣し、謝して次韻す。曰く、包羞忍辱是男兒、不恨關山鐵羽儀、玉帛朝回西塞曲、渭橋香火共歸時と。直茂、視て恤むこと甚しく、文辭贈答に至りしと云ふ。【永興】……【德原】……【咸興】……並に咸鏡道に在り。【鏡城】……【蓮下】……並に咸鏡道に在り。【無恙】……つゝがなし、無事なること。【安邊】……【全山】……【橘州】……並に咸鏡道に在り。【按據】……按は撫なり、據は拒守なり。撫で安んじて落ち著くやうにする。

【講義】こゝに於て、我が日本の兵で、平壤に居る者は、もはや進軍して西の方に下ることを致さなかつた。然るに、朝鮮の兵は、ひそかに、諸道を出發した。沈岱と云ふ者が、兵を朔寧に募集して、都城を取りかへさうと企てたが、秀家が攻めて之を斬つた。鄭湛、邊應井も亦、兵を全州に於て寄せ集めて居つたが、筑紫廣門が、慶尙道より全羅道に入り、湛、應井と、熊嶺に戰つて、之を斬つた。けれども、全州は未だ下らなかつた。九月に、應井の弟なる應星は、石田三成を馬灘に於て破り、元豪は、蜂須賀家政を龜尾浦に於て破り、それから遂に毛利高政を春川に於て攻めたが、高政は、兵を伏せ置きて、豪を擒にし、それから、遂に江原を平定した。鍋島直茂と相良賴定とは、永興に居つたが、德原、咸興などの七つの城を攻め取り、移つて咸興を守つて居つた。清正は、鏡城から多くの生捕を引き連れて、還つて蓮下に至ると、折しも、二萬人の朝鮮の兵が、梁養山を喰ひ止めて居つたが、清正は、擊つて之を破り、その大將梅天を敗走させた。直茂と賴定とは、清正を出で迎へて、橘中に於て對面し、清正の無事であつたことを賀した。時已に十月であつて、だん〳〵に寒くなつて來るので、清正は、軍を安邊に引き返し、そこで、全山、橘州などの諸城を修復し、相ともに、心を合はせて、朝鮮の人民を撫で安んじて落ち著かせるやうにした。

當是時。諸將稟事秀吉。使刪交於海中。是月。秀吉復奏請赴行營。天子詔曰。征戎之事。一任將佐。勿輕濟海。秀吉拜謝而行。十一月。直茂以三千人。與韓將李希得兵三萬。戰于咸興北。走之。斬首千餘級。清正盡收咸鏡二十二管。遂議自北道長驅入遼東。未果。行長亦以惟敬過期不至。乃怒。

下令軍中曰。皆修行具。吾將飲馬鴨綠江也。義州聞之。荷擔而立。韓王飛書告明。

字解【擔】……音リン。申し上げる。【使舸交於海中】……使舸は音シカ。使者の船なり。使者の船が、海の中で、兩方から行きかふ。【一任】……任は一に委に作る。【收咸鏡二十二管】……管は猶は郡のごとし。咸鏡道には、三十二管あり、其うちの二十二管を收めしなり。【飲馬鴨綠江】……鴨綠江にて馬に水を飲ませる。卽ち明に攻め入ることを云ふ。鴨綠江は、朝鮮の西北に在る大河にして、卽ち國境なり。【荷擔】……音カタン。物をになひかつぐ。

講義　この時に當りて、諸大將が事を秀吉に申し上げることが度々であつたので、使者の舟が、海の中で、兩方から行きあふほどであつた。この月に、秀吉は、ふたゝび、朝廷に奏上して請うて、那古邪なる行營に出掛けて行くことにした。すると、天子樣が詔して仰せられるには、えびすを征伐することは、一切、大將どもに任せて置くことにして、汝は、輕々しく海を渡つてえびすの國に行かぬやうにせよと仰せられた。秀吉は、拜謝して行つた。十一月に、直茂は、三千人の兵を引き連れて、朝鮮の大將なる李希得の兵三萬人と、咸興の北に於て戰つて、之を敗走させ、首を斬ること千餘級であつた。清正は、咸鏡道の中の二十二管を殘らず收め取り、それから、遂に、北道から、何處までも敵を追つかけて行きて、遼東に打ち入るとにしやうと評議したが、未だ實行しなかつた。行長も亦、惟敬が五十日の期限を過ぎても未だ來ないので、そこで、怒つて、命令を軍中に下して曰ふには、いづれも皆、出發の用意を致せよ。吾は、將に鴨綠江に於て馬に水を飲ませやうとするのであると曰つた。義州の人々は、之を聞いて、荷物をになひかついで立ちのき、朝鮮の國王は、あはてゝ、急使を馳せて手紙を送り、此事を明に告げた。

明群臣議曰。惟敬說不可信。秀吉殊無退兵意。曩者以暑濕取敗。今天寒馬肥。宜出兵也。翊鈞猶豫未決。懸令。有能獻奇計復東藩者。購萬金。封伯爵。襲之子孫。莫敢應者。衆推少司馬宋應昌曰。應昌去歲上書言秀吉必來。是知兵矣。翊鈞遂拜應昌爲都御史。經略東北。劉黃裳。袁黃。爲贊畫。而選將兵者。李如松稱材武天下無雙。會其平寧夏。而旋。則拜爲大將。率六將軍。東拒秀吉。期以十一月發北京。獨大司馬猶持前議。復遣惟敬至平壤。伺秀吉意。惟敬留平壤城中。與行長密定議以去。而如松等大兵已至遼東。惟敬要之於路曰。媾將成矣。和人約棄平壤界大同江而退。如松方銳意立功。弗懌惟敬言。欲執而斬之。應昌等說曰。宜舍此因怠敵而襲之。如松從之。率渡鴨綠。會降虜爲我耳目者。爲韓相所摘發。皆就拘縛。以故不知明軍至。

字解【暑濕】……音ショシツ。暑くしてしける。【懸令】……命令を天下にしく。【東藩】……朝鮮をさす。【襲之子孫】……子々孫々にまで相續させる。【都御史】……諸の不法を糾す目付け役。【贊畫】……音サンクワクや佐け成すを贊と云ひ、畫は計策なり。謀議をつかさどる者。こゝには官名なり。【旋】……かへる。【大司馬】……石星を指す。【媾】……和睦。【大同江】……黃海・平安の兩道の界。【弗懌】……よろこばず、不機嫌なること。【舍此】……惟敬をゆるし置く。【爲我耳目者】……我が日本の爲めに目あかしとなつて種々の事を報告する者。【摘發】……音テキハツ。隙伏を摘排し姦邪を發明するを云ふ。さぐりあらはす。【拘縛】……音コウバク。拘留捕縛。

講義　明の臣下どもが評議して曰ふには、惟敬の言ふところは、信用することは出來ませぬ。秀吉は、格別、軍勢を退却させやうとするの意志は有りますまい。さきには、暑くして且つしける時候であつたので、我が明の軍が敗北したので御座ります。しかるに、今や、秋の末になつて、天は寒く、馬は肥える時で御座りますから、兵を繰り出して、日本の兵と戰ふが宜しう御座ります。曰つた。けれども、明主朱翊鈞は、ぐづ〳〵して、未だ決定せずして、命令を下して、能く奇拔なる計略を申し出して東藩なる朝鮮をもとの樣に取りかへす者があるならば、萬金を褒美として與へ、伯爵に封じ、子々孫々に至るまで、之を相續させるであらうと曰つたけれども、誰も敢て應ずる者はなかつた。そこで、多くの人々は、少司馬なる宋應昌を推薦して曰ふには、應昌は、去年、上書して、秀吉が必ず攻め來るであらうと言つたことがありますが、是れは善く兵を知つて居る者であると曰つた。翊鈞は、遂に應昌を都御史の官に任命して、東北をはかり定めしめることにし、劉黃裳と袁黃とが、贊畫の官となり、そして、兵に將たる者を選擇したが、李如松は、材能武勇、世にすぐれて、天下無雙と稱せられて居り、折しも寧夏を平定して凱旋して來たので、そこで、如松を大將軍に任命し、六人の將軍を引き連れて、東に向つて、秀吉の軍を拒がせることにし、十一月を期日として、北京を出發することにした。たゞ大司馬の石星だけは、それでも猶ほ、前に申し述べた意見を主張して、ふたゝび、惟敬を派遣して、平壤に至りて、秀吉の意向を伺はせることにした。かくて、惟敬は、平壤の城中に留まり居つて、行長と、ひそかに、相談を定めて、立ち去つた。しかるに、如松等の引き連れて居る大軍は、已に遼東に到着した。そこで、惟敬は、之を途中に待ち受けて曰ふには、和睦の相談がまとまらうとして居りまして、日本人は、平壤を棄てゝ去り、大同江を界として、退却しやうと約束いたしましたと曰つた。けれども、如松は、丁度其時に、熱心に手柄を立てやうと思うて居つたので、惟敬の言ふところが、氣に入らずして、捕縛して之を斬らうと思うた。

すると、應昌等が、如松に說き勸めて曰ふには、惟敬をゆるして置いて、それに因つて、敵に油斷させて、之を不意擊するが、宜しいと曰つたので、如松は此言葉に從ひ、惟敬を引き連れて、鴨綠江を渡つた。折しも、降參したる朝鮮の人で、我が日本軍の目あかしとなつて、色々の事情を知らせてくれる者共が、朝鮮の宰相に、さぐりあらはされて、皆、拘留捕縛せられて仕舞つて、我が軍に敵軍の內情を知らせる者が無かつたので、それ故に、我が軍は、明の大軍が到著したことを知らなかつた。

二年。正月。朔。如松至二肅寧一。使二裨將查大受先往一順安。大受使二人來告一曰。沉遊擊至。和議成矣。行長喜。亦使一一將以二二十人一會順安。大受誘與飲酒。伏起。二十人搏戰。亡其三人。走還平壤。行長大驚。丹波人內藤如安爲行長侍史。冒小西氏。稱飛彈守。於是。行長命如安往詰如松。如松慰解遣還。而六日以諸軍薄平壤。行長與宗義智等。急修守備。馳使告急於鳳山。使者未歸。如松已以先鋒攻含毬門。我兵擊卻之。其夜。出襲李如栢營。不利。其明。明軍大至。如松攻小西門。如栢攻大西門。吳惟忠。駱尙志。攻北門。祖承訓攻南門。承訓欲立奇功償前敗。知我易韓人也。令其兵皆尙韓裝。故踏跙不進。行長以爲韓人也。專拒西北。自率銃手。擊卻如松。如松益用大礮火箭。毒烟蔽城。我兵殊死戰。承訓則脫韓裝。露明甲。鼓譟而登。行長驚。急分兵拒之。而西北卽陷。行長退保牡丹臺。明軍四面攀堞。我兵力拒。刀槍攢垂。堞如蝟毛。明兵死傷數千人。不能拔。退營城外。行長將木戶某說曰。鳳山兵不來援。吾以孤城抗大敵。終不可支。盍退合於諸將以圖再擧。行長然之。卽夜。潛率衆出城。至江。江冰方合。蹈而渡。至鳳山。大友義統已遁之國都。黑田長政在白川。聞敗。引兵迎行長。代殿而退。明軍不敢追躡。終至國都。韓人聞之。所在並起。以應明軍。

【沈遊擊】……沈惟敬、遊擊將軍たり。【搏戰】……音ハクセン。組打して戰ふ。【鳳山】……大友義統の守る所。【易】……あなどる、輕易、輕蔑する也。【尙】……加ふ、上に著る也。【韓裝】……朝鮮服。【故】……ことさらに。【趦趄】……音シショ。行いて進まざる也、ぐづぐづして進まぬこと。【露】……あらはす、むきだしにする。【攢垂】……攢は簇聚なり。あつまり垂るゝ。刀槍をあつめて取り延べる。これは女墻へ敵を上げじとする也。【蝟毛】……音ヰマウ。針鼠の毛。【木戶某】……佐左衞門。

文祿二年の正月の朔に、李如松は肅寧に到著し、副將の查大受をして、先だつて順安に往かしめた。大受は、人をして我が軍に來つて告げしめて曰ふには、遊擊將軍沈惟敬が到著して、和睦の相談がまとまつたと曰つた。行長は喜んだ。行長も亦、一人の部下の大將をして、二十人を引き連れて順安に於て會見せしめた。すると、大受は、之を誘うて、與に酒を飲んで居ると、伏兵が起つたので、我が二十人の者は、組打して戰つて、其中の三人を無くして、走つて平壤に還つた。行長は大に驚いた。丹波の人內藤如安は、行長の祐筆となつて、小西氏を名乘り、飛彈守と稱して居つたが、是に於て、行長は、如安に申し附けて、出掛けて行つて如松を詰責させた。如松は、之をなぐさめなだめて、還してよこして、そして、六日には、諸軍を引き連れて、平壤に押し寄せた。行長は、宗義智等とともに、急に防守の準備を整頓し、急使を遣して、危急なることを鳳山なる大友義統に告げた。その使者が、未だ平壤に歸つて來ないうちに、如松は、已に先鋒を以つて含毬門を攻めて、我が兵を擊つて之を退却させた。其夜に、我が兵は、如松の陣營を不意擊したけれども、勝利を得なかつた。其明くる日に、明の軍は、大に至り、如松は小西門を攻め、如栢は大西門を攻め、吳惟忠と駱尙志とは北門を攻め、祖承訓は南門を攻めた。承訓は、すぐれたる手柄を立てゝ前日の敗北を償はうと思うて居つたが、我が日本人が朝鮮人を輕蔑して居ることを知つて居つたから、部下の兵をして、皆、朝鮮人の服裝を上にきとうて、わざと、ぐづぐづくぐとして進まないやうにさせて、朝鮮人のやうに見せ掛けたので、行長は、之を朝鮮人であると思うて、專ら西の方と北の方とを拒ぎ、自身に鐵砲方を引き連れて、擊つて如松を退却させた。如松は、ますます、大砲と火矢とを用ひて射かけたので、毒々しき煙が城を蔽うた。我が日本兵は、必死になつて戰つた。承訓は、そこで、上に纏うたる朝鮮人の服裝を脫ぎ棄てゝ、明の鎧をあらはして、攻め大鼓を打ち、ときの聲を揚げて、城に登つて來かけたので、行長は、驚いて、急に兵を分けて之を拒いだ。さうする內に、西と北とは、攻め落された。行長は、退却して、牡丹臺に立て籠つた。明の軍勢は、四方から、城の女墻に攀ぢ登らうとした。我が日本兵は、力を盡して拒ぎ、刀や槍が集まつて垂れて、女墻は、蝟の毛のやうであつた。明の兵は、死んだり負傷したりした者が數千人あつたが、攻め落すことが出來なかつたので、退却して城外に陣取つた。行長の部下の將なる木戶某は、行長に說き勸めて曰ふには、鳳山なる大友氏の兵は、來つて援けてくれませず、吾は、孤立したる城を以て大敵に抵抗して居ることなれば、仕舞には、持ちこたへることが出來ぬで御座りまし

やう。されば、退軍して諸大將と一處になつて、再擧を圖ることになされては、如何で御座りますかと曰つた。行長は、此言を尤であると思うて、其夜に、ひそかに、部下の人々をひきつれて、城を出で、大同江に至ると、江の水が丁度凍つて居つたので、氷を踏んで渡り、鳳山に到著したが、大友義統は、すでに、遁れて國都に行つた。黑田長政は、白川に居つたが、行長の敗軍を聞いて、兵を引き連れて、出でゝ行長を迎へ、代つてしんがりして退却したが、明の軍勢は、敢て追つかけて來やうとはしなかつたので、とうゝ、無事に、國都に到著した。朝鮮人は、此事を聞き及んで、何處でも、至る處で、並び起つて、明の軍に味方した。

宋應昌等謀曰。秀吉將帥皆萃王城。而加藤清正者。懸孤軍在咸鏡。聲聞不通。可虛喝而取也。使辯士馮仲纓以譯說清正曰。和無故攻韓。韓告急於明。明皇帝大怒。遣大兵救韓。復平壤。復開城。遂復國都。擒浮田。小西。盡逐其兵。令琉球。暹羅諸國壓和境。而足下猶守韓。欲爲誰乎。皇帝聞足下高義。使使臣爲報告之。爲足下計。莫若速返韓王子。收軍歸和。否則明軍四十萬。驅韓兵而東。直萃於安邊。足下雖欲服明。得乎。清正使侍史答之曰。清正知奉國命而戰。不知聽明令而和也。歸語明主。我有敝甲凋兵。近苦無事。貴國來伐。已聞命矣。而咸鏡之途險阨。騎不可比行。卒不得成列。兵之來。日一二萬而已。吾迎而擊之。日殺一萬。四十日殲之。日殺二萬。二十日殲之。既殲而西指。度遼破燕。奉大駕於海東。清正可以復命矣。仲纓走歸。

字解【萃】……集まる。【懸孤軍】……懸は絶なり、軍を出して遠征するときは、其勢懸絶にして及ぶ能はず、故に云ふ。孤は特なり。應援の兵なくして唯だ一軍を以てかけ離れて居ること。【聲聞】……風聞、おとづれ。【虛喝】……音キョカツ、からおどし。【譯】……通辯、通譯。【安邊】……咸鏡道に在り。【敝甲】……破れたる鎧。【凋兵】……音テウヘイ。損じたる刄物。【比行】……ならび行く。ならんで行くこと。【燕】卽ち北京。北京は古の燕の地なり。【奉大駕於海東】……明主を引き連れて日本に還るを云ふ。

講義　宋應昌等が相談して曰ふには、秀吉の諸大將は、いづれも皆、朝鮮の王城に集まつて居るが、たゞ加藤清正と云ふ者だけは、應援の兵なき孤軍を引き連れて、遙にかけ離れて、咸鏡道に居るから、おとづれが通ぜぬであらう。されば、この清正の軍をば、からおどしを以て取ることが出來るであらうと曰ひ、そこで、辯舌の善き人馮仲纓をして、通辯を以て清正に說かしめて曰ふには、日本國は、格別の理由なくして朝鮮を攻め、朝鮮は、危急なることを我が明國に告げたので、我が明國の皇帝は、大に怒つて、大軍を派遣して、朝鮮を救はれ、平壤を取りもどし、開城を取りもどし、それから、遂に國都を取りもどし、浮田、小西を生捕り、その軍勢を殘らず逐ひ拂ひ、琉球、暹羅の諸國をして、日本の國境に攻め寄せしめることにした。しかるに、貴殿は、それでも猶ほ、朝鮮を守つて居られるが、誰の爲めにしやうと思はれるのであるか。我が明國の皇帝は、貴殿の道義の高きことを聞かれて、使臣なる吾をして、貴殿の爲めに此事を報告せしめられたのである。貴殿の爲めに計るに、速に朝鮮の王子を返し、軍勢を引き纏めて、日本に歸られるが、一番宜しいのである。左樣でなくば、四十萬人の明國の軍勢が、朝鮮の兵を驅り立てゝ、東に向つて進み、直ちに安邊に集まるであらう。其時に至つて、貴殿が明國に服從しやうと思はるゝとも、出來ることではありませぬと曰つた。すると、清正は、祐筆をして之に答へしめて曰ふには、われ清正は、本國の命令を奉じて戰ふことを知つて居るけれども、明國の命令を聞き入れて和睦することをば知つて居らぬのである。されば、貴公は、歸つて明の天子に話してくれよ。味方には、やぶれたる甲冑と破損したる兵器とがあるが、近頃、無事に苦んで居る。貴國が來て我をうたうとして居られることは、先刻承つた。けれども、咸鏡道の途は、險阻にして狹く、騎士はならんで行くことが出來ず、步卒は行列を成して進むことが出來ぬから、貴國の兵の來るのは、一日に一二萬だけであらう。そこで、味方がこれを迎へ擊つて、一日に一萬人づゝを殺すときは、四十日にして貴國の兵を殺し盡すであらう。又、一日に二萬人づゝを殺すときは、二十日にして、貴國の兵を殺し盡した上で、西に向つて進み、遼河を通過し、燕を擊ち破つて、明の天子を生捕つて我が日本に引き連れて歸ることに致さう。われ清正は、そこで、本國に復命することが出來るので、誠に有りがたい事である。かやうに、明の天子に申してくれよと曰つたので、仲纓は、驚いて、逃げ歸つた。

當是時。明軍乘勝。鼓行而東。國都將吏令大同以東諸城撤守來會。諸城皆聽命。獨小早川隆景。與毛利秀包。立花宗茂。弗肯。曰。吾輩竭力報國。固在今日。且明軍勝而驕。易與耳。三奉行促之甚急。乃退。未至王城三十里而軍。明軍進入開城。遂渡臨津。查大受爲其先鋒。値宗茂于礪石嶺。宗茂擊破之。斬百餘人。如松乃盡引其軍而至。隆景以三萬人。邀擊于碧蹄

館。大戰良久。宗茂與秀包横擊之。如松初以火器襲平壤。一戰得志。謂和兵不足復畏。乃輕進不具銃礮。以短兵接戰。我軍兵鋭刃利。縱横揮擊。人馬皆倒。莫敢當其鋒。我兵呼聲動天。遂大破明軍。斬首一萬。殆獲如松。追北至臨津。擠明兵于江。江水爲之不流。如松痛哭徹夜。聚敗軍。退入坡州。韓將相請其再進。不肯。時天雨冰釋。如松託言坡州多泥。不可爲營。遂退入東坡。二月。猶雨。明馬多病斃。我兵縱火而進。如松退入開城。遣人還明。稱疾請代。而韓人寇我者不衰。我兵在幸州者。亦爲韓將權慄所敗。秀家等。乃使召清正。清正平橘中寇。斬首虜三千餘級。與直茂。賴定。皆之都城。明兵相驚曰。清正自北道繞襲平壤。扼我歸路。如松大懼。留諸將守臨津。而自退入平壤。

【字解】【撤守來會】……持ち場をすて、王城に會合す。【三奉行】……石田三成、増田長盛、大谷吉隆。【短兵】……刀劍等の短き兵器。【縱横揮擊】……たてよこ無二無三に得物を振ひ擊つてかゝる。【濟】……排なり、おしおとす。【痛哭徹夜】……殘念がりて夜明けに至るまで擊をあげてなげく。【坡州】……京畿道に在り。【我兵在幸州者】……増田長盛等。幸州は忠清道に在り。

【講義】この時に當りて、明の軍勢は、勝つた勢に乘じて、攻め太鼓を鳴らして、進んで東に向つた。國都に在る我が大將軍吏は、大同江より東の諸城をして守備を除き去つて來つて國都に會せしめることにした。諸城は、いづれも皆、命令を聞き入れて、國都に來り會したけれども、唯だ小早川隆景は、毛利秀包、立花宗茂とともに、承知せずして曰ふには、吾々が、力を盡して我が國に報ゆるのは、まことに、今日に在るのであつて、その上、明の軍勢は、勝利を得たので心が驕りたかぶつて居るから、相手にするのは何でも無いことで御座ると曰つた。けれども、三奉行が、隆景等を催促することが甚だきびしかつたので、隆景等は、そこで、退却して、王城の手前三十里のところに陣取つた。明の軍勢は進んで開城に入り、それから遂に臨津を渡り、査大受がその先鋒であつて、宗茂に礪石嶺に出遇つたが、宗茂が擊つて之を破り、百餘人を斬つた。如松は、そこで、其軍勢を殘らず引き連れて到著した。隆景は、三萬人の軍勢を引き連れて、碧蹄館に迎へ擊つて、大に戰ふことやゝ久しかつた。宗茂は、秀包とともに、横合から之を擊つた。如松は、はじめ、火道具を以て平壤を不意擊し、一戰して、自分の思ふやうになつたので、日本の軍勢は、もはや畏るゝに足らぬと思うて、そこで、輕々しく進んで、鐵砲大砲を用意せず、短い兵器を以て接戰したのであるが、我が日本軍の兵器は鋭く及は善く切れ、それを縱横に振りまはして擊つたので、明軍の人馬は皆斬りたふされ、敢て其鋒先に當る者は無かつた。我が日本の軍勢の呼ばゝる聲は、天を震ひ動かすほどで、遂に大に明の軍を打ち破り、首を斬ること一萬、ほとんど如松を討ち取ちうとしたほどであつて、かくて、明軍の逃げ走るを追つかけて、臨津に至り、明の兵を江に押し落したので、江の水は、其屍骸の爲めにせき止められるほどであつた。如松は、夜どほし、ひど〳〵歎き悲み、敗れたる軍勢を聚めて、退却して坡州に入つた。すると、朝鮮の大將大臣などは、如松に、再び進まんことを請うたけれども、如松は、承知しなかつた。その時に、雨が降つて氷が釋けたので、如松は、坡州には泥が多くして陣營をこしらへることが出來ないと云ふ事に、かこつけて、とう〳〵、退却して東坡に入つた。二月に、まだ雨が降つて、明の馬は多く病氣になつて、斃れたので、我が軍勢は、火を放つて進んだ。すると、如松はかゝ大敗北をしたけれども、朝鮮人が、我に寇することは、衰へなかつた。ると申し立てゝ、代理の者を派遣せられんことを請うた。如松はかゝ大敗北をしたけれども、朝鮮人が、我に寇することは、衰へなかつた。我が軍勢の幸州に居る者も亦、朝鮮の大將權慄に敗られた。秀家等は、そこで、使者をして清正を召し寄せしめた。清正は、橋中の敵兵を平定し、討ち取つた首級と捕虜とが三千餘級にも及んで、大勝利を得たときであつたが、直茂、賴定とともに、いづれも皆、國都に行くことにした。すると、明の兵は相驚いて曰ふには、清正は、北道より、ぐるりと廻つて平壤を不意擊し、我が軍の歸り路を喰ひ止めるのであらうと曰つた。そこで、如松は、大に懼れて、部下の諸大將を留めて臨津を守らせて置き、そして、自身は退却して平壤に入つた。

【參考】左に太閤記の一章を抄錄して以て參考に資す。

小早川隆景明兵を破る

（上略）然るに明の將軍李如松は大軍を引率し、日本勢の跡を慕ひ、開城府に着し、爰にて暫くは人馬の足を休め、正月廿五日、坡州といふ所まで軍兵をおし出しぬ、日本の諸大將是を聞いて、軍の評定まち〳〵なりしが、浮田秀家、石田三成を始め、其餘の諸將も、大軍を引き受け、野合の合戰危ふかるべし、惣軍王城に楯籠り、矢石を備ふべしと議せられけるを、立花左近將監宗茂、目をいからし、刀の柄に手を掛け、敵こはければとて逃げ籠るやうやある、唯馳せ合せ、蹴散らして捨てん物をと、氣色ばうて立ち上れば、人々是に勵まされ、さらば誰をか先陣に進むべしといふ時に、小早川隆景、聲を勵まし、此度の合戰においては、某先陣に進むべしと、兼てより申しつる事よ、誰にもあれ先陣は思ひもよらずとて、頓て我が陣中に走り入り、軍勢の手配、陣備等に及びける、先手は小早川隆景が勇臣栗屋四郎兵衛尉、村上彈正、野島掃部の三千餘人、立花宗茂、久留米秀兼、毛利元康八千餘人の勢にて、右の方三町計に陣を取り、奇兵をなす、本陣は隆景一萬三千餘人、旌旗の色粲然と、人馬猛にいさみ立ちけるは、げに關西の一人勇武の大將かなと、見る人擧つて感じけり、翌くれば二十六日、まだ東雲の朝霞を拂ひ明の大軍黑みかゝつて、其間一里計に押し寄せたり、此時隆景、味方の軍兵を後向に立たせ、敵の勢を見るべからずと下知しければ、惣軍皆敵の方を後にす、是は明兵目に餘る大軍なれば、味方の兵士戰はざる先に心臆し、見崩れをやすべきかとの將略なり、時に侍大將野田主膳といふ者、燒飯十計木の葉に盛り、隆景の前に來り、早敵合近く相成候、聞し召され候はんやとさし出せば、隆景取つて五つ食ひ、彼の侍大將野田主膳、我も相伴仕らんとて、二つ取つて食ひ、其餘を近習の武士に與へけれども、一つも得食はで止みにけり、誠に大軍前に有りて手詰の合戰に及ぶ時は、拔群の英雄ならでは食事などは叶ふまじと、是を見る人感じける、時に黑田甲斐長政は、步卒六七人引き具し、隆景

の旗本に來り、天晴御陣押、見事に候もの哉、餘りのうらやましさに、唯一人參つて候、何方にても手傳ひ申すべしと申しけるに、隆景歡び、よくこそ參られて候へ、さらば先手に進み、栗屋に力を添へ給へと聞えければ、長政滿面に喜色を顯し、承り候とて、先陣へぞ向はれける、時に李如松が先手の大將李大受、朝鮮の大將高彦伯等、數萬の軍兵ちかぢかと進み寄れば、隆景後向きたる味方を下知し、正面に向うて鯨波を作り、數百の鐵砲一同に放ち、飛煙につれて切つてかゝる、黑田長政は寒風を防ぐ爲めとて、大綿帽子を深く被り、槍を構へて見合せけるが、すでに合戰始りしかば、彼〻綿帽子脱ぎて、世に聞えたる水牛の冑の緒をしめ、槍を上げて眞先に踊り出でらる、隆景が軍兵是れを見て、長政爰を助けらるゝぞ、今日の軍は勝ちたりと罵りて、無二無三に突き立つれば、李大受、高彦伯等、爰を先途と死力を盡し、士卒を下知し勇を勵し、追ひつかへしつ戰ひけるは、夥しともいはん方なし、日本の兵卒は、或は三尺又は四尺に餘りたる大太刀に長き柄をはめ、眞向より斬り割る程に、大明朝鮮の薄鐵にて造りたる甲冑を斬る事、只熟柔を切るが如く、或は兜の天邊よりずばと二つに別るゝもあり、肩より胸をかけて斜に切つて倒すもあり、鮮血流れて紅の湖をなし、屍は積んで岸に等し、明の軍兵慄ひ恐れて右往左往に敗北す、李如松、是を見て、後陣より大軍を驅つて大に進めば、兼ねて備へし日本の奇兵、久留米、毛利が勢八千餘人、横ざまに突き立つれば、大將隆景一萬人、正面より一文字に切つてかゝり、命は塵芥の如く、只々名こそ惜しけれと、明兵の打つ劍を鎧の袖にて支へ、彼の大刀を振つて薙ぎ立つれば、大明の兵士大軍なりと雖、面を向くべきやうもなく、七裂八裁に切り崩され、西をさして敗走すれば、日本の後陣に備へたる浮田中納言秀家、岐阜中納言秀信、丹波中納言秀勝、木村常陸介、糟谷内膳正、長谷川藤五郎、中川右衞門大夫、淺野右京大夫等、惣軍八萬餘人、一度に鬨を作り、備を亂して切り立つれば、大明、朝鮮の軍勢、討たるゝ者その數を知らず、大將李如松も散々に切り立てられ、餘りに馬を馳せける程に、後ざまにどうと落ちたり、隆景が家臣井上五郎兵衞、李如松とは見知らねども、敵の大將ぞさんなれと、鎗を揚げて飛び來るを、從卒二百餘人駈け隔て、是を救ひ、他の馬に乘せて逃げのがしたり、大將かゝの如くなれば、從卒なじかはこらふべき、薙ぎ倒され切り殺され、討たるゝ者三千餘人、辛うじて坡州までぞ退きける、（下略）

秀吉使毛利秀元。加藤光泰。細川忠興等七將赴援。三月。攻晉州。晉州城險。韓王之奔。置其重器。以精兵二萬守之。七將皆大敗。退入都城。都城傍有龍山倉。我兵仰食焉。査大受。李如梅。潛兵火倉。而金命元等。軍臨津南。絶我糧道。已而我與明軍。皆大疫。三奉行以糧竭。欲退守釜山。光泰曰。糧竭寧食砂。國都不可棄也。清正亦爭之曰。吾以孤軍破强胡數萬。明韓兵何足爲意。何不奪其糧。三成曰。公宜往奪。不得取助於人。清正曰。諾。卽夜。以手兵襲明軍。奪糧而還。時如松使沉惟敬計和。惟敬赴北京。報曰。秀吉欲封日本國王。如足利氏故事耳。因與石星定議。來韓都城。厚賂行長曰。太閤歸韓俘。則割慶尙。全羅。忠淸三道。封爲王。行長等素不學。不諳封王故事。以爲王於明之謂也。欲許之。已而知其非。惟敬巧彌縫之。淸正不可其議。行長與三奉行皆懷歸。乃報秀吉曰。明人欲尊殿下爲皇帝。秀吉卽許和。惟敬請解都城兵。諸將乃焚城。更殿而東。如松乃肯進。韓相柳成龍請尾擊之。乃遣李如栢等萬餘人。覘我陣整。不敢逼。諸將至慶尙。起蔚山。東萊。金海。巨濟等十八屯。以俟秀吉令。明主以孫鑛代宋應昌。遣劉綎。吳惟忠等。分守星州。居昌諸城。而使謝用梓。沉一貫。沉惟敬。來謁秀吉于行營。秀吉饗明使者。還之。遣小西如安與偕。放還淸正所俘二王子大臣以下。以大友義統不救行長。罰奪其封。遂令在韓諸將。屠晉州。以償前敗。

【晉州】……慶尙道に在り。【重器】……寶器。【仰食焉】……龍山倉より兵糧を取るを云ふ。【厚賂行長】……賂は一に賄に作る。【俘】……音フ、とりこ、捕虜。【封王故事】……王に封ずることの先例。【彌縫】……音ビホウ。とりつくろふ。【蔚山】……【東萊】……【金海】……【巨濟】……【星州】……【居昌】……並に慶尙道に在り。

【補説】秀吉は、毛利秀元、加藤光泰、細川忠興などの七人の大將をして、出掛けて行つて援けしめることにした。この七人の大將は、三月に、晉

州を攻めた。晉州の城は險阻であつて、朝鮮國王が逃げ奔るときに、その寶物を此城に置き、すぐり拔きの兵二萬人をして之を守らしめて置いたのである。秀元、光泰、忠興等の七人の大將は、皆、大に敗軍して、退却して國都の城に入つた。都城の傍に、龍山倉といふ米倉があつて、我が兵は、此處から兵糧を取るのであつたが、査大受、李如梅が、兵をひそめて、倉を燒き拂ひ、そして、金命元等が、臨津の南に陣取つて、我が日本軍の兵糧の道を絶ち切つた。とかくする中に、我が軍と明の軍とには、いづれも皆、大に疫病が流行した。三奉行は、兵糧が無くならうとしたので、退いて釜山を守ちうと思うた。光泰が曰ふには、兵糧が無くなつたならば、いつそ、砂を食べて居ても、此國都をば棄てるとは出來ませぬと曰つた。清正も亦、釜山に退却することの宜しからぬ事を述べ立てた。そして曰ふには、吾は、孤立して援兵無き軍勢を以て、強猛なるえびす數萬騎を擊ち破つたことがある。明や朝鮮の兵は、氣にかけるほどの事は無いのである。どうして、明や朝鮮の兵の糧食を奪ひ取ることに致されぬのかと曰つた。三成が曰ふには、それでは、貴殿は、出かけて往つて敵の兵糧を奪ひ取るが宜しい。たゞし、人から助けて貰つてはなりませぬと曰つた。清正は、承知いたしたと曰ひ、其夜に、部下の兵を引き連れて、明の軍を不意擊して、兵糧を奪ひ取つて、引き還した。この時に、如松は、沈惟敬をして和睦を計らしめた。すると、惟敬は、北京に行きて報告して曰ふには、秀吉は、足利氏の時の先例の如く日本國王に封ぜられたいと思うて居るので御座りますと曰ひ、因つて、石星と、評議を決定して、朝鮮の國都の城に來つて、厚く行長に賄賂を贈つて曰ふには、若し太閤殿下が朝鮮の捕虜を御返し下されるならば、慶尙、全羅、忠淸の三道を割いて、國王に封じましやうと曰つた。行長等は、はじめより、學問をしなかつたので、國王に封ずると云ふ事の先例を善く知つて居らず、明に王となることである と思うて、惟敬の言ふところを許さうとした。とかくする中に、行長は、其意味は、左樣では無くして、卽ち明に王となることでは無いと云ふことを知つたが、惟敬は、うまく、之を取り繕うた。清正は、此相談を善いとはしなかつたが、行長と三奉行とは、いづれも皆、我が日本に歸りたいと思うて居つたので、そこで、秀吉に報告して曰ふには、明の人は、殿下を尊んで皇帝としやうとして居りますと曰つた。すると、秀吉は、卽座に、和睦することを許した。すると、惟敬は、都城を守つて居る日本の兵を解き去らんことを請うた。我が諸大將は、そこで、城を燒き拂つて、かはるゞ、しんがりとなつて、東に向つた。如松は、そこで、やつと、進軍することを承知した。すると、韓の宰相なる柳成龍は、日本兵の退却するを追ひ擊たんことを請うたので、如松は、そこで、李如柏等一萬餘人を派遣した。けれども、如柏等は、我が日本軍の陣立が整頓して居るのを見て、敢て近づき逼らなかつた。かくて、我が諸大將は、無事に、慶尙道に到著し、蔚山、東萊、金海、巨濟などの十八箇所の屯營を起し、其處に居つて、秀吉よりの命令を待つて居つた。明主は、孫鑛を以て、宋應昌に代らしめ、劉綎、吳惟忠などを派遣して、星州、居昌などの處々の城を手分けして守らしめ、そして、謝用梓、沈一貫、沈惟敬をして、我が日本に來つて、那古邪の行營に於て、秀吉に謁見せしめた。秀吉は明の使者を饗應して、之を還らせ、小西如安を派遣して、一處に明國に行かせ、淸正が生け捕つた朝鮮の二人の王子、大臣以下の者を放ち還し、大友義統がさきに平壤の合戰に行長を救はなかつたので、罰して其領地を取り上げ、遂に、朝鮮に在留せる諸大將をして、晉州を屠り殺して、前日の敗北を償はしめることにした。

六月。諸將合兵圍晉州。城兵益熾。我軍塡濠。蒙竹楯仰攻。城上矢石如注。清正造龜甲車。牛革包之。載以死士。穿城足。樓櫓崩折。清正與黑田長政先登。諸將繼之。斬城將徐禮元。金千鎰等。鏖六萬餘人。夷城池而返。醃禮元首。獻之行營。仍屯故地。韓王大驚。訴之明。李如松令沉惟敬來見行長。曰。公等許和。未十日有晉州之事。何也。行長怒曰。汝請和。而明兵入韓者益衆。何也。惟敬語塞。去至北京。請石星召還如松以下。獨留劉綎。吳惟忠等萬人。

【字解】【龜甲車】……其形、龜の甲の如し、故に名づく。其製、堅板を以て、箱を作り、牛革にて之を包み、輪を內に設け、箱の中に在る者、棒を以つて棹となして、之を進退するなり。【牛革】……音ギウカク。牛のなめし皮。【穿城足】　城の根に穴を掘る。【醃】……音エン。鹽漬にする。【語塞】……返答することが出來ぬ。

【講義】六月に、諸大將は、兵を合はせて、晉州城を圍んだ。城兵の勢は益々盛んであつた。我が兵は、城の堀を埋め、竹で造つた楯をかざして、仰いで攻めたが、城の上から射おろす矢や、投げつける石は、雨の降り注ぐが如くであつた。清正は、そこで、龜甲車を造り、牛のなめし皮を以て之を包み、その車に、決死の士を載せて、城の根もとに穴を掘つた。そこで、城の高殿や、物見やぐらが、崩れ折れた。清正は、黑田長政とともに、先登し、諸大將が之に繼いで登り、城の守將徐禮元、金千鎰などを斬り、六萬餘人を皆殺しにし、城を押しつぶして、引き返し、禮元の首を鹽漬にして、之を那古邪の行營に差し上げ、矢張り、もとの處に屯營して居つた。韓王は、之を聞いて、大いに驚いて、この事を明に訴へた。すると、李如松は、沈惟敬をして我が軍に來つて行長に面會せしめて曰ふには、貴殿等は、和睦を許して、未だ十日にも成らないのに、晉州の事件があつたのは、如何なる譯でありますかと曰つた。すると、行長が怒つて曰ふには、汝は和睦を請ひながら、明の兵の朝鮮に入り來る者が、ますゝ多くなつたのは、如何なる譯であるかと曰つた。惟敬は、返答につまつて、そこで、立ち去つて北京に至り、石星に請うて、如松以下を召し還し、たゞ劉綎、吳惟忠等一萬人を朝鮮に留めて置くことにした。

明主疑如安。不敢納。舍之遼東。秀吉亦以如安久不還。意惟敬欺己。日夜謀議軍事。黑田孝高私語同僚曰。吾聞外征諸將有威無恩。所過無不殘滅。夷民逃匿。野毋青草。是得其地。果何益哉。且聞兩先鋒爭功相鬩。法

令牴牾。衆莫知所從。而浮田宰相不能制之。夫浮田。非統御之才也。能堪此任者。非德川則前田。若孝高而已。秀吉側聽而首肯之。已而大召諸將。會議行臺。曰。朝鮮之事。如今日狀。則何時定乎。乃公不可不自往也。吾留家康使守吾邦。無復所顧慮焉。今擧國內兵。雖少猶可得三十萬。因顧諸將曰。利家。汝將五萬。曰。氏鄕。汝亦將五萬。吾親將十五萬爲中軍。左右汝二人。掃蕩朝鮮。直入于明。疾具兵艦。吾意決矣。德川公弗懌。謂利家。氏鄕曰。二公擢于群中。榮孰大焉。僕少小事弓馬。今雖老矣。猶足以當一面。何居守爲。二公幸推輓之。彈正少弼進曰。德川公勿復言。臣視殿下近狀。彼爲野狐所憑爾。秀吉怫然扣刀而跽曰。吾爲狐憑。有說乎。無說則死。少弼對曰。有說也。饒使無說。臣固不辭死。且如臣等頭。雖剉千百。何足惜乎。顧天下纔定。瘡痍未愈。人人希休息無爲。而殿下乃興無故之軍。以殘暴異域。使我父子兄弟暴骸骨於海外。哭泣之聲四聞。加之漕轉賦役之相因。所在盡爲荒野。當是之時。殿下一擧趾。則六十州之寇賊雷動風起。雖有德川公。安得鎭定之乎。是其所以願外征爾。臣恐殿下舟師未達釜山。而根本之地。已爲他人所據。是勢之最易覩者。使殿下有平昔之心。豈有不察於此。不察於此。故謂之狐憑耳。鄙語曰。鼈欲啖人。反啖於人。殿下之謂也。秀吉益怒曰。狐乎。鼈乎。吾且舍諸。以臣罵君。不可舍也。將拔刀斬之。利家。氏鄕進擁之曰。臣等在此。苟欲行誅戮。不必勞親手。因斜睨少弼曰。可去矣。少弼乃徐起還舍。待罪數日。有上變事者。肥後賊梅北擧兵。取佐敷城。秀吉大驚。急召少弼。謝曰。吾甚慚於汝也。命汝兒幸長。爲大將。往定肥後。因命德川公。以其將本多忠勝助之。未發。肥後人斬梅北來獻。則止。命少弼按定其國。減韓戍卒。

【殘滅】……そこなひほろぼす。【野毋青草】……むやみに土地を踏み荒して、稼穡は言ふまでも無く、野に青い草さへも無くなつた。甚しく亂暴なるを云ふ。【兩先鋒】……清正と行長。【相圍】……あひせめる。【牴牾】……音テイゴ。牴は觸なり、牾は違戻なり。くひちがふ。彼れと此れと相そむき違ふ。【側聽】……ほのかに聞く、それとなく聞く。【首肯】……音シュカウ。成る程左樣であると思ふ。【掃蕩】……音サウタウ。掃は除なり、蕩は排蕩なり。穢垢を拂ひ去る。【推輓】……音スキバン。後送を推と云ひ、前牽を輓と云ふ。推薦する、取り持つこと。【彈正少弼】……淺野長政を云ふ。淺野氏は、山陽の主家なるを以て、憚りて名を書せず。凡そ全篇中、名を書するを憚る者は、淺野氏と德川氏とのみ。【野狐所憑】……憑は依なり。狐につかれる。【怫然】……音フツゼン。怫は艴と通ず。怒つて色を變ずる也。むつとする。【扣刀而跽】……跽は、ひざまづく。刀に手をかけて居合腰になる。跽は一に跪に作る。【無說則死】……言譯が無いならば殺すぞ。【剉】……首を切る。【瘡痍】……音サウイ。劍及の傷。【殘暴】……そこなひあらす。【異域】……外國。【暴】……さらす。曝と通ず。【漕轉賦役之相因】……海陸の運送、夫役がつどひ重なること。【平昔】……平生。【鄙語】……世俗の諺。【鼈】……音ベツ。河龜、すつぽん。【啖】……噉と同じ。食ふ。【舍】……ゆるす、おく、其まゝに差しおいて問はず。【斜睨】……音シャゲイ。尻目にかける。【梅北】……宮內と稱す。薩摩の人にして、肥後に在りて寇を爲す。清正記に、肥後の人梅木田民部、叛いて熊本城を陷る云々とあり。此二說の中、未だ孰れか是なるを知らず。【戍卒】……音ジュツソツ。守備兵。

【講】明主は、如安を疑つて、むざとは之を納れず、之を遠東に留めて置いた。秀吉も亦、如安が久しくたつても還つて來ないので、惟敬が自分を欺いたのでは無いかと疑ひ、日となく夜となく、軍事を相談して居つた。黑田孝高は、ひそかに、その同役に語つて曰ふには、吾が聞くところによれば、海外に征伐に出掛けて居る諸大將は、威武はあるけれども恩惠はなく、その通り過ぎる所は、そこなひ滅さぬところは無く、そこで、えびすの人民は逃げ匿れ、野原には青い草も生えて居らぬ程であると云ふことであるが、かくては、其土地を得たとしても、果して何の役に立つであらうぞ。又、聞けば、二人の先鋒(卽ち淸正、行長)は手柄を立てることを爭うて、相せめぎ合ひ、軍中の法度命令は、彼れと此れと矛盾して、衆くの人々は、何れの法令に從ふべきか分らずして、まごくして居り、しかるに、浮田中納言殿は之を制し止めることが出來ないと云ふことである。一體、あの浮田は、統轄制御する才能ある人物では無いのである。此重任に堪へることの出來るものは、德川でなくば、前田か、若しくは、この孝高だけであると曰つた。秀吉は、それとなく、此言を聞いて、尤も至極であるとうなづいた。とかくする中に、秀吉は、大に諸大將を召し集めて、行營の陣屋に會合して、評議した。秀吉が曰ふには、朝鮮の事は、今日の有樣では、何時になつたら平定することか、分らぬのである。されば、乃公が、自身に出かけて行かなければならぬのである。吾は、家康を留めて、吾が邦を守らせて置くときは、もはやあとの事を心配することは無いのである。今、日本國內の兵を殘らず召し集めるときは、少くとも、猶ほ三十萬人を得ることが出來ると曰ひ、そこで、諸大將を振りかへつて見て曰ふには、利家よ、汝は五萬人の大將となれと曰ひ、又曰ふには、氏鄕よ、汝も亦五萬人の大將となれ。吾は、自身に、十五萬人を引き連れて、中軍となり、汝等二人を左右に備へて、朝鮮を片つ端から攻め平らげて、直に明國に攻め入らう。されば、早く兵船の用意を致せよ。吾が心は決定したのであると曰つた。德川公は、不機嫌なる樣子で、利家、氏鄕の二人に向つて曰ふには、あなた等御二人は、大勢の中から拔き出され、まことに、此上も無い光榮で御座る。私は、少年の時から、弓馬を仕事として居つたので、今は年寄つたけれども、それでも猶ほ、一方面に當ることは出來ましやうから、どうして、この日本に留つて守つて居ることを致しましやうぞ。御二人、どうぞ、推薦して下されと曰つた。すると、淺野長政が進み出でゝ曰ふには、德川殿、もはや、何にも言はれるな。いくら言つても駄目で御座る。私、殿下の近頃の樣子をつくづくと見まするに、彼れは、狐につかれて居られるので御座ると曰つた。秀吉は、むつと顏色を變へて、刀に手をかけて居合腰になつて曰ふには、吾を狐つきであると云ふのは、如何なる譯か。言譯がないならば、殺して仕舞ふぞと曰つた。長政が對へて曰ふには、言譯はあります。又、たとひ言譯が無いとしても、私は、勿論、死ぬることを厭ひませぬ。其上、私等の樣な者の首は、千百を切つたとても、惜むほどの事はありませぬ。振り返つて考へて見るに、天下はやつと平定して、人民の手傷は未だ平癒せず、人々は皆休息して無事ならんことを希つて居ります。然るに、殿下は、理由の無き軍を起して、外國をそこなひあらし、我々の父子兄弟をして屍骸を海外にさらさしめられ、泣き悲んで居る聲は四方に聞えます。其上に、海陸の運送や租稅夫役などが重なり合つて、我が國の至る所、殘らず、荒れ果てたる野原となりました。この時に當りて、殿下が、一たび、かゞとを擧げて海外に赴かれますならば、我が日本全國六十州の一揆共は、雷の如く動き出し風の如く起つて、大變な騷亂となるで御座りましやう。さうなると、德川殿が居られたとても、どうして、之を鎭撫平定することが出來ましやうぞ。これが、德川殿が、海外征伐に出掛けることを願はれる譯で御座ります。私、恐らくは、殿下の舟いくさが、未だ釜山に到著しないのに、その根本の地たる我が日本は、已に、他人の立て籠るところとなつて仕舞ふで御座りましやう。これは、最も見易き形勢で、分り切つたことで御座ります。殿下が、若し昔の通りな御心があるならば、どうして、此事を察せられないので御座りますか。世俗の諺に、河龜が人を食はうとして、反つて人に食はれると云ふことがありますが、それは、殿下の事で御座りますと曰つた。秀吉は、ますくく怒つて曰ふには、狐であるか、河龜であるか、それは、まづ、どうでも善いとして、臣下たる者が主君を罵るのは、赦すことは出來ないのであると曰ひ、將に刀を拔いて長政を斬りつけやうとした。すると、利家と氏鄕とが、進み出でゝ、秀吉を抱き留めて曰ふには、私共が此處に居りますときは、若し誅戮を行はうと思召すならば、必ずしも殿下の御自身の御手を煩はすには及びませぬと曰ひ、そこで、長政を尻目に見て曰ふには、立ち去られよと曰つた。長政は、そこで、ゆつくりと、起ち上つて、陣小屋に還つた。かくて、罪を待つこと數日であつた。すると、變事を上申する者があつて曰ふには、肥後の賊なる梅北が、兵を擧げて、佐敷を攻め取つたと曰つたので、秀吉は、大に驚いて、急に長政を召し寄せ、詫び入つて曰ふには、吾は、はなはだ汝に對して恥づかしく思ふのである。汝が子幸長に申し附けて、大將となし、出かけて行つて、肥後を平定させることに致さうと曰ひ、因つて、德川公に申し付けて、その部下の大將本多忠勝をして、之を助けさせることにした。幸長等が、未だ出發しないうちに、肥後の人が、梅北を斬つて、那古邪に來つて獻じたので、そこで、其儘に止み、長政に命じて、肥後を撫で安んじ鎭定せしめ、朝鮮在留せる守備兵を減じた。

【參考】左に藩翰譜の一條を抄錄して以て參考に資す。

淺野

(上略)　ことし冬、太閤、朝鮮の軍はかくしからぬを怒つて、德川殿を初め、宗徒の大名を、名護屋の陣に集め、朝鮮の軍、今のやうならんには、いつ事定るべしとも思へず、今は秀吉みづから向はんと思ふ、三十萬の勢を三手に押し分け、利家氏鄕に大將させ、三道より向ひ、朝鮮を打ち破り、まつすぐに大明に攻め入らん、本朝の事、家康さへましませば、心に懸る所なし、かたくなる如何にや思ふと仰せある、德川殿御氣色損じて、利家氏鄕等に向ひ、日本の大名、多き中に、かたくなる二人選り出されて、一方の大將を賜はらんこと、弓矢取つての面目、何事かこれに過ぎん、抑も家康苟も弓馬の家に生れ、戰の中に年老いぬ、今この大事に及びて、いかで人々の跡に留つて、徒らに本朝を守り候ひなん、小勢には侍るとも、家康も軍勢をひきゐて、必らず一方の先陣を承はるべし、かたくなの御推擧を仰ぐ所に候と宣ひしに、彈正少弼長政進み出で、暫く候ふ德川殿、殿下この年月の御振舞ひ、昔の御心とや思召す、年經る狐の入り替りて候を、何事か宣まふべきと、申しも果てぬに、太閤御佩刀に手を掛けられ、やあ、秀吉が心に、狐の入りかはつたるいはれ、きつと申せ、申し損じなば、しや首打ち落してくれんずと、責め懸けくく仰せけるに、彈正ちつとも騷がず、長政等が如きは、何百人が首刎ねられんにも、なん條の事か候べき、抑も此とし頃、よしなき軍起し、異國のみにあらず、本朝にも父を討たせ、子を打たせ、兄弟を失ひ、夫に別れ、妻に離れ、歎き苦むもの、天下に滿つ、又それより兵粮の轉漕、軍勢の賦役、七十餘州が內、悉くあれ野となる、けふ御發向あらんには、五畿七道の間、竊盜强盜等、蜂の如くに起りて、やすき所も候まじ、德川殿いかに思ひ給ふとも、如何でこれを防ぎて、動きなく御跡を守り給ふ事かなふべき　此等の事を思ひてこそ、先陣と宣ふめ、されば昔の御心ならんには、かほどの事、なゞ御心づきなかるべき、かゝる御心の附かせ給ふ事、これただ事にあらず、一定ふる狐の入りかはつたるには候はずや、賤しき者の諺に、人取らんとする鼈は、必らず人に取らるゝとは、此御事にて候ぞと、憚る所なく申しければ、太閤、鼈にもせよ、狐にもせよ、おのが主と賴みたらん者に、雜言をはく條、奇怪なりと、飛びかゝりたんとし給ふを、利家氏鄕押し隔て、人々御前に伺公せり、長政が首刎ねられんに、御手を下さるゝまでも候はず、そこ罷り申せ彈正と、云はれて、長政は、さらぬ體にもてなし、人々に色代して、己が陣に歸り、御使を待つて腹切らんとす、(下略)

八月。淺井氏復生レ男。秀吉大喜。使メ前田利家攝シテ軍事。而自歸ル大坂。命ニ所レ生ノ

男幼字棄丸。長曰秀賴。韓王乃敢歸都城。清正喪其俘。心甚不懌。又知和議必不成。十一月。進攻安康。大破之。虜尤畏清正。呼曰鬼上官。時韓野多尸。虎豹群至。我將士留戍者。因大獵之。殺獲無數。檻其尤大者。以獻焉。三年。正月。大城于伏見。與卒二十五萬人。將帥萬石以上皆助役。三月。秀吉與秀次。及德川。前田諸將遊吉野。四月。浴有馬溫泉。是年。加藤光泰卒。初石田三成以韓都之議不合。隙光泰甚深。遂毒之也。嗣子貞泰猶幼。徙邑美濃。以甲斐賜淺野氏。

【淺井氏】……秀吉の寵姫淀君。【喪其俘】……さきに虜にせしところの二王子及び大臣を還されしを云ふ。【鬼上官】……鬼は一に夜叉に作る。夜叉は梵語、暴惡又は勇健の意、亦神鬼の類、然れども福德殊勝にして、或は諸天を護衛す。上官は長官の如し。朝鮮人、清正の武勇を畏れてかゝ云ひしなり。【多尸】……戰死者の屍骸が多かりし也。【檻】……音カン。おりに入れる。【伏見】……山城に在り。【吉野】……大和に在り。【有馬】……攝津に在り。【韓都之議不合】……光泰が、國都をば棄つべからず云々と云ひしを指す。【隙】……仲の惡きこと。

【講義】八月に、秀吉の寵妾淺井氏は、また、男子を生んだので、秀吉は大に喜んで、前田利家をして、軍事を代理せしめ、そして、自身は大坂に歸り、生まれたる男子に名をつけて、幼名を棄丸と曰ひ、長じて秀賴と曰つた。朝鮮の國王は、和議が出來かゝつて、日本兵が退いたので、そこで、敢て國都に歸つて來た。清正は、自分が折角捕虜とした二人の王子、大臣などを還されて仕舞つたので、心中に、大層、不機嫌であり、又、和睦の相談の必ずまとまらぬことを知つて居つたので、十一月に、進んで安康を攻めて、大に之を破つた。えびすは、清正を大變に畏れて、呼んで鬼上官と曰つて居つた。その時に、朝鮮の野原には戰死者の屍骸が多くあつたので、虎や豹が群をなして來た。我が將士の朝鮮に留り守備して居る者は、そこで、大に之を獵して、殺したり生捕つたりしたことが、數の知れぬほど多數であつて、其のすぐれて大なる者をおりに入れて、之を秀吉に獻上した。文祿三年の正月に、秀吉は、大に伏見に城を築き、人夫二十五萬人を繰り出し、諸大將の祿高萬石以上なる者は、いづれも皆、其工事を助けた。三月に、秀吉は、秀次、及び德川、前田などの諸大將とともに、大和の吉野山に遊び、四月には、有馬の溫泉に入湯に行つた。この年に、加藤光泰は死んだ。はじめ、石田三成は、光泰と、朝鮮の國都に於て相談が合はなかつたので、光泰と大層仲が惡かつたので、とう〳〵之を毒殺したのである。光泰の跡嗣の貞泰は、まだ幼少であつたので、秀吉は、其領地を美濃に徙し、甲斐をば淺野氏に賜はつた。

當是時。韓戍未撤。韓王數促明定和。十月。明主召如安。石星命沿道供帳。十二月。至燕。星就拜於其館。待以王公禮。厚賂之。使曲成其媾。如安諾之。居數日。明主延見之。如安騎而入。至闕。衛士呵下之。如安昂然不下。入見明主。明主令諸將相大臣會于左闕。悉問秀吉意。如安所答。勉副星意。明乃定封王議。遣正使李宗誠。副使楊方亨。以沉惟敬爲導。惟敬觖望。且難星曰。前約七事。今止封册。事必不成。星弗聽。如安與三使皆發。

【曲成其媾】……曲は枉なり。成りかねるところを無理やりにも和睦する。一說に、曲は、「つぶさに」と訓ず。【昂然】……高く擧る貌、威張るなり。【不下】……一に不可に作る。【左闕】……王城の正門の左に在る役所。【難】……辨駁する。

【講義】この時に當りて、朝鮮の守備兵を未だ除き去らずにあつたので、朝鮮國王は、たび〳〵明國を催促して、和議を定めて下されと曰つた。十月に、明主は、遼東に留め置きたる如安を召し寄せた。石星は、如安の通行する道筋の者共に命じて、宿所の手當などを爲させた。十二月に、如安は、燕(卽ち北京)に到著した。すると、石星は、其宿所に出掛けて行つて拜をなし、王公の禮を以て待遇し、厚く之に賄賂を送り、無理やりにも和睦を成立させて下さいと賴み込んだ。如安は之を承知した。その後數日にして、明主は、如安を宮中に召し寄せて對面しやうとすると、如安は、馬に乘つて宮門に入つたので、宮門護衛の兵士が、叱りつけて之を馬から下りさせやうとしたが、如安は、威張つて、馬から下りずして、やがて、宮中に入つて明主に謁見した。明主は、諸の大將宰相大臣などを左闕に寄せ集めて、秀吉の意向をくはしく問うた。すると、如安の返答は、出來るだけ、石星の意に叶ふやうに取りつくろつた。明は、そこで、秀吉を國王に封ずるとの評議を決定して、正使李宗誠と副使楊方亨とを派遣し、沈惟敬を以て案內者となした。惟敬は、之を不滿足に思ひ、其上、石星が難詰して曰ふには、前には七箇條の條件を約束したのに、今、たゞ、國王に封ずるといふ一事だけであるならば、此事は、屹成、成就せぬであらうと曰つたけれども、石星は聞き入れなかつた。やがて、如安は、三人の使者とともに、皆、出發した。

四年。二月。蒲生氏鄉卒。幼子秀行嗣。尋徙之下野。以會津封上杉景勝。三月。伏見城成。秀吉徙居。以俟明使者。置淺井氏于淀。世呼淀君。淀君既生

秀賴。而秀次無避位之意。以故秀吉城伏見。欲以讓秀次。而予秀賴以大坂也。秀次爲人頑放。其留守聚樂。淫虐日甚。漁色不論貴賤。右大臣晴季女新寡。而有孤女。秀次幷取母子嬖之。上皇崩而數日。出獵。手刄近臣。夜出戕行人。自櫓上銃人爲戲。至欲剖孕婦。世呼曰殺生關白。以殺生與攝政音相近也。田中吉政爲其傅。數諫之。乃託事遠吉政。秀吉之再赴行營也。外議以爲秀次當代行。而殊無行意。黑田孝高說之曰。殿下之威靈可謂甚矣。文武之轂。相擊于門。天下士民。視其喜怒。以爲慶弔。殿下知其故乎。秀次曰。吾爲關白故耳。曰。否。殿下不以太閤爲叔父。則能得爲關白乎。太閤年已六十。猶枕甲而眠。而殿下恬然獨縱嗜慾。何不自省乎。夫位極乎人臣。而望不厭於天下。怨之所萃。姦之所乘也。臣竊爲殿下危之。爲殿下計者。宜赴那古耶代統軍事。太閤已倦兵事。必喜許之。立功自固。誰得動之。願殿下熟思之。蒲生氏鄉亦勸其濟海。自請爲其先鋒。秀次皆弗納。有流言。關白謀反。秀吉弗問。及秀賴生。秀次自疑被廢。益不聊賴。石田三成。增田長盛。與之有卻。希秀吉旨。數惡之。

【頑放】……道理が分らずして我が儘なること。【留守聚樂】……秀吉が那古邪の行營に赴きしとき留守たり。【漁色】……網を以て魚を取るが如く、擇ぶところなくして女色を貪ること。【晴季】……菊亭右大臣。【上皇崩】……正親町上皇、文祿二年正月、崩御。【戕行人】……戕は音シャウ、殘なり、殺なり。道を行く人を殺す、辻斬りをする。【銃人】……鐵砲にて人を打つ。【剖孕婦】……剖は、さく、中分なり。孕は音ヨウ。はらむ也。はらみ女の腹をさき胎兒を見る。【外議】……世間のうはさ。【轂】……音コク。車輻の湊るところ、車の輪の中心、こしき。【慶弔】……慶は賀なり、弔は傷なり。或はよろこび、或はいたむ。【枕甲而眠】……戰陣に在る體なり。【恬然】……音テンゼン、安靜なり、のんき。【縱嗜欲】……嗜は音シ、好む也。自分の好むところの慾を思ふ存分にする。淫虐漁色等を指す。【不厭於天下】……天下に於て十分と思ふ事が無い。關白となつて天下の事を自分勝手にしても十分と思はぬを云ふ。【萃】……集まる。【姦之所乘】……姦惡なる臣下が附け込みどころ。【不聊賴】……聊は音レウ、亦賴なり。賴は恃なり。心だよりにすること無し、覺束なく不安心に思ふこと。

【講義】文祿四年の二月に、蒲生氏鄉が死んだ。幼少なる子秀行が跡を相續した。間も無く、之を下野に徙し、會津を以て上杉景勝を封じた。三月に、伏見城が出來上つた。秀吉は、從つて此處に居り、以て明の使者の來るのを待ち、寵妾淺井氏を淀に置いたが、世間では之を淀君と呼んで居つた。淀君は、すでに秀賴を生んで、秀吉の實子が出來たのに、秀次は、位を避けやうとする意志が無かつたので、それ故に、秀吉は、伏見に城を築いて、これをば秀次に讓り、そして秀賴には大坂城を與へやうと思うて居つた。秀次は、その人物、事物の道理が分らず、我が儘勝手であつて、秀次が、留つて聚樂を守つて居るときには、淫亂暴虐が、日增しに甚しく、婦人を弄ぶに、身分の貴賤をかまはず、右大臣晴季の娘が、近ごろ、後家となつて、父親の無くなつた娘があつたが、秀次は、其母親と娘とを一所に召し寄せて、之を妾として寵愛し、正親町上皇が崩御せられて後わづかに數日にして、出で、獵を爲し、手づから近侍の臣を殺し、夜、外に出で、道を行く人を殺し、城のやぐらの上から、鐵砲を以つて人を打つて樂となし、はらめる女の腹を割いて見やうとするほどにも至つたので、世間では、殺生關白と呼んで居つた。これは、殺生と攝政と音が似寄つて居るからである。田中吉政は、秀次の附人であつて、たびたび之を諫言したので、そこで、秀次は、面倒くさく思うて、事にかこつけて、吉政を遠ざけるやうにした。秀吉が、ふたゝび、肥前那古邪の行營に出掛けて行くときに、世間の評判では、秀次が代つて行くであらうと云つて居つた。けれども、秀次は、一向に行かうとする意志が無かつた。そこで、黑田孝高が秀次に說いて曰ふには、殿下（秀次を指す）の御威光は、まことに盛んなもので御座ります。殿下に伺候する文官武官の車のこしきが、御門外に於て擊ち合ふほどで、天下の士民は、殿下の喜びなされるのを見ては慶賀し、殿下の怒りなされるのを見ては痛み歎くほどで御座りますが、殿下は、その譯を御承知で御座りますかと曰つた。すると、秀次は、無雜作に、曰ふには、それは、吾が關白であるからであると曰つた。孝高が曰ふには、左樣では御座りませぬ。殿下は、太閤を叔父樣として居られなかつたならば、關白となることは、出來ませぬ。そして、太閤は、年已に六十歲にも御成りになるのに、それでもまだ、鎧を枕にして眠られます。然るに、殿下は、氣樂にして、たゞ、御自分の致したい事を思ふ存分に致して居られますが、どうして御自身に反省せられませぬか。一體、位は關白となつて、人の臣下たる者の此上も無いところに達しながら、それでも、十分に自分の望を遂げたとしないのは、怨が集まつて、惡者どもが附け込むところで御座ります。私、ひそかに、殿下の爲めに、之を危ぶみます。殿下の爲めに計りまするに、那古邪に御出かけなされて、太閤に代つて、軍事を統轄なされるが、宜しう御座ります。太閤は、もはや、兵事に倦んで居られるから、屹度、喜んで、之を許されるで御座りましやう。そこで、殿下が手柄を立てゝ御自身に根據を固く致されたならば、誰か動かすことが出來ましやうぞ。どうぞ、殿下、よく〳〵此事を御考へなされよと曰つた。蒲生氏鄉も亦、秀次に海を渡つて朝鮮に御出掛けなされと勸め、そして、自分が、其先鋒となりたいと申し出でたけれども、秀次は、皆、聞入れなかつた。さうする中に、根無し言があつて、關白秀次が謀叛を企てゝ居ると云つたけれども、秀吉は、之を棄てゝ置いた。やがて、秀賴が生れるに及んで、秀次は、自身

に、廢せられて仕舞ふかも知れぬと疑ひ、ますく、不安心に思うて居った。石田三成、增田長盛は、秀次と仲が善くなかったので、秀吉の氣に入りたいと思うて、たびく、秀次の事を惡く言った。

初常陸介木村重茲。有寵於秀吉。而爲三成奪其寵。乃結於秀次。秀次自知取怨多也。每出遊。輒具鎧仗。又厚贈諸侯伯。而與之誓。三成。長盛因證其有反形。七月。秀吉使三成。長盛。及前田玄以就詰問之。秀次大駭。獻誓書七通。秀吉意稍解。翌夜。重茲乘婦人車入聚樂。盡漏而出。三成偵知以告。比曉秀次促德川氏嗣子。使朝參。欲因劫爲質。嗣子走歸伏見。毛利氏亦獻秀次所擬誓書。秀吉大怒。使使召秀次。秀次愛將吉田修理請假萬人夜襲伏見。弗聽。遂赴謁。不許見。命放之高野。附僧興山監守焉。興山南征時首納欵者也。於是。奏請削秀次在身官爵。廢爲庶人。三成勸遂殺之。潛諷興山。促其自裁。秀吉遂遣福島正則就賜死。然冀興山乞其命也。正則還。獻秀次首。秀吉愕然曰。山僧無情。三成請而梟之京師。併其妻兒。姬妾。三十餘人。皆斬之。瘞之一坎。名曰畜生冢。毀聚樂。徙諸邸第于伏見。召賞吉政。分秀次地。予福島正則。以清洲。誅夷木村重茲以下。重茲有遺腹子曰重成。其母嘗乳養秀賴。以故秀吉召祿重成。任長門守。以隷

於秀賴。三成既誅重茲。遂誣伊達。最上氏黨秀次。有匿名書。曰。伊達。最上欲分豐臣而霸。秀吉笑曰。是怨家所爲耳。乃皆釋之。淺野左京大夫書記芹川藤助者。亡命歸三成。三成使僞作舊主通聚樂書。上之。因發兵圍淺野氏。前田利家爲白其冤。秀吉捕鞫藤助。得實。乃還於淺野氏。磔之。先是。大納言秀俊卒。秀俊亦昏暴。嘗觀蜻螟瀑。命左右自投于湫。左右與之俱沒。無嗣。國除。以郡山予增田長盛。以藤堂高虎爲今治城主。

【反形】……謀叛の形跡。【盡漏】……漏は刻なり、水時計なり。盡漏とは、夜の時計の打ち終る頃まで、深夜までを云ふ。【德川氏嗣子】……秀忠を指す。【伏見】……太閤の居所。【所擬誓文】……かくの如く認めて差し出せよと云ひし誓書の文案。【在身官爵】……現在の官爵。【姬妾】……二字にて、めかけを云ふ。此上に一に及の字あり。【瘞】……埋む、埋藏する也。【坎】……音カン。穴。【秀次地】……尾張、伊勢、近江、美濃の四國。【匿名書】……姓名をかくしたる手紙。【亡命】……かけおちする。命は名なり、其名籍を脱して逃亡するの義なり。【捕鞫】……音ホキク。召し捕つて吟味する。【昏暴】……事理に通ぜずして暴虐なること。【湫】……音シウ。水池、瀑壺。【俱沒】……一に俱投に作る。【郡山】……大和に在り。【今治】……伊豫に在り。

講義　はじめ、常陸介木村重茲は、秀吉に寵愛せられて居つたが、その後、三成に、秀吉の寵愛を奪ひ取られたので、そこで、秀次に取り入つた。秀次は、自分でも、人から怨まれて居ることが多いと云ふことを知つて居つたので、外に出で、遊ぶたびごとに、いつでも、鎧や兵器を用意し、又、諸の大名達に手厚き贈物をなして、之と誓を爲した。三成と長盛とは、そこで、秀次には謀反の形跡がある事を證據立てたので、七月に、秀吉は、三成、長盛及び前田玄以をして、秀次の處に往つて之を詰問せしめた。すると、秀次は大に驚いて、他心無き旨の誓書七通を差し出したので、秀吉の心は、大分解けた。明くる晩に、重茲は、婦人の車に乘つて、聚樂の屋敷(即ち秀次の居る所)に入り、夜深けに及んで退出した。三成は、しのびの者によつて此事を知つたので、此事を秀吉に申し上げた。夜明けの頃に、秀次は、德川氏の嗣子(即ち秀忠)を催促して、朝廷に參內せしめ、そこで之をおどかして人質としやうとしたが、德川氏の嗣子は、逃げ走つて伏見に歸つた。毛利氏も亦、秀次が寄越した誓書の文案を秀吉に獻上した。そこで、秀吉は、大に怒つて、使をして秀次を召し寄せしめた。すると、秀次の愛して居る部下の大將吉田修理は、一萬人の兵を假りて夜に乘じて伏見を不意擊いたしたいと請うたけれども、秀次は聞き入れずして、遂に伏見に出かけて往つて謁見することにした。秀吉は、對面することを許さずして、命じて秀次を高野山に放逐し、僧の興山にあづけて、監督して守らせた。興山は、さきに秀吉が南方紀州征伐の時に、第一番に秀吉に內通した者である。こゝに於て、秀吉は、朝廷に奏上して請うて、秀次の現在の身に付い

て居る官職位階を取り上げて、廢して平民とした。三成は、秀吉に、秀次を殺して仕舞ふことを勸め、又、秀次に自殺することを催促するやうに、ひそかに、興山に、それとなく諭した。かくて、秀吉は、遂に福島正則を遣はして、秀次の處に往かせて、死を賜はつた。けれども、秀吉は、興山が秀次の命乞をすることを期望して居つたのである。さうする中に、正則は還つて來て、秀次の首を差し出したので、秀吉は、大に驚いて曰ふには、山僧は實に無情な奴であると曰つた。そこで、三成は、之を京都に於て獄門にかけさらし、其妻子及び妾三十餘人を併せて、皆之を斬り殺し、之を一つの穴に埋葬して、名づけて畜生塚と曰つた。そこで、秀吉は、聚樂の屋敷を取りこはし、諸の屋敷を伏見に徙し、吉政を召し出して褒美を與へ、秀次の領地を分けて、福島正則に清洲を與へ、木村重玆以下の者共を誅滅した。重玆には、忘れ形見の子があつて、重成と曰つたが、重成の母は、嘗て秀賴に乳を與へたことがあるので、それ故に、秀吉は、重成を召し出して祿を與へ、長門守に任じ、秀賴に附けて置いた。三成は、すでに、重玆を誅して仕舞ひ、それから、遂に、伊達、最上氏が秀次に一味して居つたと誣ひて讒言した。又名を匿したる手紙があつて、其手紙に曰つてあるには、伊達氏と最上氏とは、豐臣氏を亡ぼして其地を分けて天下の諸侯の旗頭とならうとして居ると曰つてあつた。秀吉は之を見て笑つて曰ふには、これは、伊達氏と最上氏とに怨のある者が爲した仕業であると曰ひ、そこで、いづれも皆、其儘にして置いた。淺野左京大夫幸長の祐筆なる芦澤藤助と云ふ者が、かけおちして、三成の處に來てたよつて居つたが、三成は、此者をして、もとの主君幸長が聚樂の屋敷の秀次に內通した手紙を僞作せしめて、之を秀吉に差し出し、因つて、兵を繰り出して、淺野氏を圍んだ。すると、前田利家は、淺野氏の爲めに、その無實の罪なることを秀吉に申し上げた。そこで、秀吉は、藤助を召し捕つて吟味して、眞實の事情が分つたので、そこで、藤助を淺野氏に還して、はりつけにさせた。是れより以前に、大納言秀俊が死んだ。秀俊も亦、心氣亂れて暴虐であつて、あるとき、蜻蛉澤を見物に往き、左右の者に、瀧壺の中に飛び込めよと命令したので、左右の者は、秀俊と一所に飛び込んで、溺死したのである。秀俊は、跡嗣が無かつたので、領地は取り上げられ、やがて、郡山をば增田長盛に與へ、秀俊の家來なる藤堂高虎を以て今治の城主となした。

當是時。明三使已入韓境。疑懼不敢進。請我撤兵。諸將不得已約戍于釜山。未肯濟海歸。李宗誠貴族子。日夜思歸。惟敬因欲逐而代之。慶長元年。正月。小西行長歸告和成。惟敬私從之。以地圖。兵書。蟒服。及燕代良馬三百匹。獻秀吉而去。怵宗誠曰。和敗矣。秀吉兵將來執我輩。四月。宗誠遁去。楊方亨問計於惟敬。惟敬曰。有兩語。汝愼記之。擧我大明奉承日本而已。明主遂以方亨爲正使。惟敬副之。多出金帛資惟敬。齎封册促往。因令韓發使。韓以和議未固。依違不從。獨使黃愼。朴弘長從之。刻日發。

【約戍于釜山】……處々に守備し居りたる兵を釜山に取りあつめる。【李宗誠貴族子】……明の初めの功臣李文忠の裔にして伯爵たり。【慶長】……後水尾帝の時の年號。【蟒服】……音バウフク。王侯の禮服にして、大蛇の形を畫く。蟒は大蛇なり。天子の服には龍を畫く。【燕代】……地名。今の直隸、山西近傍にして、良馬を產す。【怵】……おどす。【奉承日本】……日本の意を受けて、その言ふまゝにする。【封册】……音ホウサク。日本國王に封ずるとの册書。册は符命なり。

この時に當りて、明の三人の使者は、已に朝鮮の國境に入つたけれども、あちらこちらに我が日本の守備兵が居ると云ふことであつたので、疑ひ懼れて、敢て進まうとせず、我に、兵を退けて下さいと請うたので、諸大將は、已むを得ずして、處々に居つた守備兵を、釜山に一まとめにしたが、未だ海を渡つて我が國に歸ることをば承知しなかつた。李宗誠は、貴族の子であつて、日となく夜となく、國に歸りたいと思うて居つたので、惟敬は、因つて、之を逐ひ拂つて自分が代つて正使となりたいと思うた。慶長元年の正月に、小西行長は、歸つて、和睦の相談のまとまつたことを申し上げた。惟敬は、ひそかに行長に從つて來り、地圖、兵書、大蛇を畫きし服及び燕の地代の地より出でたる良馬三百匹を以て、秀吉に獻上して、立ち去つた。やがて、惟敬は宗誠をおどかして曰ふには、和睦の相談は敗れて仕舞つたので、秀吉の兵は、將に來つて我々を執へやうとして居ると曰つたので、四月に、方誠は遁れ去つた。楊方亨は、計略を惟敬に問うた。すると、惟敬が曰ふには、唯だ二つの語があるだけである。汝、よく〳〵氣を著けて、記憶して居れよ。其二つの語といふのは、我が大明國を擧げて、日本の言ふ通りに何なりとも命令を聞きましやうと云ふことであると曰つた。やがて、明主は、遂に方亨を以て正使となし、惟敬を其副使となし、金帛を澤山に出して惟敬に持たせ、又、日本國王に封ずると云ふ册書を持參して、催促して早く日本に往かしめることにし、因つて、朝鮮をして、使者を發せしめやうとした。けれども、朝鮮は、和睦の相談が未だ確定しては居らないので、あたらずさはらずの善い加減な事を言つて、從はず、たゞ、黃愼と朴弘長とをして之に從はしめた。かくて、是等の使者は、期日を定めて出發することにした。

五月。秀吉以秀賴朝見。詔叙秀賴從三位。任右近衞中將。六月。明韓使者濟海。我諸將乃留兵釜山而凱旋。行長嫉清正。清正惡於三成。而行長善之。與俱譖之。清正至伏見。秀吉不許見。乃就增田長盛請申救。長盛曰。子宜謝於治部。清正曰。吾死不能。乃歸第俟命。七月。京畿大風霾。地大

震。伏見城壞。壓死數百人。清正曰。吾寧犯罪。不可坐視。乃從卒二百。入省秀吉。秀吉與夫人席地而坐。目清正。呼其幼字曰。阿虎。若來何速。清正因前訴冤。畫地而語。陳其軍勞。秀吉顧謂夫人曰。彼肥皙丈夫。今至自朝鮮。何黧且悴也。乃命守其門。三成以下踵至。不得入。有傳命者。特納三成。清正大聲令其卒曰。使短小佞豎入。且曰。秀吉召見清正。推問海外戰狀。泣下曰。阿虎襁褓育於我。乃類我也。遂愛遇如故。時震仍不止。德川公夜率兵入衛。秀吉曰。不知皇宮何如。吾當與卿省焉。乃遽出。從者未屬。德川公以其兵擁之而行。道路昏黑。德川公從者有擊其袖者。公不敢顧。秀吉談笑而行。脫刀授之曰。吾老矣。覺刀之重矣。以煩卿也。公不敢執。乃授井伊直政。已而秀吉從兵踵至。遂入朝。還過方廣寺前。見大佛倒裂。罵曰。我爲若不憚勞費。將使若濟度衆生。今己身且不能保。何負我也。因呼弓射之。還。乃修伏見城。更作牙城于木幡山。

【申敕】……無實なることを言ひ述べて取りなす。【風雷】……雷は音マイ、土ふる。大風が吹いて沙塵を上より吹きおろす。【吾寧犯罪不可坐視】……出仕を留められて居るのに、出でたならば、罪を受けるかも知れぬが、この大變事を見すて、置くとは出來ぬとの意。【阿虎】……清正の幼名は虎之助と云ふ。【因前訴冤畫地而語】……呼ばれしに因つて側近く進み寄り、無實なることを訴へて、山川道路のありさまを地上にかきて、戰場の樣子を話す。【肥皙丈夫】……皙は音セキ。白き也。肉肥えて色白き男。【黧且悴】……黧は音レイ、黑きなり。悴は音スヰ、憔悴なり、痩する也、やつるゝ也。色黑く肉落ちてやつれる。【踵至】……踵は接なり。引きつゞいて來る。【傳命】……三成を通せよとの太閤の命を傳ふ。【短小佞豎】……短は矮なり、佞は巧諂捷給なり。丈の低き姦佞なる小わつぱ。三成を指す。【愛遇】……愛して待遇する。【擊其袖】……擊は曳く也。袖をひきて注意す。此昏黑なるに乘じて太閤を殺せよと諷する也。【不敢執】……嫌疑をさける也。【倒裂】……倒れて繼ぎ目などの裂け破れしなり。【若】……なんぢ。【濟度衆生】……濟は救なり、度は渡なり。一切の衆生を救ひ上げる。佛說には、欲界、色界、無色界を以て三界とし、之を苦界となす。此苦界の衆生を濟うて、常樂我淨の菩提の岸に渡すこと。【何負於我也】……我は衆生を濟度せんが爲めに、汝を建立せり。今自ら身を保つこと能はず。我が意にそむけりとの意。

【講義】五月に、秀吉は、秀頼を引き連れて、朝見した。すると、諸あつて、秀頼を從三位に叙し、右近衛中將に任ぜられた。六月に、明と朝鮮との使者が、海を渡つたので、我が諸大將は、そこで、兵を釜山に留めて置いて、凱旋した。行長は、清正をそねみねたんで居つたが、清正は三成と仲が惡く、そして行長は、三成と仲が善かつたので、行長と三成とは、一所になつて清正を讒言した。清正は伏見に來たけれども、秀吉は對面することを許さなかつた。そこで、清正は、增田長盛の處に往つて、取り成して下さいと請うた。すると、長盛が曰ふには、貴公は、治部(卽ち三成)に御詫びをするが宜しいと曰つた。清正が曰ふには、吾は、死んでも、左樣な事を致すことは出來ぬと曰ひ、そこで、屋敷に歸つて、秀吉よりの處分の命令を待つて居つた。七月に、京都畿内は大風が吹いて、砂塵が吹きおろされ、その上、大地震があつて、伏見の城は、こはれ崩れて、壓しつけられて死んだ者が、數百人あつた。すると、清正が曰ふには、吾は、いつそ、出仕をとゞめられて居るのを出掛けた爲めに罪を受くるとも、この大事變の際に、このまゝ、じつとして見て居ることは出來ぬと曰ひ、そこで、歩卒二百人を從へて、城に入つて秀吉を見舞つた。すると、秀吉は、夫人淺野氏とともに地べたに敷物をして其上に坐つて居つたが、清正を見ると、その幼少の時の名を呼んで曰ふには、虎之助、貴樣は大層早く來たじやないかと曰つた。清正は、そこで、進んで無實の罪なることを訴へ、山川道路の有樣を地上に書きながら物語つて、朝鮮の戰陣の間の勞苦を申し述べた。すると、秀吉は、ふりかへつて、夫人淺野氏に向つて曰ふには、あれほどに肥えて色の白かつた男が、今、朝鮮から歸つて見ると、大層色が黑く其上肉が痩せたではないかと曰ひ、そこで、清正に申し附けて、城門を守らせた。三成以下の者は、引きつゞいて到著したが、清正が堅く門を守つて居るので、入ることが出來なかつた。その內に、秀吉の命令を傳へる者があつて、特別を以て三成だけを入れよと曰つたので、清正は、大きい聲で、其部下の士卒に命令して曰ふには、丈の低い姦佞なる小わつぱを入れてやれと曰つた。明くる日に、秀吉は、清正を召し寄せて、對面して、海外に於ての戰爭の有樣を色々と問ひ、その話を聞くと、涙を落して曰ふには、虎之助は、幼少の時から、我に養育されたので、我に似て居るのであると曰ひ、それから、遂に清正を愛遇することもとの通りであつた。其時に、地震は、矢張り、止まなかつた。德川公は、夜、部下の兵士を引き連れて、伏見城に入つて護衛した。すると、秀吉が曰ふには、皇居の御樣子は如何であるか分らぬから、吾は、貴公と與に御見舞申上ぐべきであると曰ひ、そこで、あはてゝ、出でたが、從者が未だつゞいて來なかつたので、德川公は、自分の部下の兵を以て、秀吉を擁護して行つた。夜であつたので、その道筋が眞暗であつた。すると、德川公の從者に、德川公の袖を曳いて、この暗闇に乘じて秀吉を殺して仕舞へといはぬばかりにした者があつたけれども、德川公は、敢て顧みやうともしなかつた。秀吉は、笑ひながら談をしつゝ行き、腰にさして居つた刀を取り外して、德川公に渡して曰ふには、吾は年寄つて、刀が重いやうに思はれるから、御苦勞ながら之を持つてくれよと曰つたけれども、德川公は、之を取らうとしなかつたので、そこで、之を井伊直政に渡した。とかくする中に、秀吉の從兵が、引きつゞいて來り、かくて、遂に入朝して、御機嫌を伺ひ奉り、やがて、引き還して、方廣寺の前を通り過ぎて、大佛が倒れて繼目などが破れ裂けて居るのを見て、秀吉は罵つて曰ふには、我は、貴樣の爲めに、人夫と費用とを惜まずして、汝を建造して、まさに、汝をして一切衆生を救濟度脫させやうと思うたのであるのに、今や汝は、自分の身すら保つことが出來

ぬのである。どうして我に負くのであるかと曰ひ、そこで、弓を取り寄せて、之を射て還つた。そこで、伏見城を修復し、更に本丸を木幡山に作つた。

【參考】左に清正記の一條を抄錄して以て參考に資す。

清正記

主計頭清正は、太閤の御勘氣を蒙り、日本へ召さるゝをも悔なく、仕懸りし城普請等、夜を日につぎ成就之上、鍋島へ相渡し、歸朝、伏見に參著し、日比增田右衞門尉所へ直に參らる、折節長老を召し咄なかばなり、奏者谷市助罷り出づ、清正對面して、高麗より歸朝、其通申し入れられ候へとの事なれば、其段市助申せしかば、御通り候へとの事なれば、清正著座して申されけるは、我等只今高麗より直に貴殿へ參る事餘の義にあらず、御存じ候樣に治部少輔と中惡敷に依つて、色々樣々我等をさゝへ申すに付、太閤實と思召、切腹仕候へとの急使有るに依つて歸朝仕、治部めと我等中惡敷段、上にも內々御存之上、數年高麗陣中忠を盡し勳功にこそ預るべきに、讒言を實と思召、如レ斯之儀是非に及ばずと申、右衞門尉返答は、天下に隱なし、去りながら上への御斷之儀は、治部少輔と中を御直りなくば事濟むまじ、誰か今の世に於て治部めなどゝ申者、日本中にあるべしや、治部と中を御直り有るべきとの義ならば、明日にも我等治部へ申し相濟むべし、さなくば、御理の談合は成るまじと申さる、清正返事に、八幡も御照覽あれ、治部めと一世の中に中直り仕るまじ、其故は朝鮮國にて數ケ度の合戰に、手を合す人の影事のみ申廻り、讒言を構へ人をおとし候はんとのたくみ、汚き奴原に一度中直りして何にかせん、よし太閤之前直らず、此まゝ切腹仰付けらるゝとも、治部めと中直り仕るまじ、貴殿も聞えざる仕形なり、誠に朝鮮在陣中晝夜苦勞して、只今清正が參つたる上は、日比のよしみと云ひ、責めて玄關迄こそなくとも、次の間迄出でられ、久敷なつかしなどとは申さるべき事なるを、居ながらくび計りひねり廻して、挨拶は過分にもなし、所詮貴殿などの樣なる禮儀をも知らざる人と談じても、何かせん、向後申し返すまじと座敷を立ち歸らる、其時右衞門尉立ち送り、其義にてはなし、今すこし御咄し候へと申されけれども、聞きも入れず、歸宅、清正家來共、悔には、扨も物狂はしき人哉、加樣申す讒言は昔も今も有るぞかし、清正を三奉行、五奉行衆にくみ、中あしき內に、右衞門一人入魂なりしに、如レ此中ちがひ、扨々是非に及ばざる儀なり、定めて御斷するとも立つまじ、切腹有るべき哉と、いづれも悔候なり、慶長元年七月十二日之夜、大地震ゆる、二百年三百年にもかゝる例を聞き及ばず、日をこえてやまず、洛中、洛外、伏見、大阪は申すに及ばず、五畿內押し兼ねて地震、京中、其外在々所々に至る迄一宇も殘らず、倒れおしに打たれ、死ぬ者數を知らず、地震ゆると則ち、清正起ち揚り、二百人の足輕に手子を持たせ、侍共召連れ、伏見の御城へはせ行き、太閤御座候邊まで參らる、太閤も御居間を御出座有つて、大庭へ御出成され、御數物を數き、屏風にてかこひ、大提灯をともさせ成さる、御座所へ主計頭つと參られ候へば、太閤は、女の御裝束にて、政所樣、松の丸殿、高藏主、其外上臈衆の中に交り、御座成され候、然れども御聲せしかば、はや御出成されたると悅び、高藏主々々々と計申さる、誰ぞと答へ候時、加藤主計頭是れ迄參つたり、大地震夥敷候に、上樣を初めおしにうたれ御座成さるべきと存じ奉り、はねはづさんため二百人の足輕に手子を持たせ參り候、太閤樣、政所樣聞し召され、扨はやくも參つたる物かな、氣のきいたる者かなと太閤仰せらる、政所樣は主計頭を稔比に成さるにより、樣々の御挨拶なり、其時主計頭事申し上げらるゝは、高藏主能く聞召して上樣へ仰上げらるべし、主計事、此五六年朝鮮韓國へ遣され、數ケ度之合戰に大利を得、都への一番入仕り、王子御兄弟、官人等、悉く生捕、おらんかい迄押し詰め、猛威を振ひ、吉州表にて手を碎き、かせんほにてかくなみ十萬の大將麻貴を主計自身討ち取り、惣勢河へ追ひはめ悉く打ち取り、傳奏館にて手を碎き、晉州の城一番乘致し、安康へ働き、骨を碎きし忠義は少も思召されず、小西攝津守數ケ所の陣に於て、おくれ取り、表裏を申上げ、和平仕る段は聞召されず、治部めと中惡敷に付、種々讒言を仕候を誠と思召し、今又切腹すべしと高麗より召寄せられ候といへども、私誤なき上は、天道の加護之あるべしと歸朝仕、治部少輔め、さへ申すに付、腹を切らせられんとの義、只今共に三度なり、誤無きに依り今ながらへ申す、今度の次第なり、能く聞召し候はゞ、越度なき段は知れ申べしと、いかにも高聲に申しを、太閤も具に聞召候、主計事、此五六年以來、朝鮮國に炎天寒天をも厭はず、晝夜辛勞仕故、日に燒け色黑くやせ衰へたる姿を太閤御覽成され、むざんと思召しけん、御涙を流され候、其時主計、高藏主に申されしは、夜中そはつち成る體に候條、中門には我等者を付け置き申すべしと申さる、高藏主御前へ申上げらるといへども、未だ物をも仰せられず、御うなづき成されしにより、主計內加藤傳藏、同與左衞門、和田備中、大木土佐、小代下總、出田宮內を付け置き、主計に斷り申さぬ內には、誰も通し間敷と申すに付、其後治部少輔、其外奉行衆登城、中門にて留め申す時、治部なり苦敷もなし通し候へと申す、主計の者共、何、治部少輔などゝ云ふ者が、今迄遲々參りたる者かなと、通すまじと云ふ、治部申すしは、誰か天下に於て、治部少輔を知らぬ門番は何者ぞと云ふ、加藤主計と云ふ、其時治部申されしは、主計は御前へ御免か、主計の者返答に、御前御免成され間敷子細はいかゞと申すを、太閤聞召し、治部少輔通し候へと仰せられしにより、主計申すには、彼のせいのちいさきはんさん者か、通し候へと申さるゝに付、門を開く、治部少輔も內へ通られ候なり、其後何れも諸大名登城に付、廣庭もせばく成る、之に依つて太閤樣、政所樣、松丸殿をはじめ、各石垣之後、築地の犬ばしりへ提灯を御上げ成さる、其時太閤御庭には、いまだ御前をも御許しなきものが御前を取り持ち候間、石垣より上には無用と仰せらるといへども、主計それにもかまはず、勘氣の下に立ち居られ候、其時迄も何とも御詞もかけ給はず、然共何と思召しけん、提灯をとぼしあげ、主計を細々と御覽成され、御落涙、政所樣、松丸殿より、上臈衆を遣され、御前は大形事濟ぞかし、細々御落涙成され候間、少も氣遣仕間敷と仰せらる、又內々治部少輔を何共思はず、主計に心よせの衆は、主計科なくて治部少にさゝへられ難儀仕候を、不便に存ぜられ、此樣子を見、主計きはへられ、心安く存ぜられ候、主計誤無き段は顯れ、かく御念頃に候上は、日本は神國なり、扨々目出度き事なりと詞を放つて、喜を申さるゝ衆多し、漸く夜も明方に及び候に付、何れも下城すべしと、仰せらるゝに付、主計も退出す、（下略）

八月。明韓使者共至界浦。一一十九日。造伏見。秀吉使柳川調信責韓使者曰。吾收兵。而汝國未獻三道。今又不使王子來謝。再造之恩。乃遣微者辱我。我不許汝入見。二使因行長謝。弗聽。九月。二日。使毛利氏列兵仗。延明使者入城。諸將帥皆坐。頃之。秀吉開幄而出。侍衞呼叱。二使慴伏。莫敢仰視。捧金印冕服。膝行而進。行長助之。畢禮。三日。饗使者。既罷。秀吉戴冕。被袾衣。使德川公以下七人各被其章服。召僧承兌讀冊書。行長私囑

レ之曰。册文。與惟敬所說。或有齟齬者。子且諱之。承兌不敢聽。乃入讀册于秀吉之傍。至曰封爾爲日本國王。秀吉變色。立脫冕服拋之地。取册書扯裂之。罵曰。吾掌握日本。欲王則王。何待毒虜之封哉。且吾而爲王。如天朝何。乃召行長。誚讓曰。汝敢欺罔我。以爲我邦之辱。吾將併汝與明使者皆誅殺之。行長股栗。謝罪於三奉行。出書牘數通爲證。承兌亦救解之。事纔得止。而秀吉怒未釋。卽夜。命加藤清正。大谷吉隆。石田三成。增田長盛。逐明韓使者。賜資糧遣歸。使謂之曰。若亟去。告而君。我將再遣兵屠而國也。遂下令西南四道。發兵十四萬人。以明年二月。悉會故行臺。柳川調信私囑黃愼曰。太閤意已決矣。速獻三道。使王子來謝。不則貴國復被禍矣。惟敬猶疑其虛喝。已而見沿道治兵狀。則大驚奔去。秀吉初養夫人姪秀秋爲子。出嗣小早川氏。於是。以爲大將。以浮田秀家。毛利秀元副之。以黑田孝高充其參謀。以清正。行長充其先鋒。使行長立功自償。諸將皆前役所遣。已諳海外事宜。以故秀吉不復親出。自居伏見。遙授方略。置吏于那古耶。以司諸道糧運。

字解【造】……いたる。【三道】……慶尙道、全羅道、忠淸道。【再造之恩】……再生の恩といふが如し。一たび捕へられし者が還され恩德。【徵者】……身分いやしき者。【頃之】……しばらくありて。【幄】……音アク。とばり、幕。【侍衞呼吐】……近侍の衞士が、しつ〳〵といつて制止の聲をかける。【慴伏】……音セフフク。慴は懼なり。恐れ入つて平伏す。【捧】……兩手にて持つ。【金印】……黃金にて鑄たる日本國王の印。【冕服】……冠と裝束。冕は音ベン。冠の名。黃帝初めて冕を作る、前に垂旒あり、邪視せざるを示す、旁に紘纊あり、讒を聽かざるを示す。【膝行】……膝を屈めて地をすりて行く也。【緋衣】……音ヒイ。緋は衣の長き貌。長き衣。【其章服】……章服とは禮服なり。其とは明より獻納したるものを指すなるべし。太閤記に、諸大名へ冠服五十餘具を獻呈せりとあり。【承兌】……相國寺の僧。【齟齬】……音ソゴ、もと齒の相値はざるを云ふ、〳〵ひちがふ、矛盾する。【諱之】……之をいむ、讀まずに置く也。【封爾爲日本國王】……平壤錄に云はく、封秀吉爲日本國王、誥命略曰、聖神廣運、天覆地載、莫不尊親云云、龜紐龍章、遠賜扶桑之域、榮施鎭國之山、嗣以海水之揚、偶致風占之隔、當茲盛際、宜襲爵彝章、咨爾平秀吉、崛起海邦、知尊中國、西馳一介之使、欣慕同來、北叩萬里之關、懇求內附、情旣堅於恭順云云、封爾爲日本國王云云、爾其念臣之職當修云云、欽哉、萬曆廿三年正月廿一日。【扯裂】……音ゼンリョ。毛唐人と云ふが如し、賤める辭。明主を指す。【欺罔】……音キマウ。あざむきたぶかる、だまかす。【股栗】……音コリツ。ふるへる也。【謝罪】……罪を三奉行にぬりつける。謝は音ヰ。【書牘】……音ショドク。手紙。【亟】……速に。【而君】……而も亦汝なり。【故行臺】……もとの行臺、卽ち那古耶の行臺なり。【囑】……言ひ含める。【秀秋】……金吾中納言。【方略】……方は法術なり、略は策略なり。手立、手段、方法。【糧運】……兵糧の運送。

記事　八月に、明と朝鮮との使者は、ともに、堺浦に到著し、二十九日に、伏見に來た。秀吉は、柳川調信をして朝鮮の使者を譴責せしめて曰ふには、吾は、すでに兵を收めて仕舞つたのに、しかるに、汝が國は、未だ約束の三道を差し出さないし、今は、又、王子をして我が國に來つて再生の恩德を謝せしめることを致さずして、汝等の如き身分の賤しき者を派遣して、我を侮辱いたしたのである。されば、我は、汝が入つて對面することを許さないと曰つた。朝鮮の二人の使者は、行長にたよつて、詫び入つたけれども、秀吉は、聞き入れなかつた。九月の二日に、秀吉は、毛利氏をして武器を持てる兵士を並列して、道を警護し、明國の使者を延いて、伏見城に入らしめた。諸大將は、皆、列坐し、しばらくすると、秀吉は、とばりを開いて、出て來ると、近侍の護衞兵が、しつ〳〵と制止の聲をかけたので、明の二人の使者は、恐れ入つて平伏し、敢て仰ぎ見やうとせず、日本國王と刻したる黃金の印と冠裝束を兩手に捧げ持つて、膝ずりして進んだ。行長が、二人の使者に手傳つて禮を終つた。その翌日卽ち三日には、使者を御馳走し、それが濟んで仕舞ふと、秀吉は、明國から貰つた冠と長い衣服とを著、德川公以下七人の者をして、各々、其禮服を著させ、相國寺の僧承兌を召し寄せて、明から持たせて來た封册の書を讀ましめた。すると、行長は、內々で、承兌に言ひ含めて曰ふには、封册の文面は、惟敬の言ふところと、事によつたらば、〳〵ひちがつて居るところがあるかも知れませぬ。左樣な處をば、貴公、まあ〳〵、讀まずに置いて下さいと曰つた。けれども、承兌は、敢て之を聞き入れやうとせず、そこで、入つて、秀吉の傍らに於て、封册の書面を讀み上げた。かくて、「爾を封じて日本國王となす」と曰ふ處に至ると、秀吉は、怒つて顏色を變へ、立ちどころに冠と衣とを脫ぎ棄て、之を地にたゝきつけ、封册の書面を取り、之を引きさいて、大聲に罵つて曰ふには、吾はすでに日本全國を掌に握つて居ることとなれば、王とならんと思はゞ、王となるのである。毛唐人から封じてもらふには及ばぬことである。其上に、吾が若し王となつたならば、天朝をどうするぞと曰ひ、そこで、行長を召し寄せて、譴責して曰ふには、汝は、無禮にも我を欺きごまかして、我が國に恥辱を與へたので、吾は、將に汝と明の使者とを一所にして皆之を誅殺して仕舞はうと思ふと曰つたので、行長は、大に懼れ、ぶる〳〵と震ひ上つて、この罪を

三人の奉行になすりつけ、數通の手紙を出して、證據となした。承兌も亦、之を取り成しなだめたので、その事は、やつと、收まつた。然れども、秀吉の怒は、未だ釋けずして、其夜に、加藤清正、大谷吉隆、石田三成、增田長盛に申し附けて、明と朝鮮との使者を逐ひ拂ひ、路用の金と食物とを與へて、國に歸らせ、之に謂はしめて曰ふには、汝は、速に立ち去つて、汝が主君に、我は將に再び軍勢を派遣して汝が國を屠り殺さうとして居ると告げよと曰ひ、それから、遂に、命令を西南方面の四道（卽ち山陰、山陽、南海、西海の四道）に下し、十四萬人の兵を繰り出し、來年の二月を以て、殘らず、もとの行營に會合せしめることにした。柳川調信は、內々にて、黃愼に言ひ含めて曰ふには、太閤殿下の御心は已に決定したのであるから、汝の國は、速に三道を獻上し、王子をして來つて謝せしめるやうにせよ。左樣で無くば、貴國は、ふたゝび、禍を被ることになりうと曰つた。惟敬は、それでもまだ、秀吉の言葉は唯だからおどかしであると疑つて居つたが、とかくする中に、通過する道筋に於て兵を準備する樣子を見て、そこで、大に驚いて、逃げ去つた。秀吉は、はじめ、夫人の淺野氏の甥なる秀秋を養子とし、出でゝ小早川氏を嗣がせたが、こゝに於て、この秀秋を總大將となし、浮田秀家、毛利秀元を副大將とし、黑田孝高を以つて其參謀にあて、清正と行長とを以つて、其先鋒となし、行長をして、手柄を立てゝ自ら其罪を償はせることにした。諸大將は、皆、前の戰役に派遣した人達であるから、已に善く海外の事情を諳んじ知つて居つたので、それ故に、秀吉は、もはや自身には出掛けることをなさず、自身は伏見城に居つて、遙に方法手段を指圖し、役人を那古耶に置いて、諸道の兵糧運送の事をつかさどらしめた。

二年。正月。明使者至レ明。佯報。秀吉受レ封拜舞。和議全成。因私貫海外珍寶。號爲日本幣物。已而吳越將吏上レ變。告曰。秀吉先鋒加藤清正。已擁二百艘上機張矣。明主因詰方亨。得レ實。乃誚惟敬。惟敬慚謝。因曰。秀吉責レ韓而已矣。不レ久將レ去。明不レ信。乃戒東北守備。復大募レ兵。遣邢玠。楊鎬。麻貴。楊元。劉綎。董一元等。率而東下。諸將皆以智勇聞其國者也。

【拜舞】……拜謝して喜んで小をどりする。【貫】……おきのる、賜なり、價の錢を借りて買ふ、かけにて買ふ也。【海外】……明より云ふ。【幣物】……贈り物、さゝげ物。

慶長二年の正月に、明國の使者は明國に到著して、伴つて報告するには、秀吉は、日本國王に封ぜられると、拜謝して小をどりして喜び、和睦の相談は、全く調ひましたと伴りて報告し、因つて、私に、外國の珍しい品物を買ひ取つて、日本よりの贈り物で御座ると云つて、獻上したとかゝする中に、吳越の大將役人が變事を上申し、報告して曰ふには、秀吉の先鋒、加藤清正は、已に二百艘の舟を引き連れて、機張に上陸いたしましたと曰つた。明主は、そこで、方亨を詰問して、本當の事實が分つたので、そこで、惟敬を譴責した。惟敬は、恥ぢ入つて御詫をして、そこで曰ふには、秀吉は、朝鮮を譴責いたすだけで御座ります。久しからずして、立ち去つて仕舞ひましやうと曰つた。けれども、明主は、惟敬の言を信ぜずして、そこで、東北方面の防守の備を警戒し、ふたゝび、大に兵士を募集し、邢玠、楊鎬、麻貴、楊元、劉綎、董一元等を派遣して、これ等の兵士を引き連れて、東の方朝鮮に向つて下らせた。これ等の諸將は、いづれも皆、智略と勇氣とを以て明國に於て名高い人達であつた。

我兩先鋒已濟レ海。幷其戍兵。行長軍釜山。清正自機張攻梁山。陷之。軍于西生浦。韓人懲創前役。逃竄駭散。清正榜諭之曰。太閤命吏。責問朝鮮王。屯兵東邊。以俟其報。汝民各安其居。勿敢擾亂。二月。孝高奉秀秋至釜山。因山海之勢。列壘寨。聯舟艦。以爲望風潰奔。時韓地荒廢。無糧可因。我海運亦未達。諸將以故不輒進。聲言朝鮮獻三道。如約。乃止不復深入。

【西生浦】……慶尙道に在り。【懲創】……創も亦懲なり。こりる。【榜】……音バウ。標榜、かけふだ。

我が二人の先鋒（卽ち清正、行長）は、已に海を濟り、朝鮮に在留したる守備兵を併せて、行長は、釜山に陣取り、清正は、機張より梁山を攻めて之を攻め落し、西生浦に陣取つた。朝鮮人は、前の戰役に懲りたので、逃げかくれ驚き散じた。そこで、清正は、札を立てゝ朝鮮人を諭して曰ふには、太閤殿下は、役人に申し附けて、朝鮮國王を責め問はうとせられ、兵を東方の邊境に駐屯して、以て國王よりの返事を待つて居るのである。汝等人民は、各々、自分の住居に安堵して居つて、敢て騷ぎ亂れてはならぬぞと曰つた。三月に、孝高は、秀秋を守り立てゝ、釜山に到著し、山や海の形勢に因つて、とりでを築き列ね、舟をならべて置き、以て根據の地となし、命令を出して、亂暴をなし人民の物を掠奪することを禁じた。そこで、朝鮮の諸道は、その威風の盛んなるを望み見て、崩れつひえて逃げ走つた。この時に、朝鮮の土地は、荒れすたれて居つて、取つて用ふべき糧食が無く、我が海上の運送も、亦未だ到著しなかつたので、我が諸大將は、それ故に、たやすく進まずして、言ひふらすには、朝鮮が若し約束の通りに三道を我に差し出すならば、そこで、我は、止まつて、もはや深く攻め入ることをば致さぬと言ひふらした。

韓王使李元翼守鳥嶺。而自奔海州。告急於明。明君臣歸罪於石星。奪其官。且議曰。割地之議。出於惟敬之託言。忠淸。韓之府。全羅。慶尙。韓之門

戶。皆其重地。而明之海路亦恃爲藩屏焉。今予之秀吉。秀吉以爲取韓犯明之資。彼之舟帆晨發夕至。天津。登萊。非明之有也。因宥惟敬。使往更爲說以弭和兵。清正。行長使人返告韓不獻地。秀吉報曰。當俟韓穀熟。進入全羅。以攻諸城。必攻破而後已。且戒行長等曰。前使我不得志者。全羅水軍也。此行必報之。

字解【託言】……音タクゲン。かこつけごと。【府藏】……財貨の聚まる處。【藩屏】……音ハンペイ。藩は蔽ふ也、屏も亦蔽ふ也。まがき、かこひ。【明】……やめる。【全羅水軍】……李舜臣の率ゐたる兵。【報之】……仇を報ゆる也。

講義 朝鮮王は、李元翼をして鳥嶺を守らしめて置いて、そして、自身は、海州に逃げ奔り、危急なる事を明に告げた。すると、明の君臣は、其罪を石星に歸して、其官職を取り上げ、其上に相談して曰ふには、朝鮮の土地を割さて日本に與へると云ふ話は、惟敬が方便としてのかこつけ言に出でたものであるが、忠清道は、朝鮮の財物の聚まる繁榮なる處であるし、全羅道、慶尙道は、朝鮮の入口であるし、いづれも皆、朝鮮の重要なる土地であつて、そして又、明の海上の通路も亦、之を藩屏とも恃んで居るのである。然るに、今、之を秀吉に與へるときは、秀吉は、これを以て、朝鮮を取り明國を犯すの根據地とし、彼れ秀吉の舟は、晨に朝鮮を出帆し夕に明國に到著するであらう。さうなるときは、天津、登萊は明國の所有で無くなつて、直に日本の所有となつて仕舞ふであらうと曰ひ、因つて、惟敬をゆるして、出かけて行つて、更に、朝鮮の爲めに我が日本軍に說いてそして日本の兵を罷めさせることにしやうとした。清正と行長とは、人をして、引き返して、朝鮮が土地を獻上しないことを報告せしめた。すると、秀吉は、返事をして曰ふには、秋になつて朝鮮の米穀の熟するのを待つて、進んで全羅道に入り、そして諸城を攻め立てることに致せよ。是非とも、之を破つて仕舞はなければならぬぞと曰ひ、其上に、行長等を戒めて曰ふには、前の戰役に於て、我が軍をして思ふやうにならしめなかつたものは、全羅道の水軍である。此度の出征に於ては、是非とも之に報いよと曰つた。

惟敬在南原。明主數責其効。韓人亦指目之曰。是左右賣國反覆之臣也。罔明欺和。而使韓受其弊。惟敬大窘。又聞石星已下獄則恐。因度以爲行長主和。清正主戰。不若先退。清正。因遺書清正曰。三國講和。將歸無爲。而足下勸太閤敗之。明主命邢總督。以精銳七十萬。將首擊足下。足下速請和弭兵。不然。禍不旋踵。清正答書曰。吾每病朝鮮兵羸弱不足與較。今當明軍作一快戰。吾所願已。惟敬得書。不知所爲。乃因行長。欲投歸於我。行長許之。邢玠在遼東。聞之曰。彼入日本。必爲我腹心害者。乃令楊元伏三千人。要其走路。捕之。尋被誅。而我與明遂絕。

字解【南原】……全羅道に在り。【左右賣國】……國を賣物にして、あちらに行つては善い加減な事を言ひ、こちらに來ては善い加減な事を言ひ、その間に於て自分の利慾をはかること。【罔】……罔は誣なり。欺は妄なり、譏なり。あざむきだます。【窘】……くるしむ、窮迫なり、きはまりせまる。【不旋踵】……くびすをめぐらす間も無く、速なるを云ふ。【腹心害】……深く內部に入つて害を爲すを云ふ。【羸弱】……音ルヰジヤク。疲れて弱き也。【不足與較】……相手とするに足らぬ。

講義 惟敬は、南原に居つたが、明主は、たび〳〵、惟敬に、早く善き效果を擧げよと云つて、催促し、朝鮮人も亦、惟敬を指ざしながめて曰ふには、これは、あちらに行つては、こちらの國を賣つて、自分の利慾を貪るところの、反覆極りなき、あてにならぬ奴である。彼れは、明をごまかし、日本を欺き、そして、朝鮮をして其弊害を受けしめたのであると曰つたので、惟敬は、大に閉口困却し、又、石星が已に牢に入れられたと云ふことを聞いて、大に恐れ、そこで、いろ〳〵と考へるには、行長は和睦することを主とし、清正は戰ふことを主として居るから、先づ第一に清正を退けるが一番宜しいと思うて、因つて、清正に手紙を送つて曰ふには、日本、明、朝鮮の三國は、和睦の相談をして、將に無事泰平に成らうとして居つたのに、然るに、貴殿は、太閤に勸めて、和睦の相談を打ちこはして仕舞つた。そこで、明主は、總督邢玠に命令して、精銳なる兵七十萬人を引き連れて、將に第一番に貴殿を擊たうとして居る。されば、貴殿は、速に和睦することを請うて、兵をやめるが善い。若し左樣しないならば、早速禍が來るであらうぞと曰つた。すると、清正は、之に返事して曰ふには、吾は、朝鮮の兵が餘りに弱々しくして戰爭の相手とするに足らぬことを、いつでも物足らず思うて居るのである。今、明の軍勢に當つて、一つの愉快なる戰爭をなすことは、吾が願ふところであると曰つた。すると、惟敬は、清正よりの返事を受け取つて、途方に暮れて、如何して善いか分らなくなつて、そこで、行長にたよつて、我が日本國に逃げ込まうと思うた。行長は之を許した。邢玠は、遼東に居つて、此事を聞いて曰ふには、彼れ惟敬が、若し日本に往つたならば、屹度、我が明國の事情を漏らすことなどあつて、腹心の害をなす者であると曰ひ、そこで、楊元をして、三千人の兵を伏せ置きて、惟敬が逃げ走る路に待ち受けて、之を捕へしめ、その後間も無く、惟敬は誅せられた。そして、我が日本と明國とは、とう〳〵、交渉斷絕となつた。

明軍已至全羅。楊元在南原。陳愚衷在全州。韓將元鈞在閑山。唐嶋。水陸

相援。以守全羅。七月。我水軍諸將議攻唐嶋。藤堂高虎。脇坂安治先發。韓以數百艘逆擊。高虎。安治親揮槍力戰。加藤嘉明後至。遇敵一大艦。艦上列卒。張弓持滿擬之。嘉明拔刀躍入其艦。敵不敢發。嘉明立斬數人。遂奪其艦。諸將因奮擊。大破之。元鈞收兵守閑山。而明將楊鎬。麻貴等繼至。韓令鈞進擣釜山。初鈞與李舜臣並將水軍。行長間使人告韓曰。清正首敗媾。吾深嫉之。今孤軍先濟。宜襲執之。韓王乃命鈞。舜臣。舜臣不肯。鈞劾其逗留。王召舜臣。下之獄。鈞於是獨將。及受此命。不得不自進。乃合水路諸軍。赴釜山。行長聞之。八月。伏兵于加德。以舟兵逆擊于絶影嶋。會日暮風濤大起。我軍佯退。鈞縱兵冒濤而進。比至加德。飢渴下舟取飲。伏兵起。行長返之。夾擊大破鈞軍。鈞逃至巨濟。行長復夜襲之。遂斬鈞。乘勝西向。連陷南海。順天。自豆恥津上陸。而清正兵自西生浦。歷慶州。入全羅。諸城望其旗曰。鬼上官至矣。不戰而潰。清正進與行長合。攻黃石城。陷之。守將郭趨。趙宗道等皆死。

字解【南原】……【全州】……竝に全羅道に在り。【閑山】……慶尙道に在り。【持滿】……持は執なり、滿は盈なり。一ぱいに弓を引きつめたるを云ふ。【擬】……音ギ。ねらふ也。【擣】……つく。【劾】……音ガイ。彈劾する。罪惡を上奏する。【逗留】……滯留して進まざる也。【絶影島】……慶尙道に在り。釜山浦の南に在り。【行長返之】……返は一に還に作る。【巨濟】……慶尙道に在り。【南海】……全羅道に在り。順天の東南海中に在る島なり。【順天】……全羅道に在り。【豆恥津】……全羅道に在り。【西生浦】……【慶州】……【黃石城】……竝に慶尙道に在り。

講義　明の軍勢は、すでに、全羅道に到著し、楊元は南原に居り、陳愚衷は全州に居り、朝鮮の大將元鈞は、閑山、唐島に居つて、水軍と陸軍と、互に援け合つて、全羅道を守つて居つた。七月に、我が日本の水軍の諸將は、相談して、唐島を攻めることにした。藤堂高虎と脇坂安治とは先づ出發した。すると、朝鮮の水軍は、數百艘を以て、迎へ擊つた。高虎と安治とは、自身に槍をふりまはして、力を盡して戰つた。加藤嘉明は、後れて至つたが、敵の一つの大なる船に出遇つた。その敵船の上には、兵卒を並列し、弓を一ぱいに引きしぼつて、ねらつて居つた。すると、嘉明は、刀を拔いて、其敵船に飛び込んだ。けれども、敵は、敢て弓を放たなかつた。嘉明は、立ちどころに數人の敵兵を斬り殺し、それから、遂に其船を奪ひ取つた。我が諸大將は、因つて奮ひ擊つて、大に之を破つた。そこで、元鈞は、兵を取りまとめて、閑山を守つた。そして、明の將楊鎬、麻貴などが引きつゞいて到著した。朝鮮王は、そこで、鈞をして進んで釜山なる我が根據地を衝かしめることにした。はじめ、鈞は、李舜臣と共に相並んで水軍の大將であつたが、行長は、ひそかに人をして朝鮮に告げしめて曰ふには、清正が、第一番に、和睦の相談を打ちこはしたので、吾は、深く清正を惡んで居る。しかるに、今、清正は、孤立して續く勢も無い軍勢を以て、先づ海を渡つて朝鮮に入つたから、不意擊をして清正を生捕るが宜しいと曰つたので、朝鮮王は、そこで、鈞と舜臣とに清正を不意擊することを命じたけれども、舜臣は承知しなかつたので、鈞は、舜臣が國王の命令を受けながら滯留して進まないことを申し立て、王は舜臣を召し寄せて、獄に入れたので、鈞は、こゝに於て、獨り水軍の大將となつたのである。鈞は、こゝに、釜山を衝けよとの命令を受くるに及んで、是非とも、自身に進まなければならなかつたので、そこで、水路の諸軍を合はせて、釜山に出かけて往くことにした。行長は、此事を聞いて、八月に、兵を加德島に伏せ置き、舟の兵を以て、鈞の軍を絶影島に迎へ擊つた。折しも、日が暮れて大風が吹いて大濤が起つたので、我が日本軍は、佯つて退却した。すると、鈞は、兵を縱つて、波を冒して進んで來たが、加德まで來ると、空腹になり喉がかはいたので、舟から上陸して、水を飲んだ。すると、我が伏兵が起つた。行長は、そこで、引き返して、夾み擊ちにして、大に鈞の軍を破つた。鈞は逃げて巨濟に至つた。行長は、ふたゝび、夜、之を不意擊して、とう〳〵鈞を斬り、勝つた勢に乘じて、西に向つて進み、つゞけさまに、南海、順天を攻め落し、豆恥津より上陸した。そして、清正の軍勢は、西生浦より、慶州を通つて、全羅道に入つた。すると、諸の城は、清正の旗を望み見て曰ふには、鬼上官が來たぞと曰ひ、一戰にも及ばずして、崩れ亂れて逃げ去つた。清正は、進んで、行長と一處になつて、黃石城を攻めて、之を攻め落した。黃石城の守將郭趨、趙宗道等は、いづれも皆、討死した。

我軍乃二道並進。清正從雲峯。浮田秀家繼之。行長從密陽。毛利秀元繼之。兵各五萬。會於南原。韓元帥權慄軍雲峯。望清正軍。棄守而逃。我諸將使島津義弘。加藤嘉明絶全州援路。而合軍入南原。投書楊元約戰期。元高壘深塹。悉衆捍禦。諸將疾攻兩晝夜。已而退兵。窺城兵倦且息。則復

進。伏卒一面。而三面塡塹。踏藉而登。元在帳中。裸跣走。其所率遼東突騎數千。爭門馳出。伏兵要之。奮刀斫馬足。適月明。明騎莫得脫者。韓將李福男等皆死。我軍進向全州。州民素苦陳愚衷徵求。及聞南原陷。皆遁走。明兵阻之。多爲韓人所傷。愚衷遂棄城走。會麻貴遣牛伯英等援南原。不及。與愚衷合兵。軍于公州。我諸將因糧於全州。終議入國都。

字解【二道】……下句に云ふ雲峰、密陽の二道。【雲峰】……全羅道に在り。【密陽】……慶尙道に在り。【全州援路】……全州に在る陳愚衷が南原を援くべき路。【踏藉】……音タフセキ。ふみこえる【裸跣】……音ラセン。裸は赤體なり、跣は徒足にて地を履むなり。はだかですあしを云ふ。【突騎】……音トツキ。敵に突き入る騎兵隊の名。【徵求】……徵は召す也。兵を徵し賦を求むること。【明兵】……陳愚衷の軍。【阻】……音ソ。遮りとゞめる。【公州】……忠淸道に在り。

事略　我が日本軍は、そこで、二道より進むことにし、卽ち、淸正は、雲峰より進み、浮田秀家が之に繼ぎ、行長は、密陽より進み、毛利秀元が之に繼ぎ、兵は、各々五萬づゝで、やがて、兩軍が、南原に於て會合することにした。朝鮮の總大將權慄は雲峰に陣取つて居つたが、淸正の軍勢を望み見て、守備を棄て、逃げ去つた。我が諸大將は、島津義弘、加藤嘉明をして、全州より南原を援くべき路を絕ち切らしめ、そして、軍を合はせて、南原に入り、手紙を楊元に送つて、戰爭の期日を約束した。元は、壘を高く築き、堀を深くし、軍勢を殘らず繰り出して、防禦した。我が諸大將は、二日二夜の間手きびしく攻め立て、とかくする中に、兵を退却させたが、城兵の疲勞し且つ休息して居るのを窺つて、ふたゝび進み、兵卒を一方に伏せて置き、そして、三方から、堀を埋めて、踏み越えて、城に攀ぢ登つた。元は、帳中に居つたが、裸で跣で逃げ走つた。元の引き連れたる遼東の突騎數千人は、門を爭うて馳せて逃げ出したが、我が伏兵が之を待ち受けて居つて、刀を奮つて馬の足を斫ぎ倒した。其時に丁度、月が明るかつたので、明の騎士は、脫れることが出來た者は無く、朝鮮の大將李福男等は、皆、討死した。そこで、我が日本軍は、進んで全州に向つた、全州の民は、もとより、陳愚衷の兵士及び兵糧の徵發に閉口して居つたが、南原が落城したと云ふことを聞くと、皆、遁れ走らうとした。すると、明の兵士が、逃げ走らうとする人民を遮り留めやうとしたので、兵士は、多くは朝鮮人の爲めに手傷を負はせられ、それから、愚衷も、とう〳〵、城を棄て逃げ走つた。折しも、麻貴は、牛伯英等を派遣して、南原を援けさせたけれども、間に合はなかつたので、愚衷と兵を合はせて、公州に陣取つた。我が諸大將は、全州に在る糧食を取つて用ひることが出來たので、そこで、とう〳〵、國都に討ち入ることを評議した。

韓王聞水陸軍皆敗。謂鳥嶺之守無益也。使李元翼引兵徑出忠淸。以沮我軍鋒。復起李舜臣。統三道水軍。舜臣至錦島。與我將菅正陰遇于碧波亭下。以大礮乘潮來攻。正陰敗死。舜臣因與明水軍將陳璘。軍古今島。以扼我水軍。而我陸軍一隊。以秀元爲將。黑田長政爲先鋒。進迫國都。九月。軍于全義館。擊明將解生于稷山。明將楊登山。牛伯英。來衝我陣。長政將後藤基次。栗山利安。揮槍拒之。殺傷相當。登山。伯英退與生合。濟川斷橋。我兵絕流而渡。擊走之。明軍復大至。長政將母里友信。原種良等力戰。秀元亦至。擊卻明軍。

字解【起】……李舜臣、時に獄中に在りしを、引き出して再び任用せしなり、故に起と云ふ。【三道】……慶尙、全羅、忠淸。【古今島】……全羅道の南海中に在り。【全義館】……【稷山】……並に忠淸道に在り。

事略　朝鮮王は、水軍、陸軍がいづれも皆敗北したと云ふことを聞き、鳥嶺の防守は何の役にも立たぬと思うたので、李元翼をして兵を引き連れて、たゞちに忠淸道に出で、以て我が軍の先鋒を遮りとゞめしめることにし、ふたゝび、獄中なる李舜臣を任用して、三道の水軍を統轄させた。舜臣は、錦島に至り、我が日本の大將菅正陰と、碧波亭の下に出遇つて、大砲を打ち出して、潮の流るゝ勢に乘じて來り攻めた。正陰は敗北して、討死した。舜臣は、そこで、明の水軍の大將陳璘とともに、古今島に陣取つて、我が水軍を喰ひ止めやうとした。そして、我が陸軍の一隊は、秀元を以つて大將となし、黑田長政を先鋒となし、進んで國都に攻め寄せやうとして、九月に、全義館に陣取り、明の大將解生を稷山に擊つた。明の大將楊登山、牛伯英が、來つて、我が陣營を衝いたが、長政の部下の大將後藤基次、栗山利安が、槍を揮つて之を拒ぎ、戰死者負傷者は、敵も味方もほゞ同じ位であつた。やがて、登山、伯英は、退却して、生と一處になり、川をわたりて、橋を絕ち切つて仕舞つた。すると、我が兵は、流れを橫切つて渡り、擊つて之を敗走させた。その中に、明の軍がふたゝび大に至つたが、長政の部下の大將母里友信、原種良などが、力を盡して戰ひ、さうする中に、秀元も亦、至り、擊つて明軍を退却させた。

於是。明軍在國都者不敢出。我軍亦持重不進。天漸寒。十月。淸正退守蔚山。行長退守順天。諸將連營。與釜山相爲聲援。明乃遣李如梅來取谷

城。遂攻毛利秀包于星州。不能取。秀包亦以兵少退守求禮。十一月。邢玠入韓。聚議都城。以爲和兵持重。若待秀吉親濟者。其志不在小。宜及今擊之。會明諸道募兵皆至。乃分爲三。李如梅將左軍。高策將中軍。李芳春。解生將右軍。明三十三將與韓七將。分屬三軍。以楊鎬。麻貴統之。糧餉火器皆極豐備。期以十一月進攻焉。我諸將聞之。益修城壘。清正巡視西生諸寨。而留裨將加藤清兵衛。與毛利氏援卒。俱修蔚山。

字解【谷城】……全羅道に在り。【星州】……慶尙道に在り。【求禮】……全羅道に在り。

講義　こゝに於て、明軍の國都に居る者は、我が日本軍を恐れて、敢て出でやうとせず、我が軍も亦、重々しくて構へて進まず、自然に休戰の狀態であつた。かゝて、氣候がだん〳〵に寒くなつたので、十月に、清正は、退却して蔚山を守り、行長は退却して順天を守り、諸大將は、陣營を連ね、釜山と、相互に聲援をなして居つた。明は、そこで、李如梅を遣はして、來つて谷城を取り、それから、遂に毛利秀包を星州に攻めたけれども、取ることが出來なかつた。秀包も亦、部下の兵が少いので、退却して、求禮を守つて居つた。十一月に、邢玠は朝鮮に入り、都城に集會して評議して、日本兵が重々しく構へて進まないのは、秀吉が自身に海を濟つて朝鮮に來るのを待つて居るやうである。して見ると、其志は、小さい事では無いのである。されば、今のうちに之を擊つが宜しいのであると云つたが、折しも、明の諸道に於て、募集せられたる、兵が皆到著したので、そこで、分つて三軍となし、李如梅が左軍の大將となり、高策が中軍の大軍となり、李芳春、解生が右軍の大軍となり、明の三十三人の大將と、朝鮮の七人の大將とは、分れて、この左軍、中軍、右軍の三軍に附き從ふことにし、楊鎬、麻貴を以て、之を統轄させ、兵糧や鐵砲などは、いづれも、この上も無いほど、澤山に用意をなし、十二月を期日として進み攻めることを決定した。我が日本の諸大將は、此事を聞き及んで、まず〳〵、城やとりでを修復した。清正は、西生の處々のとりでを巡回して視察し、そして、副將加藤清兵衛を留め置きて、毛利氏より加勢に來たる步卒とともに、蔚山を修復させた。

明諸將議曰。秀吉諸將清正最勇悍。先克清正。則餘從風解。乃聲向順天。以牽行長。而諸軍會慶州。留高策于彥陽。以絕釜山援路。而李如梅。解生等。皆萃于蔚山。蔚山土木未竣。其役卒駭明軍至。入告清兵衛。清兵衛出戰。陷伏大敗。入城嬰守。淺野左京大夫。率毛利氏將太田政信。宍戸元繼等。將往蔚山監役。行至彥陽。與高策夾嶺而舍。未相知也。比曉。我斥兵上嶺。爲明先鋒所獲。我軍乃覺。政信。元繼說曰。衆寡懸絕。不若疾走入蔚山也。大夫曰。幸長提兵至此。未覩明人之旗而逃。何面目復見太閤哉。公等欲走。卽走。吾當死於此矣。乃遣其將太田。岡野。龜田。森島四人。率銃隊進。逆擊明先鋒卻之。大夫在高阜。望見策軍踰嶺也。恐其戰沒。使人召還之。不肯。奮擊斃數百人。而死之。獨龜田脫歸。獻所獲甲首。且曰。明兵之衆。望之無際。請君速退。大夫怒曰。吾豈聞衆而退哉。自揚徽號麾衆而進。將士覩之。爭赴明軍。大夫身被十餘創。猶進不已。龜田力諫。使二從士囘其轡。而以刀鞘鞭馬。馬奔蔚山。策兵追躡。岡田某。福永某。返戰而死。清兵衛望見。出城迎入。元繼爲明軍所隔。自間路入島山。島山。蔚山別堡也。

字解【聲向順天以牽行長】……聲は宣なり、言ひふらす。牽は牽制なり、ひきおさへる。順天に向ふのであると言ひふらして行長をひきとめ

る。行長は、時に順天に在り。【彦陽】……慶尙道に在り。【萃】……あつまる。【土木未竣】……竣は事畢る也。工事が未だ出來上らぬ。【嬰守】……音エイシュ。嬰は繞る也。籠城すること。【斥兵】……音セキヘイ。物見の兵。【太田】……源左衞門。田は一に駄に作る。【岡野】……彌右衞門。【龜田】……大隅。【森島】……新吾。【甲首】……甲を被りたる者の首。大將分の首を云ふ。【刀鞘】……音タウセウ。刀室、刀のさや。【岡田某】……喜太郎信成。【福永某】……喜助。【間路】……間道、裏道。【別堡】……堡は音ハウ。小城なり、出丸を云ふ。

講義　明の諸大將は、相談して曰ふには、秀吉の諸大將の中で、清正が、一番勇悍であるから、我が明軍が若し清正に勝ちおほせたならば、其他の者は、風に從つて守備を解いて逃げ去るであらう。先づ清正を擊つが一番宜しいと曰ひ、そこで、順天に向つて進むのであると言ひふらして、以て行長を牽きとめて置き、そして、諸軍は慶州に於て會合し、高策を彦陽に留めて、以て釜山より加勢に來るべき路を絶ち切り、そして、李如梅、解生等は、皆、蔚山に集まつた。しかるに、蔚山に於ては、城普請の工事が未だ出來上らなかつたが、その人夫等は、明の軍勢が押し寄せて來たのに駭いて、入つて此事を清兵衞に告げた。すると、清兵衞は、城を出でゝ戰ひ、敵の伏兵の中に陷つて、大に敗北し、城に入つて籠城した。淺野左京大夫幸長は、毛利氏の大將太田政信、宍戸元繼などを引き連れて、將に蔚山に出かけて行きて工事を監督しやうとして、行つて彦陽に至り、高策と、峠を夾んで止宿したが、未だ敵も味方も相互に此事をば知らなかつたのである。夜明け頃に、我が日本の物見の兵が、峠に上ると、明の先鋒に生け捕られたので、我が日本軍は、そこで、はじめて、敵が近〳〵に在ることを覺つた。すると、政信、元繼は、幸長に說き勸めて曰ふには、敵兵は衆く味方は寡くて、大層にかけ離れて相違して居るから、疾〳〵走つて蔚山に入るが一番宜しう御座ると曰つた。幸長が曰ふには、われ幸長は、兵士を引き連れて、此處まで來て、まだ明の人の旗をも見ないうちに逃げ走つたならば、ふたゝび太閤殿下に御目に懸るべき面目も無いことである。貴殿等、若し逃げ走らうと思はれるならば、直に逃げ走ることになされよ。吾は、此處に於て討死すべきであると曰ひ、そこで、其部下の大將、太田、岡野、龜田、森島の四人を派遣し、鐵砲隊を引き連れて、明軍の先鋒を迎へ擊つて、之を退却させた。すると、幸長は、高い岡の上に居つて、高策の軍が峠を越えたるを望み見て、我が四人の者共が討死せんことを恐れたので、人をして之を召し還さしめたけれども、四人の者共は、承知せずして、奮ひ擊つて、數百人の敵を斃して、そこで討死した。たゝ龜田だけが、のがれ歸つて、討ち取つたる甲首を獻上し、其上に曰ふには、明の兵の數の多いことは、之を望むに、はてしの知れないほどで御座ります。されば、何卒、あなたは、速に退却なされよと曰つた。すると、幸長は怒つて曰ふには、吾は、どうして、敵の多勢なることを聞いて、退却することを致さうぞと曰ひ、自身に、旗じるしを揚げて、部下の者共を指麾して進んだ。我が將士は、之を見て、皆、先を爭うて、明軍に向つて進んだ。幸長は、其身に十餘箇所の手傷を負うたけれども、それでもまだ進んで已まなかつた。龜田は、是非ともと諫めて、從士二人をして、幸長の馬の手綱を囘さしめ、そして、刀の鞘を以て馬を鞭うつたので、馬は蔚山の方へ向つて走り、そこで、はじめて、幸長は退却することになつた。すると、策の兵が、あとを追つかけて來たが、岡田某と福永某とが、引き返して戰つて討死した。清兵衞は、幸長の來るを望み見て、城を出でゝ迎へ入れた。元繼は、明の軍勢に隔てられて、蔚山に入ることが出來ずして、裏道から島山に入つた。島山は、蔚山の出丸である。

時楊鎬。李如梅等。已破蔚山外郭。大夫代清正率厲將士。嬰壁守之。明兵以大夫爲清正也。欲必獲之。攻擊甚急。大夫自放銃。無不命中。時開門突戰。殺傷過當。二城之間有川。李芳春。解生泛兵艦以絕之。城兵銃破其五艘。溺數千人。而敵勢不衰。麻貴。茅國器鼓衆攀壁。前者墜後者登。晝夜不歇。城兵欲告急於清正。清正時在機張。相去三日程。敵衆充塞道路。大夫曰。誰可往者。近臣木村某奮請往。大夫壯之。予以善馬。已出門。明兵麕集。木村一騎馳突萬衆中。一日一夜達機張。見清正告急。清正大驚。投袂而起。左右或止之曰。蔚山以孤城當大敵之衝。而我寡兵援之。終不能保。不若棄之也。清正曰。彈正囑我曰。緩急幸援我兒。今餒之敵。何以立天下。乃率見兵五百人。人負糧食。登舟赴援。與明候船戰江中。走之。清正自蒙銀兜鍪。杖薙刀。立船首。指麾士卒。明韓諸軍指目。莫敢近者。遂入蔚山。鎬貴謂將士曰。清正定入城矣。猶檻虎而刺之也。明日。合諸軍蟻附而上。清正令士卒。投大石巨材。擊卻之。卽夜。與數百騎襲明軍。大獲而還。敵更起飛樓。以火筒佛郎機百道並攻。城壘震裂。清正與大夫堅守不屈。鎬貴知其不可力取。乃下令休戰。合圍十晝夜。斷我汲道。城兵飢渴。皆嚙紙。煎壁土。刺馬飲其血。馬盡。乃飲溺。夜出城外。搜明人尸。取其

所レ佩糗糧牛炙食レ之。天大雪。士卒瘇瘃。有ニ墜レ指者。而清正意氣自若。益修ニ守具。用ニ銃及紙礮。日斃ニ明兵數百千人。鎬貴夜設レ伏。而曉焚レ營。退走數里。以誘ニ城兵。城兵欲レ追。清正不レ許曰。彼擧レ火以退。退不レ設レ殿。不レ以レ夜而以レ曉。是將レ誘ニ我而殲レ之也。久レ之。明伏稍稍出。終復圍レ之。浮田氏卒有ニ亡在ニ明軍ニ者。呼語ニ城上人ニ曰。楊經理願ニ媾和ニ。欲レ與ニ加藤公ニ面議之。期ニ城外百步ニ相見。清正欲レ往。大夫曰。敵情不レ可レ測。公受ニ太閤命ニ。爲ニ一方重寄ニ。勿ニ輕出貽ニ笑外國ニ。雖レ然。不レ出示ニ之怯ニ也。度彼未レ識ニ公面ニ。僕請爲レ公代行。衆遂兩止レ之。故紓ニ會期ニ。以俟ニ我援兵至ニ。

【字解】【牽厲】……音ソツレイ。ひきゐはげます。【嬰壁】……壁にかゝる。城壁に立てこもる。【三城】……蔚山、島山。【不歇】……やまず、休息せぬ。【木村某】……賴母【鑿集】……鑿は音クン、麋と通ず、群る也。寄り集まる。【投袂】……そでを振り拂ふ。【彈正】……淺野幸長の父長政。彈正少弼たり。【餧】……音ヰ。飼なり、棄て殺しにする。【候船】……物見の船。【銀兜鍪】……音ギントバウ。銀を以て製したるとつぱい、かぶと。【檻虎而刺】……虎を檻（オリ）の中に入れ置きて刺し殺すこと。【佛狼機】……佛狼は卽ち今の佛蘭西なり。こゝにては西洋にて製したる大砲の如く群がり來つて附著する。【飛樓】……高樓、櫓（ヤグラ）。【蟻附】……蟻の義。【煎】……煮出す。【溺】……音ネウ。小便。【糗糧】……音キウリヤウ。糗は糒、ほしいひ。【牛炙】……音ギウシヤ。燒きたる牛の肉。【瘇瘃】……【楊經理】……楊鎬をさす。【重寄】……寄は寄託なり。重任を受けたる也。【紓會期】……紓は、ゆるくす、ゆるぶ。會合の期日を延ばす也。

【講義】その時に、楊鎬、李如梅等は、すでに、蔚山の外郭を破つた。幸長は、清正に代つて、將士を率ゐはげまし、城壁に立て籠つて、之を守つて居つた。明の兵は、幸長を清正と思うたので　是非とも之を討ち取らうと思うて、はなはだ手きびしく攻擊した。幸長は、自身に、鐵砲を放ち、中らないことは無く、時々門を開いて出で、突き進んで戰つたが、敵の死傷者が、味方よりも餘程多かつた。蔚山と島山との二つの城の間に川があるが、李芳春、解生は、此川に兵船を浮べて、二城の交通を絶ち切つた。すると、城兵は、鐵砲を以て、敵の兵船五艘を破り、數千人を水に溺らした。けれども、敵の勢は衰へず、麻貴、茅國器などが、攻め大鼓を鳴らして部下の軍勢をはげまし、城壁を攀ぢ登らうとし、前の者が落つれば、後の者が引きつゞいて登つて、晝夜休息することも無いほどであつた。そこで、蔚山の城兵は、危急なることを清正に告げやうと思うたが、清正は、その時に、機張に居つて、相去ること三日の行程であつて、其上に、敵の軍勢が、其道路に充ち塞がつて居つた。そこで、幸長が曰ふには、誰か出かけて行くことの出來る者は無いかと曰つた。すると、近侍の臣木村某が、奮つて、出かけて往きたいと請うたので、幸長は、之を勇壯なりとし、之に善い馬を與へ、やがて、木村がすでに城門を出でると、明の兵が木村を目がけて群がり集まつたが、木村は、たゞ一騎で、敵の大勢の中を馳せて突き進んで、一日一夜にして、とうくゝ、機張に到著し、清正に面謁して、蔚山の危急なることを告げた。清正は、之を聞いて、大に驚いて、袖をふりはらつて起ち上つた。すると、左右の者共は、或は之を止めて曰ふには、蔚山は、たゞ一つの孤立したる城を以て、大敵の衝き進んで來るべき要路に當つて居るので御座ります。然るに、我が少數の兵を以て之を援けましたとても、とても、仕舞には、持ちこたへることは出來ますまい。之を捨てゝ置く方が宜しう御座ります。と曰つたものがあつた。清正が曰ふには、淺野彈正が、我に賴んで、何事か危急なる場合には、どうぞ我が兒幸長を援けて下されと曰つた。しかるに、今、之を敵に捨て殺しにしたならば、實に信義を失ひ依託に背くの甚しきもので、どうして、天下に立たれやうぞと曰ひ、そこで、現在あり合はせの兵五百人を引き連れて、銘々に、糧食を負ひ、舟に乘つて、蔚山に出かけて行つて援けることにし、明の斥候船と、川の中に於て戰つて、敗走させた。清正は、自ら、銀にてしながめて、敢て近づく者は無かつた。かくて、清正は、遂に、無事に蔚山に入つた。すると、楊鎬と麻貴とは、部下の將士に向つて曰ふには、清正は必定、城の中に入つたであらうが、ちやうど、虎をおりの中に入れて置いて刺し殺すやうなもので、もう、しめた者であると曰ひ、明くる日に、諸軍を合はせて、蟻の如く群がり附著して城に攀ぢ上らうとした。清正は、士卒に命令して、大なる石や大なる材木を投げつけて、之を擊退した。其夜に、清正は、數百騎の兵とともに、明の軍を不意擊して、大に獲物をして還つた。敵は、更に、高い櫓を築き上げ、火筒や西洋の大砲などを以て、多くの方面から相並んで攻め立て、城壁は、その爲めに震ひ烈けたが、けれども、清正は、幸長とともに堅く守つて屈服しなかつた。楊鎬、麻貴は、とても力づくでは攻め落すことが出來ぬことを知つたので、そこで、命令を下して、戰鬪を休み、取り卷いて圍んで居ること十晝夜に及び、我が日本軍の水を汲む道を絶ち切つた。そこで、蔚山城中の我が兵は、糧食が缺乏して空腹になり、飲料が缺乏して、喉がかはき、皆、紙を嚙んだり、壁土を煮出したりし、又、馬を刺し殺して其血を飲み、馬が無くなつたので、小便を飲み、夜は、城外に出でゝ、明の兵の屍骸をさがし、その腰につけて居る乾飯、燒いた牛の肉などを取つて來て、之を食べるといふ有樣であつたが、折しも、大雪が降つたので、士卒は、あかぎれ、霜やけに苦み、その爲めに指が腐つて落ちた者さへも有つた。けれども、清正は、その元氣は少しも變らず、ますく、防守の道具を整頓し、鐵砲及びはりぬきの大砲などを用ひて、日々、明の兵數百千人を斃した。楊鎬、麻貴は、夜、伏兵を設けて、夜明け頃に、陣營を燒き拂つて、退き走ること數里であつて、それで、城兵をおびき寄せやうとした。蔚山の我が兵は、之を追つかけやうとした。けれども、清正は許さずして曰ふには、彼は、火を擧げて退軍し、退却するのにしんがりを設け置かず、又、夜を以て退軍せずして明け方を以て退軍するのは、これは、我をおびき寄せて皆殺しにしやうと云ふ計略であると曰つた。やがて、しばらくすると、明の伏兵は、清正の兵が其計略に陷らなかつたので、ぼつくと出で來つて、終に、再び城を圍んだ。浮田氏の歩卒で、逃げ去つて明の軍勢の中に居る者があつたが、此者が、呼んで城上の人に語つて曰ふには、楊經理殿は、和睦をいたしたいと願つて居られて、加藤殿と面會して相談しやうと思うて居られるから、城の外百歩の處に於て面會いたしたいものと御座ると曰つた。清正は、出かけて行かうと思うた。すると、幸長が曰ふには、敵の心持は、測られませぬ。うつかり、敵の言葉に乘ることは出來ませぬ。貴殿は、太閤殿下の御命令を受けて、一方面の重任に當つて居られますること故、輕々しく城を出でゝ、萬一の事があつて、笑を外國にのこすやうな事をなさつてはならぬ。けれども、城を出でな

いのは、敵に、臆病を示すやうな者で御座ります。思ふに、敵は、未だ貴殿の御顔を知らぬで御座りましやうから、私が何卒、貴殿の代りに出かけたいと思ひますと曰つた。けれども、多くの人々は、とうく、兩方とも、之を止め、そこで、わざと、會合の期日を延ばして、我が援兵の到著するのを待つて居つた。

黑田孝高在梁山。使使告釜山曰。蔚山急矣。卽陷。諸城隨之。不可不赴援。諸將然之。豐臣秀秋。毛利秀元。黑田長政。加藤嘉明。森忠政。蜂須賀家政。藤堂高虎。其子高良。脇坂安治等。將騎卒五萬。自彥陽。昌原。分道赴援。而行長自海上會之。三年。正月。秀秋等至彥陽。擊破高策。與昌原軍皆赴蔚山。行長益裝空艦。蔽海而至。楊鎬聞我軍自三面至。挺身先遁。麻貴。解生等乘夜解圍。長政使後藤基次晨出候軍。得一馬鞍于水涯。返報曰。是日本制。我兵已有騎渡者。不可後矣。長政卽馳躡明軍。藤堂高良等揮槍繼之。清正與大夫。乃開門合擊。敵衆崩駭。獨其將吳惟忠。茅國器。殿而巳戰。吉川廣家。奮擊走之。明軍大走。遺棄糧仗蔽野。

【字解】【梁山】……慶尙道に在り。【彥陽】……【昌原】　竝に慶尙道に在り。【裝空艦】……裝は飾る也。空船を裝ひかざりて、兵士の其中に在るが如く見せかける也。【馬鞍】……音バアイ。馬のくつ。鞍は鞋と同じ、音アイ、又はカイ。【日本制】……日本風、日本の作り方。

【講義】黑田孝高は、梁山に居つたが、使をして釜山の本營に告げしめて曰ふには、蔚山は危急である。もし蔚山が攻め落されるときは、處々の城も、之に隨つて、どし〳〵落城することになるであらう。是非とも、出掛けて行つて援けなければならぬと曰つたので、諸大將は、此言葉を成程尤であると思うた。そこで、豐臣秀秋、毛利秀元　黑田長政　加藤嘉明、森忠政、蜂須賀家政、藤堂高虎、その子高良、脇坂安治などが、騎兵、步卒五萬人を引き連れて、彥陽と昌原とから、別々の道を取つて、出かけて行つて　蔚山を援けることにし、そして　行長は、海上より之に會合することにした。慶長三年の正月に、秀秋等は、彥陽に至り、高策を擊ち破り、昌原より進むべき軍とともに、いづれも皆、蔚山に出かけて行つた。行長は、ます〳〵、空船を裝ひ飾つて兵士が乘つて居るやうに見せかけて、海一ぱいになつて、至つた。楊鎬は、我が日本軍が三方面（卽ち彥陽、昌原及び海上）よりやつて來たと云ふことを聞いたので、身を拔き出で、先づ遁れ去り、麻貴、解生などは、夜に乘じて蔚山の圍を解いた。長政は、後藤基次をして、早朝に出で、敵軍の樣子を物見させたが、基次は、川の岸に於て、一つの馬の沓を拾つて、引き返して、長政に報告して曰ふには、この馬の沓は、日本風の者で御座ります。されば、我が日本兵は、すでに、馬に乘つて此川を渡つた者があるで御座りましやう。後れてはなりませぬと曰つた。長政は、卽座に、馳せて明軍を追つかけ、藤堂高虎等が、槍を揮つて之につゞいて進んだ。清正は、幸長とともに、そこで、城門を開いて、一處になつて擊つた。敵の軍勢は、崩れ駭いて逃げ走つた。たゞ、敵の大將吳惟忠、茅國器が、しんがりとなつて、引き返して戰つた。すると、吉川廣家が、奮ひ擊つて、之を敗走させた。かくて、明の軍勢は、とうく、大に逃げ走つて、棄て、置いた兵糧や武器が、野原に一ぱいになるほどであつた。

諸將之救蔚山也。明候我空虛。一軍襲梁山。爲黑田孝高擊卻之。一軍襲釜山。浮田秀家使立花宗茂邀于般丹。燒而走之。明主得蔚山敗聞。與其下議曰。是役也。謀之經年。傾海內力。加以全韓之兵。期於必克。今乃如此。罪當歸經理。乃罷楊鎬。以萬世德代之。與鄧子龍。張芳監。芳威等。率楚兵。往助邢玠。秀吉得蔚山捷聞。賜手書於清正。賞之。爲餽糧食。

【字解】【般丹】……慶尙道に在り。【經年】……年を越す、あしかけ二年なること。【期於必克】……必ず勝利を得るに相違ないと、心に待ち設けて居る。【經理】……元帥、總督と云ふが如し。【餽】……遣なり、おくる。

【講義】我が日本の諸大將が蔚山を救うたときに、明は、我が軍の空虛にして兵士の少きを窺ひ、一軍は梁山を不意擊したが、黑田孝高に之を擊ちしりぞけられ、一軍は釜山を不意擊したが、浮田秀家が、立花宗茂をして、般丹に迎へ擊たしめ、燒き擊ちして、之を敗走させた。明主は、蔚山に於て明の兵が見苦しく大敗北したと云ふ報告を得て、其臣下と評議して曰ふには、元來、是の戰役は、あしかけ二年にもなる長い間の計畫であつて、我が明の國內の力を傾け盡し、其上に、朝鮮全體の兵を附け加へて居つたのである。然るに、今や、この樣な事になつたのである。此罪をば、經理に歸すべきものであると曰ひ、そこで、楊鎬を免職し、萬世德を以て之に代らせ、鄧子龍、張芳監、芳威等と與に、楚の兵を引き連れて、出かけて行つて、邢玠を助けさせることにした。秀吉は、蔚山に於て我が軍が大勝利を得たとの報告を得て、自筆の感狀を清正に賜はつて、之を賞し、又、清正の爲めに、兵糧を送つてやつた。

三月。秀吉携秀賴及夫人以下。遊醍醐。命前田玄以掌供帳。務使豐盛。勿

有遺憾。四月。遣使諭諸將。留秀秋。行長。清正。及島津義弘。黑田長政。左京大夫等十餘將。其餘盡罷歸。其留者。分爲四屯。秀秋守釜山。而蔚山在其右。清正守之。順天在其左。行長守之。泗川在其前。義弘守之。四城兵凡十萬。明兵亦可十萬。世德與邢玠議。令李如梅當義弘。劉綎當行長。麻貴當清正。陳璘以水軍出其後。已而召如梅。以董一元代之。相持未戰。是月。秀賴進從二位。爲權中納言。五月。秀吉有疾。六月。外師罷者至。乃召見慰勞。論其賞罰。

【讌酬】……京都の東に在り。【左京大夫】……淺野幸長。【泗川】……慶尙道に在り。【外師】……外征の軍勢。

三月に、秀吉は、秀賴及び夫人淺野氏以下の者を召し連れて、讌酬に遊んだが、前田玄以に申し付けて、支度萬端の事をつかさどらしめ、出來るだけ、豐備全盛にして、物足らぬ事の無いやうにさせた。四月に、秀吉は、使者を派遣して、諸大將に諭し、秀秋、行長、清正、及び島津義弘、黑田長政、淺野幸長等の十餘人の大將だけを朝鮮に留め置きて、其他の諸大將は、すべて、罷めて歸らせることにした。朝鮮に留まつて居る諸大將は、分つて四箇所の屯營となし、秀秋は、釜山を守り、そして、蔚山が其右に在つて、清正が之れを守り、順天が其左に在つて、行長が之を守り、泗川が其前に在つて、義弘が之を守り、この四城の兵はおよそ十萬人であつた。明の兵も亦十萬人ばかりであつて、世德は邢玠と相談して、李如梅をして義弘に當らしめ、劉綎をして行長に當らしめ、麻貴をして清正に當らしめ、陳璘をして水軍を以てその後に出でしめたが、とかくする中に、如梅を召し還して、董一元を以て之に代らせることにした。かくて、我が日本の軍と明の軍とは、對陣して、睨み合つて、未だ戰はなかつた。この月に、秀賴は、從二位に進み、權中納言となつた。五月に、秀吉は、病氣になつた。六月に、海外征伐に出掛けて居つた軍勢の中で、罷め歸つた者が、到著したので、そこで、秀吉は、之を召して對面し、之を慰勞し、その賞罰を評定した。

七月。秀吉病篤。召德川公諭之曰。外國未服。而吾罹此疾。吾死則難作。非卿莫以定之。吾今日以天下託卿。卿爲我努力。秀賴幼弱。亦煩卿保護。至其成長。當立與不當立。一在卿之心。德川公歔欷曰。殿下百歲之後。孰不奉嗣君者。雖然。人心不測。殿下宜運其神算。以建萬世之安。家康不才。不敢當重任。曰。吾熟思之。莫若卿者。卿勿避也。德川公固辭而退。秀吉遂召石田三成。增田長盛。告之。二人諫曰。殿下百戰取天下。而一日予之他人。是胡爲也。今天下猛將謀臣。無不被殿下恩者。其於輔嗣君何有。於是。定大老。奉行。奉行五人如故所置。德川公。及前田利家。毛利輝元。浮田秀家。上杉景勝。爲五大老。以中村一氏。生駒親正。堀尾吉晴。爲三中老。小事決於奉行。大事決於大老。大老。奉行或有不協。則中老居間和解之。使片桐且元。小出秀正傳秀賴。密囑二人曰。吾起人奴。至爲關白。孰非國恩哉。吾與明構兵。禍結弗解。吾深悔之。彼聞吾死。或大舉來報。國朝自古未曾受外國侵辱。及我時受焉。吾深耻之。是吾所以託國於家康。至我家存亡。未暇恤也。雖然。家康。必不負我。汝輩謹保護秀賴。莫使生釁隙焉。又使木村重成。薄田兼相。渡部尙副二人。分親兵爲七隊。以速水守久。伊東長次。靑木一重。眞野宗信。中島氏種。野野村吉安。堀田正高

爲隊長。馬標旌旗盡傳之秀賴。使母衣騎郡良列。卒將津川左近掌之。

【字解】【獻欵】……音キヨキ。悲泣して氣咽んで押息する也。むせびなく。【神算】……なみ〳〵の人の及ぶことの出來ぬ計畫。【奉行五人】……石田三成、淺野長政、前田玄以、增田長盛、長束正家、上卷に見ゆ。【母衣騎】……軍令を傳ふる勇猛なる騎士。二二〇頁を看よ。【卒將】……足輕大將。物頭。

【講義】七月に、秀吉は、病氣が危篤となつたので、德川公を召し寄せて之に諭して曰ふには、外國が未だ服從しないのに、吾は此病にかゝつたので、殘念ではあるが、致し方は無い。吾が死んで仕舞ふときは、騷亂が起るであらうが、貴公なければ、この騷亂を平定するものは無いのである。されば、吾は、今日、天下を以つて貴公に任せるから、貴公は、我が爲めに骨折つてくれよ。秀賴は、幼少であるが、これも亦、御苦勞でも、貴公の保護を賴むのである。秀賴が成長するに及んで、立つべきと立つべからざるとは、一切、貴公の心次第で、どうなりとも致してくれよと曰つた。德川公は、しゃくり上げて泣いて曰ふには、殿下が御かくれに成りました後、誰が御跡嗣の君(卽ち秀賴)を奉じない者がありましやうぞ。けれども、人の心は測り知ることの出來ぬもので御座りますから、殿下は、凡人の及ぶことの出來ぬ計畫を運らして、萬世の後まで安泰なる基礎を御建てになつて置くが、宜しう御座ります。私は、材能の無いもので、とても此重大なる任務に當ることは致し兼ねますと曰つた。すると、秀吉が曰ふには、吾は、此事をつく〳〵と考へて見るに、貴公よりも勝れたる者は無いのである。貴公は、辭退されるなと曰つた。德川公は、固く辭退して退出した。秀吉は、それから、遂に石田三成と增田長盛とを召し出して、この事を告げた。すると、この二人は諫めて曰ふには、殿下は、百戰して、天下を御取りになつたので御座ります。しかるに、一日にして、之を他人に御與へなされるのは、これは、どうしたもので御座りますか。今、天下の勇猛なる大將、智謀ある臣下は、殿下の御恩を蒙らない者は御座りませぬ。是等の者共が、御跡嗣の君を御輔佐申し上げることは、言ふまでも無いことで御座りますと曰つた。こゝに於て、秀吉は、大老、奉行を定めた。奉行は五人あつて、其人は、從前置いた通りであつた。德川公、及び前田利家、毛利輝元、浮田秀家、上杉景勝を五大老となし、中村一氏、生駒親正、堀尾吉晴を三中老となし、小さい事は、奉行が之を決定し、重大なる事は、大老が之を決定し、大老と奉行とが、或は意見の合はぬことがあるときは、中老が、中へ這入つて之を仲裁することにした。又、片桐且元と小出秀正とをして秀賴の守役たらしめ、ひそかに、且元、秀正の二人に言ひ含めて曰ふには、吾は、下部より立身して、關白となるに至つたのであるが、これは皆、國恩でないものは無いのである。吾は、明と戰爭して、禍が結んで解けないので、吾は、今日に至つて、深く之を後悔いたして居る。彼れ明は、吾が死んだといふ事を聞かば、或は大軍を以て押し寄せて來て、返報をするかも知れぬのである。我が國は、古より、未だ曾て外國から侵し辱しめられたことは無いのである。しかるに、若し我が時代に及んで、外國から侵し辱しめられることもあるときは、吾は深くこれを恥づるのである。これが、吾が、此國を家康に委託いたす譯であつて、我が豐臣家の存亡などの事に至つては、未だ氣に掛ける暇も無いのである。けれども家康は、必ず我に負かないであらうから、汝等は、謹んで秀賴を保護して、家康と仲を惡くさせるやうな事があつてはならぬぞと曰ひ、又、木村重成、薄田兼相、渡部尙の三人をして、且元、秀正の二人に副たらしめることにし、又、親兵を分けて七隊となし、速水守久、伊東長次、青木一重、眞野宗信、中島氏種、野野村吉安、堀田正高の七人を以てその七隊の長となし、馬じるし旗さし物は、殘らず、之を秀賴に讓り渡すことにし、母衣騎の郡良列と物頭の津川左近をして之をつかさどらしめた。

八月。盡會大老奉行以下爲誓。誓曰。虛心協謀。務輔嗣子。勿樹私黨。勿忘公義。勿變更。勿漏泄。勿不告而結婚。勿不告而交質。嗣子六歲未能親政。前田保之於大坂。而德川視事於伏見。封邑行罰。皆俟嗣子之長。命淺野彈正。石田三成曰。汝赴朝鮮收我兵。不能收。則遣家康。家康有不可往。則遣利家。二人遣一。雖有百萬敵。不能尾也。十三日。疾大篤。將瞑。已而張目曰。勿使我十萬兵爲海外鬼。言畢而薨。年六十三。羣臣祕喪。使前田玄以密葬之子阿彌陀峯。九月。三日。德川公與諸侯。盟無貳於嗣君。遂使淺野。石田以遺命赴肥前。密召在韓諸將。

【字解】【勿樹私黨】……勝手にわたくしの徒黨を組んではならぬ。【勿變更】……舊章を變へること勿れ。【漏泄】……機密を漏らす。【交質】……人質を取りかはす。【保】……養なり、もり立てる。【瞑】……音メイ、目を閉づる也、目をつぶつて息を引き取る。【海外鬼】……外國にて討死すること。【阿彌陀峯】……京都の東に在り。

【講義】八月に、秀吉は、殘らず、大老、奉行以下の者を集會して、誓をなさしめたが、その誓の言葉に曰ふには、心を虛うして、私の邪念をさしはさまず、相談して事に當り、務めて若君を輔佐せよ。自分勝手に一味徒黨を組んではならぬ。公なる義理を忘れてはならぬ。何事も從來の慣例を變更してはならぬ。機密をもらしてはならぬ。屆け出でずして緣組を致してはならぬ。若君は六歲にして、未だ自身に政事を執ることが出來ないから、前田は、大坂に於て、若君をもり立て、そして人質を取りかはしてはならぬ。取ることにし、領地を與へたり罰を行ふことは、皆、若君の成長の後のことに致さうと曰つた。秀吉は、淺野彈正(卽ち長政)と石田三成とに申し附けて曰ふには、汝は、朝鮮に出掛けて行つて、我が日本の兵を引きあげよ。もし之を引きあげることが出來ないならば、家康を遣はせよ。家康、利家の二人の中にて一人を遣はすならば、百萬人の敵兵があつても、我が軍の後を追ひ擊つことは出來ないのであると曰つた。十三日に、疾が大に危篤になり、將に眼をつぶつて息を引き取らうとしたが、其中に、目を見張つて曰ふには、我が日本の十萬の兵士をして、外國に於て討死させては成らぬぞと曰ひ、かく言ひ畢つて薨去した。年は六十三歲であつた。羣臣は、秀吉の死んだことを祕密にして、前田玄以をして、ひそかに之を阿彌陀峰に葬らしめた。九月三日に、德川公は、諸侯とともに、若君秀賴に對して二心の無いことを誓ひ、それから、遂に、淺野、石田の二人をして、遺言の命令に從つて、肥前の那古邪に赴き、ひそかに、朝鮮に在留して居る諸大將を召し還さしめることにした。

諸將之與明軍相持也。明兵益至。邢玠。萬世德促諸軍進攻。劉綎患順天帶山海不可近。則思沈惟敬所爲。欲誘而取之。遣間使來告行長曰。先鋒嚮與我國盟矣。因清正註惑關白。復致有今日。今兩國兵老。吾欲親與先鋒會。以成前盟也。行長不信。瞰綎單騎候於道。則信之。將出赴會。而我兵降在綎部者。爲泄其謀。行長驚還。綎恚而來攻。行長擊卻之。

字解【間使】……祕密の使。【註惑】……音カイワク。註は欺なり。あざむきまどはす。【關白】……秀吉を云ふ。【老】……つかる。【泄其謀】……誘ひ出して討ち取らんとの謀を內通す。

講義 我が諸大將が、明の軍勢と、相對して陣取つて睨み合つて居る內に、明の兵は、ます〳〵到著しに。邢玠、萬世德は、諸軍を催促して、進み攻めさせた。劉綎は、行長の立て籠つて居る順天は山と海とを帶びて、なか〳〵近寄ることが出來ないことを、厄介に思うて、そこで、沈惟敬の爲した事を思うて、おびき寄せて之を取らうとし、祕密の使を遣はし、來つて行長に告げしめて曰ふには、先鋒(卽ち行長を指す)は、さきに、我國と盟つて、和睦を成されたが、清正が關白を欺きまどはしたので、ふたゝび、今日の樣な事に立ち至りました。今や、日本の兵も明國の兵も、いづれも皆、疲勞しました。そこで、吾は、自身に先鋒と會見して以前の盟を成し遂げて和睦いたしたいと思ふのでありますと曰つた。行長は、はじめには、之を信用しなかつたが、綎が唯た一騎にて、道に物見をして居るのを、城の上から見おろしたので、そこで、之を信じ、將に城を出でゝ行つて會合しやうとした。さうすると、我が日本の兵で、降參して綎の部下に在つた者が、行長の爲めに、綎の謀をもらしたので、行長は、驚いて引き還した。綎は怒つて攻め寄せて來たが、行長は擊つて之を退却させた。

清正亦竣蔚山役。糧多兵勇。人思一戰。九月。麻貴至溫井。懲前敗。堅壁不敢出。清正屢出戰。擊走貴兵。立花宗茂在釜山。自請以五百人往救清正。値明五千人于元濱。乘曉霧薄擊。克之。遂追北。或以衆寡不敵止之。宗茂曰。敵馬足亂。可追。不追。視我寡也。追擊復克之。既舍。逸明囚。設五伏以待。曰。吾乃視寡而誘之也。夜半。明兵來襲。伏起。復克之。明日。未至蔚山數十里。與清正夾擊麻貴。大克之。

字解【竣】……をはる、事畢る也。【役】……工事。【値】……遇ふ。【薄擊】……せまりうつ。【馬足亂】……馬の足がそろはぬ。隊伍の亂れたるを云ふ。【視】……しめす。【逸明囚】……逸は縱なり、はなつ。明の捕虜をわざとにがし返して、其者によりて、味方の樣子を敵に知らせる也。

講義 清正も亦、蔚山の工事を畢り、兵糧は多く、兵士は勇み立つて、人々皆、一たび戰爭したいと思うて居つた。九月に、麻貴は、溫井に至つたが、前回の敗軍に懲りて、城壁を堅くし、其中に立て籠つて、むざとは出でやうとしなかつた。清正は、たび〳〵、城を出でゝ戰ひ、擊つて麻貴の兵を敗走させた。立花宗茂は、釜山に居つたが、自ら請うて、五百人の兵を引き連れて、出かけて往つて清正を救はうとすると、その途中で、明の兵五千人に元濱に於て出遇つたが、朝霧の深く立ち籠めて居るに乘じて、近づき迫つて擊つて、之に勝ち、それから、遂に、敵兵の逃げ走るを追つかけた。すると、ある人が、敵兵は人數が多く我が兵は少數であつて大層な相違であるから御止めなされよと曰つた。すると、宗茂が曰ふには、敵の馬の足が、しどろもどろになつて居つて、揃はぬから、追つかけても宜しいのである。若し追つかけないときは、敵兵に、我が兵の少數であることを見透されるであらうと曰つて、追つかけて擊つて、ふたゝび之に勝つた。やがて、宗茂は、すでに宿つた後、明の捕虜を放つて、五個所に伏兵を設けて置いて、敵兵の攻め寄せるを待つて居つて、そして曰ふには、吾は、わざと、小勢であることを、敵に示して、敵をおびき寄せるのであると曰つた。すると、夜なか頃に、明の兵が、果して來つて不意擊したが、伏兵が起つて、また、明の兵に勝つた。明〳〵る日、蔚山の手前數十里(朝鮮の里數)の處で、清正とともに、麻貴を夾み擊ちにして、大勝利を得た。

是時。義弘及子忠恒。在新寨。與董一元夾晉江而軍。茅國器。聞島津氏與豐臣氏。爲宿仇。以爲可間也。乃作檄數秀吉罪。遣辯士以搖義弘。義弘叱而卻之。國器又說一元曰。義弘築望津。東陽。泗川。永春。昆陽。金海。固城。新寨八壘。勢如長蛇。望津。其首也。擊其首。餘易制耳。一元然之。會明捕虜郭國安。在望津。送欵於一元。約爲內應。擧火爲信。至期。國器引兵臨江。我兵亦出寨臨江。已而寨中火起。吾兵顧而救之。明兵乃渡。陷望津。

忠恒在新寨。欲赴援。義弘曰。未可。望津兵退守泗川。而一元已分兵襲永春。昆陽。燒其積聚。悉軍渡江。遂乘夜襲泗川。我守將出戰。斬明驍將李寧。盧得功。潰圍走新寨。忠恒復請赴援。義弘曰。未可。一元已取數壘。而島津氏不出。意甚輕之。進燒東陽倉。火晝夜不滅。遂向新寨。國器止之。勸先攻金海。固城。以奪其羽翼。不聽。十月。朔。一元合兵。以國器及葉邦榮。彭信古爲先鋒。以藍芳威爲後軍。攻新寨。自卯至巳。以木砲擢大門及城墻。薄斬拔柵。城兵殊死戰。會砲炸烟焰四迸。明陣亂。義弘目忠恒曰。可以出矣。忠恒唯而起。與數千騎闘門。直衝明陣。明陣皆披靡。而國器。邦榮。以萬人横入于城。義弘豫勒五千人。迎擊走之。芳威望見先走。明軍遂大潰。義弘。忠恒追奔逐北。斬首三萬餘級。明兵爭走相擠。伏尸二百餘里。我軍以亡糧不復窮追。追至望津。乃還。而秀吉之訃適至。諸將潛相告言。稍稍治歸裝。而明都御史在吳者。諜知秀吉沒。報告明主。明主大喜。舉朝相賀。於是。趣邢玠等躡我軍。郭國安亦走告之明羣帥。羣帥創新寨之敗。不敢進。

字解【忠恒】……後、中納言家久。【新寨】……慶尙道の南邊に在り。【宿仇】……音シユクキウ。ふるき怨ある間柄。【間】……離間する、仲を惡くする。【搖】……うごかす、其心を搖かしまどはす。【望津】……【東陽】……【泗川】……【永春】……【昆陽】……【金海】……【固城】……並に慶尙道の南邊に在り。【如長蛇】……處々のとりでが、長蛇の宛轉たるが如く、首尾呼應して、相互に應援の連絡あるを云ふ。【積聚】……音シヨウ。貯蓄するところの軍糧芻秣等を云ふ。【奪其羽翼】金海、固城は新寨の羽翼なり。羽翼を斷ちて新寨を孤立せしめんとする也。【炸】……字典に此字なし。按ずるに、裂くる也。【迸】……ほとばしる、走逸なり。【唯而起】……はいと云つて起ち上る。【訃】……音フ、喪を告ぐる也。秀吉薨去の通知。【創】……懲りる。

講義この時に、義弘及びその子忠恒は、新寨に居つて、董一元と、晉江を夾んで陣取つた。茅國器は、島津氏が豐臣氏と古き怨ある間柄であると云ふ事を聞いて、仲を惡くすることが出來ると思うたので、そこで、檄文を作つて、秀吉の罪を數へ立て、辯舌の善き人を遣はして、義弘を説いて、其心を動かしまどはさうとした。すると、義弘は、叱り付けて之を退けた。國器は、又、一元に說き勸めて曰ふには、義弘は、望津、東陽、泗川、永春、昆陽、金海、固城、新寨の八つのとりでを築いたが、其形勢は長い蛇のうね〳〵して居るが如く、互に應援の連絡がある。そして、望津が、その蛇の首である。されば、其首たる望津を擊つたならば、其他の者は、始末をつけ易いであらうと曰つた。一元は、此言葉を如何にも尤も至極であると思うた。折しも、明の捕虜郭國安が、望津に在つて、一元に內通して、裏切することを約束し、火を擧げて相圖とすることにした。かくて、其期日に至つて、國器は、兵を引き連れて、江に臨むと、我が日本兵も亦、とりでを出で、江に臨んで、對陣した。とかくする中に、とりでの中に、火が燃え上つたので、吾が兵は、振り返つて之を救はうとし、明の兵は、そこで、江を渡つて、望津を攻め落した。忠恒は、その時に新寨に居つたが、出かけて行つて望津を援けやうとした。義弘が曰ふには、未だいけないと曰つて、許さなかつた。望津の兵は、退却して泗川を守つた。そして、一元は、已に兵を手分けして、永春と昆陽とを不意擊し、その貯蓄してあつた兵糧馬秣武器などを燒き、殘らずの軍勢を引き連れて、江を渡り、それから、遂に夜に乘じて、泗川を不意擊した。我が泗川の守將は、出で、戰ひ、明の武勇なる大將李寧と盧得功とを斬り、圍を突き破つて、新寨に逃げ走つた。すると、忠恒は、また、出掛けて行つて援けたいと請うた。義弘が曰ふには、未だいけないと曰つて、許さなかつた。かくて、一元は、すでに、數箇所のとりでを攻め取つたのに、然るに、島津氏が打つて出でなかつたので、心の中に、はなはだ、島津氏を輕蔑し、進んで東陽倉を燒いたが、その火は晝夜消えなかつた。一元は、それから、遂に新寨に向はうとした。すると、國器は、之を止めて、先づ金海と固城とを攻めて新寨の羽翼を奪はんとを勸めたけれども、一元は聞き入れなかつた。十月の朔に、一元は、兵を合はせ、國器及び葉邦榮、彭信古を先鋒となし、藍芳威を後軍として、新寨を攻め、卯の刻（午前六時頃）より巳の刻（午前十時頃）に至るまで、木砲を以て、大門及び城の垣を擊ち碎き、濠の近くに攻め寄せ、逆茂木を拔いた。新寨の城兵は、必死になつて戰つた。折しも、敵の大砲が破裂して烟や焰が四方にほとばしつて、明の陣中が騷ぎ亂れた。すると、義弘は、忠恒に目くばせして曰ふには、今こそ討つて出でよと曰つた。忠恒は、はいと云つて、起ち上り、數千騎の兵とともに、門を開き、直に明の軍の陣を衝くと、明の軍の陣は、皆、其勢に恐れて、披き靡いた。そして、國器と邦榮とは、一萬人の兵を引き連れて、横合から、城に入らうとした。義弘は、前以て、五千人の兵を勢揃へして、迎へ擊つて之を敗走させた。芳威は、之を望み見て、先づ逃げ走つた。そこで、明の軍勢は、とう〳〵大に崩れ亂れて逃げ走つた。義弘と忠恒は、明の兵の逃げ走るを追つかけて、首を斬ること三萬餘級であつた。明の兵は、先を爭うて逃げ走り、相互に押し倒し合ひ、地に伏したふれた屍骸は二百餘里（朝鮮の里數）も引き續いた。けれども、我が日本軍は兵糧が無かつたので、何處までもと追つひめることを爲さず、望津まで追つかけて行つて、そこで引き返した。そして、秀吉薨去の報知が、丁度其時に到著したので、諸大將は、ひそかに相告げ合つて、ぼつ〳〵と、歸り支度をした。そして、明の都御史で、吳に居る者が、間者を入れて、秀吉が死んだことを知つて、此事を明主に報告した。

明主は大に喜び、朝廷の者殘らず互に相賀し、こゝに於て、邢玠等を催促して、我が日本軍を追擊せしめやうとした。郭國安も亦、走つて此事を、明の大將どもに報告したけれども、明の大將どもは、新寨の敗北に懲りたので、敢て進まうとはしなかつた。

當是時。我邦訛言。明大擧扼我兵歸路。德川。前田二老皆欲親往。衆議止之。使藤堂高虎代之。來至行臺。得新寨捷書。乃止。而釜山軍已從秀秋還。對馬。清正。義弘。次收兵還。行長亦欲還。而劉綎復來圍之。清正與義弘返擊。拔行長。皆上舟。陳璘。鄧子龍。李舜臣。陳蠶。馬文煥。陶明宰等。以兵艦數千艘要之海中。清正已去。義弘鬪且卻。至加德嶋。明兵四集於行長。行長勵士卒止戰。會明人失火器。反中其船。我兵因奮擊。盡其兵。斬子龍。舜臣來救。亦射殺之。進圍璘。幾獲之。而蠶。文煥繼至。銃砲交發。盡焚我舟。行長上一嶋。奪敵寨據之。明兵艦環守焉。行長乘夜獨遁。歸於義弘。義弘返。載其餘衆。與蠶。明宰戰。擒明宰。而還。皆至加德。劉綎以生兵來攻。義弘。行長擊卻之。明軍不敢復追躡。我軍盡達對馬。

字解【失火器反中其船】……銃砲の取り扱ひ方を失策して自分の船に中りし也。

講義この時に當りて、我が邦に於ては、誤つて風聞して曰ふには、明が大軍を以て我が兵の歸り路を喰ひ止めて居ると曰つたので、德川、前田の二大老は、いづれも皆、自身に出かけやうとしたが、衆議、之を止めて、藤堂高虎をして代つて行かしめることにした。やがて、高虎は、來つて肥前の那古耶なる行臺まで到著すると、新寨にて大勝利を得たとの報告が到著したので、そこで、其儘に止めた。そして、釜山に屯營して居つた軍は、已に、秀秋に從つて、對馬に還つた。清正、義弘も、次いで兵を取りまとめて還り、行長も亦還らうとしたが、劉綎が、ふたゝび來つて、行長を圍んだので、清正は、義弘とともに引き返し擊つて、行長を敵の圍みの中から救ひ出し、いづれも皆、舟に乘つた。すると、陳璘、鄧子龍、李舜臣、陳蠶、馬文煥、陶明宰等が、兵船數千艘を引き連れて、之を海中に待ち受けた。清正は、已に去り、義弘は鬪ひながら退却して、加德島に至つた。明の兵は、四方から、行長を目がけて集まつた。行長は、士卒をはげまして、止まり戰つた。折しも、明の人は、火器の取り扱ひ方をやりそこなつて、反つて己が船にあたつたので、我が兵は、そこで、奮ひ擊つて、其兵を皆殺しにし、子龍を斬つた。舜臣が來り救うたが、亦、舜臣をも射殺し、我が兵は、進んで璘を圍んで、ほとんど之を討ち取ちうとした。しかるに、蠶、文煥が、引きつゞいて至り、鐵砲と大砲とを、こもごも打ち出し、殘らず我が舟を焚いた。行長は、ある息に上陸して、敵のとりでを奪ひ取り、之に立て籠つた。明の兵船が、之を取り卷いた。行長は、夜の暗闇に乘じて、ひとり遁れて、義弘の處に逃げ込んだ。すると、義弘は、引き返して、其殘つて居る兵士を船に載せ、蠶、明宰と戰ひ、明宰を擒にして還り、いづれも皆、加德に至つた。劉綎が、新手の兵を引き連れて、來り攻めたが、義弘、行長は、擊つて、之を退却させた。明の軍勢は、敢て再び追つかけやうとはしなかつた。かくて、我が日本の軍勢は、殘らず、對馬に到著した。

十一月。諸將整軍至那古邪。兩奉行迎之。宣秀吉遺命。諸將皆泣。三成曰。公等詣伏見。當各之國。來秋會同。以茗讌相招。清正曰。諸君好爲茗讌。我守孤城七年矣。勞悴纔存。毋茗毋酒。當炊稗粥答之耳。三成嗛之。先是。行長德清正救順天也。欲釋憾焉。清正曰。吾亦欲之矣。如子善治部何。自是相讎益深。於是。諸將相率詣伏見。謁秀賴。諸老慰勞之。令罷之國。以嗣君猶幼。國家多難。不敢自逸。俟明年去。明年。大老。奉行。論征韓功。賜義弘以公田在薩摩者四萬石。清正。行長以下。得賞有差。

字解【兩奉行】……淺野長政、石田三成。【會同】……一所にあつまる、會合する。【茗讌】……音メイエン。茶の湯の會。【勞悴】……音ラウスヰ。つかれてやつれる。【稗粥】……音ハイシユク。ひえのかゆ。【嗛】……音ケン又はカン。恨む、ふくむ。【不敢自逸】……敢てすゞには休息しやうとせぬ。【公田】……御上の田地。【治部】……石田三成。治部少輔たり。

講義十一月に、諸大將は、軍勢を整へて、那古耶に到著した。淺野長政、石田三成の兩奉行は、之を迎へ、秀吉の遺言の命令を述べると、諸大將は、いづれも皆、泣いた。三成が曰ふには、貴殿等は、伏見に參つて、秀賴公に謁見し、それから、銘々、領國に還られるが宜しう御座る。來年の秋には、一所に集まつて、茶の湯の會でも催して相互に招き合ふことに致しましやうと曰つた。清正が曰ふには、諸君は、好んで茶の湯の

會を催されるが、我は、孤立したる城を守ること七年に及び、つかれやつれて、やつと生き長らへて居るだけで御座るから、我は、茶もいらず、酒もいらず、稗の粥でもたいて御返禮をするだけの事で御座ると曰つたので、三成は、之を恨んだ。これより以前に、行長は、清正が順天を救つてくれたのを有りがたく思うたので、これまでの遺恨を忘れて、仲善くしやうといつたが、清正が曰ふには、吾も亦左樣いたしたいと思うて居る。けれども、貴殿は、治部(卽ち三成)と仲が善いので、致し方が無いと曰つた。これより、清正と行長とは、相互に讐とすること、ます〳〵深くなつた。こゝに於て、諸大將は引き連れ合つて、伏見に至り、秀頼に謁見した。大老中老などが、之を慰勞し、罷めて領國に行かしめるとにしたが、諸大將は、若君はまだ幼稚であり、國家物騷がしい折柄であつたので、皆、遠慮して、すぐには休息しやうとせず、明年を待つて、立ち去ることにした。かくて、明くる年に、大老、奉行たちは、朝鮮征伐の功勞を論定し、義弘には、薩摩に在る公田四萬石を賜はり、清正、行長以下の人は、それ〴〵、色々なる賞與を貰つた。

日本外史講義卷之十六 終

漢文講義第廿四編外史ノ三

定價金五拾錢

大正三年十一月廿三日印刷
大正三年十一月三十日發行

編輯發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地　興文社　代表者　鹿島長次郎

印刷所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地　興文社工場

發行所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地　振替貯金口座東京一八四四番　興文社

著作權所有

213
210

終